596
244

別書誌
合乙冊

昭和五年四月十四日

誰が殺したか?

112

葉山嘉樹

596-244
1200501527999

葉山嘉樹

誰が殺したか？

日本評論社

日本プロレタリア傑作選集

596-244

目次

淫賣婦……1
誰が殺したか？……三〇
海底に眠るマドロスの群……一四二

淫賣婦

此作は、名古屋刑務所長、佐藤乙二氏の、好意によつて産れ得たことを附記す。

―一九二三、七、六―

一

若し私が、次に書きつけて行くやうなことを、誰かゝら、「それは事實かい、それとも幻想かい、一體どつちなんだい？」と訊ねられるとしても、私はその中のどちらだとも云ひ切る譯に行かない。私は自分でも此問題、此事件を、十年の間と云ふもの、或る時はフト「俺も怖しいことの體驗者だなあ」と思つたり、又或時は「だが、此事はほんの俺の幻想に過ぎないんぢやないか、たゞそんな風な氣がすると云ふ丈けのことぢやないか、でなけりや……」とこんな風に、私にもそれがどつちだか分らずに、この妙な思ひ出は益々濃厚に精細に、私の一部に彫りつけられる。然しだ、私は言ひ譯をするん

ぢやないが、世の中には迚も筆では書けないやうな不思議なことが、筆で書けることよりも、餘つ程多いもんだ。たとへば、人間の一人々々が、誰にも言はず、書かずに、どの位多くの祕密な奇怪な出來事を、胸に抱いたまゝ、或は忘れたまゝ、今までにどの位死んだことだらう。現に私だつて今こゝに書かうとすることよりも、百倍も不思議な、あり得べからざる「事」に數多く出會つてゐる。そしてその事等の方が遙に面白くもあるし、又「何か」を含んでゐるんだが、どうも、いくら蹈ん張つてもそれが書けないんだ。檢閲が通らないだらうなどと云ふことは、てんで問題にしないでゐても、自分で祕密にさへ書けないんだから仕方がない。

だが下らない前置を長つたらしくやつたものだ。

私は未だ極道な青年だつた。船員が極り切つて着てゐる、續きの菜つ葉服が、矢つ張り私の唯一の衣類であつた。

私は半月餘り前、フランテンの歐洲航路を終へて歸つた許りの所だつた。船は、ドックに入つてゐた。

私は大分飲んでゐた。時は蒸し暑くて、埃つぽい七月下旬の夕方、さうだ一九一二年頃だつたと覺えてゐる。讀者よ！　豫審調書ぢやないんだから、餘り突つ込まないで下さい。

そのムン〳〵する蒸し暑い、プラタナスの散歩道を、私は歩いてゐた。何しろ横濱のメリケン波戸場の事だから、些か恰好の異つた人間たちが、澤山、氣取つてブラついてゐた。私はその時、私がどんな階級に屬してゐるか、民平――これは私の仇名なんだが――それは失禮ぢやないか、などと云ふことはすつかり忘れて歩いてゐた。

流石は外國人だ、見るのも氣持のいゝやうなスッキリした服を着て、澤山歩いたり、どうしても、どんなに私が自惚れて見ても、勇氣を振ひ起して見ても、寄りつける譯のものぢやない處の日本の娘さんたちの、見事な――一口に云へば、ショウウィンドウの内部のやうな散歩道を、私は一緒になつて、悠然と、續きの菜つ葉服を見て貰ひたいためでゝもあるやうに、頭を上げて、手をポケットで、いや、お恥しい話だ、私はブラ〳〵歩いて行つた。

ところで、此時私が、自分と云ふものをハッキリ意識してゐたらば、ワザ〳〵私は道化役者になりやしない。私は確に「何か」考へてはゐたらしいが、その考の題目となつてゐたものは、よし、その時私がハッと氣がついて「俺はたつた今まで、一體何を考へてゐたんだ」と考へて見ても、もう思ひ出せなかつた程の、つまりは飛行中のプロペラのやうな「速い思ひ」だつたのだらう。だが、私は

その時「ハツ」とも思はなかつたらしい。

客觀的には憎つたらしい程圖々しく、しつかりとした足どりで、歩いたらしい。しかも一つ處を幾度も幾度も、サロンデッキを逍遙する一等船客のやうに往復したらしい。

電燈がついた。そして稍々暗くなつた。

一方が公園で、一方が南京町になつてゐる單線電車通りの丁字路の處まで私は來た。若し、そこで私をひどく驚かした者が無かつたなら、私はそこで丁字路の角だつたことなどには、勿論氣がつかなかつたゞらう。處が、私の、今の今まで「此世の中で俺の相手になんぞなりさうな奴は、一人だつてゐやしないや」と云ふ私の觀念を打ち破つて、私を出し抜けに相手にする奴があつた。「オイ、若けえの」と、一人の男が一體どこから飛び出したのか、危く打つかりさうになるほどの近くに突つ立つて押し殺すやうな小さな聲で呻くやうに云つた。

「ピー、カンカンか」

私はポカンとそこへつゝ立つてゐた。私は餘り出し抜けなので、その男の顔を穴のあく程見つめてゐた。その男は小さな、蛞蝓のやうな顔をしてゐた。私はその男が何を私にしようとしてゐるのか分らなかつた。どう見たつてそいつは女ぢやないんだから。

「何だい」と私は急に怒鳴つた。すると、私の聲と同時に、給仕でも飛んで出て來るやうに、二人の男が飛んで出て來て私の兩手を確りと掴んだ。「相手は三人だな」と、何と云ふことなしに私は考へた。

――こいつあ少々面倒だわい。どいつから先に蹴つ飛ばすか、うまく立ち廻らんと、この勝負は俺の負けになるぞ。作戰計畫を立つてからやれ、いゝか民平！　――私は据えられたやうに立つて考へてゐた。

「オイ、若えの、お前は若え者がするだけの樂しみを、二分で買ふ氣はねえかい」

蛞蝓は一足下りながら、さう云つた。

「一體何だつてんだ、お前たちは。第一何が何だかさつぱり話が分らねえぢやねえか、人に話をもちかける時にや、相手が返事の出來るやうな物の言ひ方をするもんだ。喧嘩なら喧嘩、泥坊なら泥坊となな。」

「それや分らねえ、分らねえ筈だ、未だ事が持ち上らねえからな、だが二分は持つてるだらうな」

私はポケットからありつたけの金を攫み出して見せた。

もうこれ以上飲めないと思つて、バーを切り上げて來たんだから、銀銅貨取り混ぜて七八十錢もあつたゞらう。

「うん、餘る位だ。ホラ電車賃だ」

そこで私は、十錢銀貨一つだけ殘して、すつかり捲き上げられた。

「どうだい、行くかい」蛞蝓は訊いた。

「見料を拂つたぢやねえか」と私は答へた。私の右腕を摑んでた男が、「こつちだ」と云ひながら先へ立つた。

私は十分警戒した。こいつ等三人で、五十錢やそこらの見料で一體何を私に見せようとするんだらう。然も奴等は前拂で取つてゐるんだ。若し私がお芽出度く、ほんとに何にか見られるなどと思ふんなら、目と目とから火花を見るかも知れない。私は蛞蝓に會ふ前から、私の知らない間から、——こいつ等は俺を附けて來たんぢやないかな——

だが、私は、用心するしないに拘らず、當然、支拂つたゞけの金額に値するだけのものは見得ることになつた。私の目から火も出なかつた。二人は南京街の方へと入つて行つた。日本が外國と貿易を始めると直ぐ建てられたらしい、古い煉瓦立の家が並んでゐた。ホンコンやカルカッタ邊の支那人街と同じ空氣が此處にも溢れてゐた。一體に、それは住居だか倉庫だか分らないやうな建て方であつた。二人は幾つかの角を曲つた擧句、十字路から一軒置いて——この一軒も人が住んでゐないんだか分らない家——の隣へ入つた。方角や歩數等から考へると、私が、汚れた孔雀のやうな恰好で散歩してゐた、先刻の海岸通りの裏邊りに當るやうに思へた。

私たちの入つた門は半分丈けは錆びついてしまつて、半分だけが、丁度一人だけ通れるやうに開いてゐた。門を入るとすぐそこには塵埃が山のやうに積んであつた。門の外から持ち込んだものだか、門内のどこからか持つて來たものだか分らなかつた。塵の下には、塵箱が壞れたまゝ、へしやげて置かれてあつた。が上の方は裸の埃であつた。それに私は門を入る途端にフト感じたんだが、この門には、この門がその家の門であると云ふ、大切な相手の家がなかつた。塵の積んである二坪ばかりの空地から、三本の坑道のやうな路地が走つてゐた。

一本は眞正面に、今一本は眞左へ、どちらも表通りと裏通りとの關係の、裏路の役目を勤めてゐるのであつたが、今一つの道は、眞右へ五間ばかり走つて、それから四十五度の角度で、どこの表通りにも關りのない、金庫のやうな感じのする建物へ、こつそりと壁にくゝついた蝙蝠のやうに、斜に密着してゐた。これが晝間見たのだつたら何の不思議もなくて倉庫につけられた非常階段だと思へるだらうし、又それほどにまで氣を留めないんだらうが、何しろ、私は胸へピッタリメスの腹でも當てられたやうな戰慄を感じた。

私は豫感があつた。この歪んだ階段を昇ると、倉庫の中へ入る。入つたが最後どうしても出られないやうな裝置になつてゐて、そして、そこは、支那を本場とする六神丸の製造工場になつてゐる。てつきり私は六神丸の原料としてそこで生き膽を取られるんだ。

私はどこからか、その建物へ動力線が引き込まれてはゐないかと、上を眺めた。多分死なゝい程度の電流をかけて置いて、ピク〳〵してる生き膽を取るんだらう。でないと出來上つた六神丸の效き目が尠いだらうから。だが、――私はその階段を昇りながら考へつゞけた――起死回生の靈藥なる六神丸が、その製造の當初に於て、その在存の最大にして且つ、唯一の理由なる生命の回復、或は持續を平然と裏切つて、却つて之を殺戮することによつてのみ成り立ち得る。とするならば、「六神丸それ自體は一體何に似てるんだ」そして「何のためにそれが必要なんだ」それは恰も今の社會組織そつくりぢやないか。××××××××××××××××××××××××××。

だが、私たちは舞臺へ登場した。

二

そこは妙な部屋であつた。鰮の罐詰の内部のやうな感じのする部屋であつた。低い天井と床板と、四方の壁とより外には何にも無いやうなガランとした、濕つぽくて、黴臭い部屋であつた。室の眞中からたつた一つの電燈が、落葉が蜘蛛の網にでもひつかゝつたやうにボンヤリ下つて、灯つてゐた。テーブルも椅子もなかつた。恐しくリノリュームが膏藥のやうに床板の上へ所々へ貼りついてゐた。〳〵と汗が滲み出したが、何となくどこか寒いやうな氣持があつた。それに黴の臭ひの外に、胸の惡くなる特殊の臭氣が、間歇的に鼻を衝いた。その臭氣には靄のやうに影があるやうに思はれた。

疊にしたら百枚も敷けるだらう室は、五燭らしいランプの光では、監房の中よりも暗かつた。私は入口に佇んでゐたが、やがて眼が闇に馴れて來た。何にもないやうにおもつてゐた室の一隅に、何かの一固りがあつた。それが、ビール箱の蓋か何かに支へられて、立つてゐるやうに見えた。その蓋から一方へ向けてそれで蔽ひ切れない部分が二三尺はみ出してゐるやうであつた。だが、どうもハッキリ分らなかつた。何しろ可成り距離はあるんだし、暗くはあるし、けれども私は體中の神經を目に集めて、その一固りを見詰めた。

私は、ブル〳〵震ひ始めた、迚も立つてゐられなくなつた。私は後ろの壁に凭れてしまつた。そして坐りたくてならないのを强ひて、ガタ〳〵震へる足で突つ張つた。眼が益々闇に馴れて來たので、

蔽ひからはみ出してゐるのが、むき出しの人間の下半身だと云ふことが分つたんだ。そしてそれは六神丸の原料を控除した下用な部分なんだ！

私は、そこで自暴自棄な力が湧いて來た。私を連れて來た男をやつゝける義務を感じて來た。それが義務であるより以上に必要止むべからざることになつて來た。私は上着のポケットの中でソーツとシーナイフを握つて、傍に突つ立つてるならず者の樣子を窺つた。奴は矢つ張り私を見て居たが突然口を切つた。

「あそこへ行つて見な。そしてお前の好きなやうにしたがいゝや、俺はな、こゝらで見張つてゐるからな」このならず者はかう云ひ捨てゝ、階段を下りて行つた。

私はひどく醉つ拂つたやうな氣持だつた。私の心臟は私よりも慌てゝゐた。ひどく毆りつけられた後のやうに、頭や、手足の關節が痛かつた。

私はそろ〳〵近づいた。一歩一歩臭氣が甚しく鼻を打つた。矢つ張りそれは死體だつた。そして極めて微かに吐息が聞えるやうに思はれた。だが、そんな馬鹿なこたあない。死體が息を吐くなんて——だがどうも息らしかつた。フー、フ！と極めて微かに、私は幾度も耳のせゐか、神經のせゐにして見たが、「死骸が溜息をついてる」とその通りの言葉で私は感じたものだ。と同時に腹ん中の一切の道具が咽喉へ向つて逆流するやうな感じに捕はれた。然し、

然し今はもう總てが目の前にあるのだ。

そこには全く殘酷な畫が畫かれてあつた。

ビール箱の蓋の蔭には、二十二三位の若い婦人が、全身を全裸のまゝ仰向きに横たはつてゐた。彼女は腐つた一枚の疊の上にゐた。そして吐息は彼女の肩から名々が最後の一滴であるやうに、搾り出されるやうであつた。

彼女の肩の邊から、枕の方へかけて、未だ彼女がいくらか物を食べられる時に嘔吐したらしい汚物が、黑い血痕と共にグチャグチャに散ばつてゐた。髮毛がそれで又固められてゐた。それに彼女の×××××××××××がねばりついてゐた。そして、頭部の方からは酸敗した惡臭を放つてゐたし肢部からは、癌腫の持つ特有の惡臭が放散されてゐた。こんな異樣な臭氣の中で人間の肺が耐へ得るかどうかと、危ぶまれるほどであつた。彼女は眼をパッチリと見開いてゐた。そして、その瞳は私を見てゐるやうだつた。が、それは多分何物をも見てはゐなかつただらう。勿論、彼女は、私が、彼女の全裸の前に突つ立つてゐることも知らなかつたらしい。私は婦人の足下の方に立つて、此場の情景に見惚れてゐた。私は立ち盡したまゝ、いつまでも交ることのない、併行した考へで頭の中が一杯に

なつてゐた。

哀れな人間がこゝにゐる。

哀れな女がそこにゐる。

私の眼は据えつけられた二つのプロジェクターのやうに、その死體に投げつけられて、動かなかつた。それは死體と云つた方が相應しいのだ。

私は白狀する。實に苦しいことだが白狀する。——若しこの横はれるものが、全裸の女でなくて全裸の男だつたら、私はそんなにも長く此處に留つてゐたかどうか、そんなにも心の激動を感じたかどうか——

私は何ともかとも云ひやうのない心持ちで興奮のてつぺんにあつた。私は此有樣を、「若い者が樂しむこと」として「二分」出して買つて見てゐるのだ。そして「お前の好きなやうにしたがいゝや」とあの男は席を外したんだ。

無論、此女に抵抗力がある筈がない。娼妓は法律的に抵抗力を奪はれてゐるが、此場合は生理的に奪はれてゐたのだ。それに此女だつて性慾の滿足のためには、××よりはいゝのだ。何と云つても未だ體溫を保つてゐるんだからな。それに一番困つたことには、私が船員で、若いと來てるもんだから、いつでもグーグー喉を鳴らしてるつてことだ。だから私は「好きなやうに」することが出來るんだ。それに又、今まで私と同じやうにこゝに連れて來られた（若い男）は、一人や二人ぢやなかつただらう。それが一々××××どうかは分らないが、皆が皆辟易したとも云ひ切れまい。いや兎角く此道ではブレーキが利きにくいものだ。

だが、私は同時に、これと併行した外の考へ方もしてゐた。

彼女は熱い鐵板の上に轉がつた蠟燭のやうに瘠せてゐた。未だ年にすれば澤山ある筈の黑髪は汚物や血で固められて、捨てられた綜絽帶のやうだつた。字義通りに彼女は瘠せ衰へて、棒のやうに見えた。

幼い時から、あらゆる人世の慘苦と戰つて來た一人の女性が、勞働力の最後の殘滓まで賣り盡して愈々最後に賣るべからざる貞操まで賣つて食ひつないで來たのだらう。

彼女は、人を生かすために、人を殺さねば出來ない六神丸のやうに、又は一人も殘らずのプロレタリアがさうであるやうに、自分の胃の腑を膨らすために、腕や生殖器や神經までも嚙み取つたのだ。主きるために自滅してしまつたんだ。外に方法がないんだ。

彼女もきつとこんなことを考へたことがあるだらう。

「ア、私は働きたい。けれども私を使つて呉れる人はない。私は工場で餘り乾いた空氣と、高い溫度と綿屑とを吸ひ込んだから肺病になつたんだ。肺病になつて働けなくなつたから追ひ出されたんだ。だけど使つて呉れる所はない。私が働かなけりや年とつたお母さんも私と一緒に生きては行けないんだのに」そこで彼女は數日間仕事を求めて、街を、工場から工場へと彷徨うたのだらう。それでも彼女は仕事がなかつたんだらう。「私は操を賣らう」そこで彼女は生命力の最後の一滴を涸らしてしまつたんではあるまいか。そしてそこでも愈々働けなくなつたんだ。で、遂々こゝへこんな風にして、もう生きる希望さへも捨てゝ、死を待つてるんだらう。

三

私は彼女が未だ口が利けるだらうか、どうだらうかゞ知りたくなつた。恥しい話だが、私はゝお前さんは未だ生きてゐたいかい」と聞いて見る慾望をどうにも抑へられなくなつた。云ひかへれば、人間はこんな狀態になつた時、一體どんな考を持つもんだらう、と云ふことが知りたかつたんだ。

私は思ひ切つて、女の方へズツと近寄つてその足下の方へしやがんだ。その間も絶えず彼女の目と體とから私は目を離さなかつた。と、彼女の眼も矢つ張り私の動くのに連れて動いた。私は驚いた。そして馬鹿々々しいことだが眞赤になつた。私は一應考へた上、彼女の眼が私の動作に連れて動いたのは、たゞ私がさう感じた丈けなんだらう、と思つて、よく醫師が臨終の人にするやうに、彼女の眼の上で私は手を振つて見た。

彼女は瞬きをした。彼女は見てゐたのだ。そして呼吸も可成り整つてゐるのだつた。

私は又彼女の足下近くへ、急に體から力が抜け出したやうに感じたので、しやがんだ。

「あまりひどいことをしないでね」と、女はものを言つた。その聲は力なく、途切れ〳〵ではあつたが、臨終の聲と云ふほどでもなかつた。彼女の眼は「何でもいゝからそうつとしといて頂戴ね」と言つてるやうだつた。

私は義憤を感じた。こんな狀態の女を搾取材料にしてゐる三人の蛞蝓共を、「叩き壞してやらう」と決心した。

「誰かがひどくしたのかね。誰かに苛められたの」私は入口の方をチヨツと見やりながら訊いた。

もう戸外はすつかり眞つ暗になつてしまつた。此だゞつ廣い押しつぶしたやうな室は、いぶつたランプのホヤのやうだつた。

「いつ頃から君はこゝで、こゝな風にしてゐるの」私は、努めて平然としようと骨折りながら訊いた。

彼女は今、私が足下の方に踞つたので、私の方を見ることを止めて、上の方に眼を向けてゐた。

私は、私の眼の行方を彼女に見られることを非常に怖れた。私は實際、正直の所其時、英雄的な、人道的な、一人の禁欲的な青年であつた。全く身も心もそれに相違なかつた。だから、私は彼女に、

×××××××××××××××××××××××××××××××××××。眼だけを何故私は征服することが出來なかつたゞらうか。

若し彼女が私の眼を見やうものなら、「この人もやつぱり外の男と同じだわ」と思ふに違ひないだらう。さうすれば、今の私のヒロイックな、人道的な行爲と理性とは、一度に脆く切つて落されるだらう。私は恐れた。恥ぢた。

――俺はこの女に對して性慾的などんな些細な興奮だつて惹き起されてはゐないんだ。そんな事を考へる丈けでも間違つてるんだ。それは見てる。見てるには見てるが、それが何だ。――私は自分で自分に言ひ譯をしてゐた。

彼女が女性である以上、私が衝動を受けることは勿論あり得る、だが、それはこんな場合であつてはならない。この女は骨と皮だけになつてゐる。そして永久に休息しようとしてゐる。この哀れな私の同胞に對して、今まで此室に入つて來た者共が、どんな殘忍なことをしたか、どんな陋劣な恥づべ

き行をしたか、それを聞かうとした。そしてそれ等の振舞が呪はるべきであることを語つて、私は自分の善良なる性質を示して彼女に誇りたかつた。

彼女はやがて小さな聲で答へた。

「私から何か種々の事が聞きたいの？　私は今は話すのが苦しいんだけれど、もしあんたが外の事をしないのなら、少し位話して上げてもいゝわ」

私は眞赤になつた。畜生！　奴は根こそぎ俺を見拔いてしまやがつた。再び私の體中を熱い戰慄が駈け拔けた。

彼女に話させて私は一體どんなことを知りたかつたんだらう。もう分り切つてるぢやないか、それによし分らないことがあつたにした所で、苦しく喘ぐ彼女の聲を聞いて、それでどうなると云ふんだ。

だが、私は彼女を救ひ出さうと決心した。

然し救ふと云ふことが、出來ることだらうか？　人を救ふためには××××が唯一の手段ぢやないか、自分の力で捧げ切れない重い物を持ち上げて、再び落した時はそれが愈々壞れることになるではないか。

だが、何でもかでも、私は遂々女から、十言許り聞くやうな運命になつた。

四

先刻私を案内して來た男が入口の處へ靜に、影のやうに現れた。そして手眞似で、もう時間だぜ、と云つた。

私は慌てた。男が私の話を聞くことの出來る距離へ近づいたら、もう私は彼女の運命に少しでも役に立つやうな働が出來なくなるであらう。

「僕は君の賴みはどんなことでも爲よう。君の今一番して欲しいことは何だい」と私は訊いた。

「私の賴みたいことはね。このまゝそうつとしといて呉れることだけよ。その他のことは何にも欲しくはないの」

悲劇の主人公は、私の豫想を裏切つた。

私はたとへば、彼女が三人のごろつきの手から遁げられるやうに、であるとか、又はすぐ警察へ、とでも云ふだらうと期待してゐた。そしてそれが彼女の望み少い生命にとつての最後の試みであるだらうと思つてゐた。一筋の糞だと思つてゐた。

可哀相に此女は不幸の重荷でへしつぶされてしまつたんだ。もう希望を持つことさへも怖しくなつ

たんだらう、と私は思つた。

世の中の總てを呪つてゐるんだ。皆で寄つてたかつて彼女を今日の深淵に追ひ込んでしまつたんだ。だから僕にも信賴しないんだ。こんな絶望があるだらうか。

「だけど、このまゝ、そんな事をしてゐれば、君の命はありやしないよ。だから醫者へ行くとか。お前の家へ連れて行くとか、そんな風な大切なことを訊いてるんだよ」

女はそれに對してかう答へた。

「そりや病院の特等室か、どこかの海岸の別莊の方がいゝに決つてるわ」

「だからさ。それがこゝを抜け出せないから……」

「オイ！　此女は全裸だぜ。え、オイ、そして肺病がもう迚も悪いんだぜ。僅か二分やそこらの金でさういつまでも樂しむつて譯にや行かねえぜ」

いつの間にか蛞蝓の仲間は、私の側へ來て蔭のやうに立つてゐて、かう私の耳へ囁いた。

「貴樣だちが丸裸にしたんだらう。此の犬野郎！」

私は叫びながら飛びついた。

「待て」とその男は呻くやうに云つて、私の兩手を握つた。私はその手を振り切つて、奴の横つ面を

毆つた。だが私の手が奴の横つ面へ屆かない先に私の耳がガーンと鳴つた。私はヨロ〳〵した。

「ヨシ、ごろつき奴、死ぬまでやつてやる」私はかう怒鳴ると共に、今度は固めた拳骨で體ごと奴の鼻つ柱を下から上へ向つて、小突き上げた。私は同時に頭をやられたが、然し今度は私の襲撃が成功した。相手は鼻血をダラ〳〵垂らしてそこへうづくまつてしまつた。

私は洗つたやうに汗まみれになつた。そして息切れがした。けれども事件がこゝまで進展して來た以上、後の二人の來ない中に女を抱いてゞも逃れるより外に仕樣がなかつた。

「サア、早く遁げよう！　そして病院へ行かなけりや」私は彼女に言つた。

「小僧さん、お前は馬鹿だね。その人を殺したんぢやあるまいね。その人は外の二三人の人と一緒に私を今まで養つて呉れたんだよ、困つたわね」

彼女は二人の鬪爭に興奮して、眼に涙さへ泛べてゐた。

私は何が何だか分らなかつた。

「何殺すもんか、だが何だつて？　此男がお前を今まで養つたんだつて」

「さうだよ。長いこと私を養つて呉れたんだよ」

「お前の肉の代償にか、馬鹿な！」

「小僧さん。此人たちは私を汚しはしなかつたよ。お前さんも、も少し年をとると分つて來るんだよ」

私はヒーローから、一度に道化役者に落ちぶれてしまつた。此哀れむべき婦人を最後の一滴まで搾取した、三人のごろつき共は、女と共にすつかり謎になつてしまつた。

一體こいつ等はどんな星の下に生れて、どんな廻り合せになつてゐるのだ。だが、私は此事實を一人で自分の好きなやうに勝手に作り上げてしまつてゐたのだらうか。

倒れてゐた男はのろ〳〵と起き上つた。

「青二才奴！　よくもやりやがつたな。サア今度は覺悟を決めて來い」

「オイ、兄弟、俺はお前と喧嘩する氣はないよ。俺は思ひ違ひをしてゐたんだ、惡かつたよ」

「何だ！　思ひ違ひだと。糞面白くもねえ。何を思ひ違へたんだい」

「お前等三人は俺を威かしてこゝへ連れて來たゞらう。そしてこんな女を俺に見せたゞらう。お前たちは此女を玩具にした揚句、未だこの女から搾らうとしてるんだと思つたんだ。死ぬが死ぬまで搾る太い奴等だと思つたんだ」

「まあいゝや。それは思ひ違ひと言ふもんだ」と、その男は風船玉の萎む時のやうに、張りを弛めた。

「だが、何だつてお前たちは、この女を素裸でこんな所に轉がしとくんだい。それに又何だつて見世

物になんぞするんだい」と言ひ度かつた。奴等は女の言ふ所に依れば、悪いぢやないんだが、それにしてもこんな事は明に必要以上のことだ。

——こいつ等は一體いつまでこんなことを續けるんだらう——と私は思つた。

私はいくらか自省する餘裕が出來て來た。すると非常に熱さを感じ始めた。吐く息が、そのまゝ固まりになつて、すぐ次の息に吸ひ込まれるやうな、胸の悪い蒸し暑さであつた。嘔吐物の臭氣と、癌腫らしい分泌物との臭氣は相變らず鼻を衝いた。體がいやにだるくて堪へられなかつた。私は今までの異常な出來事に心を使ひすぎたのだらう。何だか口をきくのも、此上何やかを見聞きするのも億劫になつて來た。どこにでも横になつてグッスリ眠りたくなつた。

「どれ、兎も角も歸ることにしようか、オイ、俺はもう歸るぜ」

私は、いつの間にか女の足下の方へ、腰を下してゐたことを忌々しく感じながら、立ち上つた。

「おめえたちや、皆、こゝに一緒に棲んでゐるのかい」

私は半分扉の外に出ながら振りかへつて訊いた。

「さうよ。こゝがおいらの根城なんだからな」男が、ブッキラ棒に答へた。

私はそのまゝ階段を降つて街へ出た。門の所で今出て來た所を振りかへつて見た。階段はそこからは見えなかつた。そこには、監獄の高い煉瓦塀のやうな感じのする、倉庫が背を向けてる丈けであつた。そんな所へ人の出入りがあらうなどゝ云ふことは考へられない程、寂れ果て、頽廢し切つて、見だけで、人は黴の臭を感じさせられる位だつた。

私は通りへ出ると、口笛を吹きながら、傍目も振らずに歩き出した。

私はボーレンへ向いて歩きながら、一人で青くなつたり赤くなつたりした。

五

私はボーレンで金を借りた。そして又外人相手のバーで——外人より入れない淫賣屋で——又飲んだ。

夜の十二時過ぎ、私は公園を横切つて歩いてゐた。アークライトが綠の茂みを打ち拔いて、複雜な模様を地上に織つてゐた。ビールの汗で、私は濕つたオブラートに包まれたやうにベトぐしてゐた。

私はとりとめもないことを旋風器のやうに考へ飛ばしてゐた。

——俺は飢ゑてゐたぢやないか、そして興奮したぢやないか、だが俺は打克つた。フン、立派なもんだ。民平、だが、俺は危くキャピタストと見たよな考へ方をしようとしてゐたよ。俺が何も此女を

こんな風にした譯ぢやないんだ。だからとな。だが俺は强かつたんだ。だが弱かつたんだ。ヘン、どつちだつていゝや。兎に角俺は成功しないぜ。鼻の先にブラ下つた餌を食はないやうぢやな。俺は紳士ぢやないぢやないか。紳士だつてやるのに、俺が遠慮するつて法はねえぜ。待て、だが俺ば遠慮深いので紳士になれねえのかも知れねえぜ。まあいゝや。——

私は又、例の場所へ吸ひつけられた。それは同じ夜の眞夜中であつた。

鐵のボートで出來た門は閉つてゐた。それは然し押せばすぐ開いた。私は階段を昇つた。扉へ手をかけた。そして引いた。が開かなかつた。畜生！　慌てちやつた。こつちへ開いたら、俺は下の敷石へ突き落されちまふぢやないか。私は押した。少し開きかけたので力を緩めると、又元のやうに閉つてしまつた。

「オヤツ」と私は思つた。誰か張番してるんだな。

「オイ、俺だ。開けて吳れ」私は扉へ口をつけて小さい聲で囁いだ。けれども扉は開かれなかつた。今度は力一杯押して見たが、ビクともしなかつた。

「畜生！　かけがねを入れやがつた」私は唾を吐いて、そのまゝ階段を下りて門を出た。

私の足が一足門の外へ出て、一足が內側に殘つてゐる時に私の肩を叩いたものがあつた。私は飛び上つた。

「ビックリしなくてもいゝよ。俺だよ。どうだつたい。面白かつたかい。樂しめたかい」そこには蛞蝓が立つてゐた。

「あの女がお前のために、あゝなつたんだつたら、手前等は半死になるんだつたんだ」

私は熱くなつてかう答へた。

「ぢやあ何かい。あの女が誰のためにあんな目になつたのか知りたいのかい。知りたきや敎へてやつてもいゝよ。そりや金持ちと云ふ奴さ。分つたかい」

蛞蝓はさう云つて憐れむやうな眼で私を見た。

「どうだい。も一度行かないか」

「今行つたが開かなかつたのさ」

「さうだらう、俺が門を下したからな」

「お前が！　そしてお前はどこから出て來たんだ」

私は驚いた。あの室には出入口は外には無い筈だつた。

「驚くことはないさ。お前の下りた階段をお前の一つ後から一足づゝ降りて來たまでの話さ」

此蛞蝓野郎、又何か計畫してやがるわい。と私は考へた。幽靈ぢやあるまいし、私の一足後ろを、いくらそうつと下りたにしたところで、音のしない譯がないからだ。

私はもう一度彼女を訪問する「必要」はなかつた。私は一圓だけ未だ殘して持つてゐたが、その一圓で再び彼女を「買ふ」と云ふことは、私には出來ないことであつた。だが、私は「たつた五分間」彼女の見舞に行くのはいゝだらうと考へた。何故だかも一度私は彼女に會ひ度かつた。

私は階段を昇つた。蛞蝓が附いて來た。

私は扉を押した。なるほど今度は譯なく開いた。一足室の中に蹈み込むと、同時に、惡臭と、暑い重たい空氣とが以前通りに立ちこめてゐた。

どう云ふ譯だか分らないが、今度は此部屋の樣子が全で變つてるであらうと、私は一人で固く決め込んでゐたのだが、私の感じは當つてゐなかつた。

何もかも元の通りだつた。ビール箱の蔭には女が寢てゐたし、その外には私と、蛞蝓と二人つ切りであつた。

「さつきのお前の相棒はどこへ行つたい」

「皆家へ歸つたよ」

『何だ！　皆こゝに棲んでるつてのは嘘なのかい」

「さうすることもあるだらう」

「それぢや、あの女とお前たちとはどんな關係だ」遂々私は切り出した。

「あの女は俺達の友達だ」

「ぢやあ何だつて、友達を素つ裸にして、病人に藥もやらないで、おまけに未だ其上見ず知らずの男にあの女を玩具にさすんだ」

「俺達はさうしたい譯ぢやないんだ、だがさうしなけれやあの女は藥も飲めないし、卵も食へなくなるんだ」

「え、それぢや女は藥を飲んでるのか、然し、おい、誤魔化しちやいけねえぜ。藥を飲ませて裸にしといちや差引零ぢやないか、卵を食べさせて男に蹂躪されりや、差引缺損になるぢやないか。そんな理窟に合はん法があるもんかい」

「それがどうにもならないんだ。病氣なのはあの女ばかりぢやないんだ。皆、病氣なんだ。そして皆が搾られた渣なんだ。俺達あ食ふために働いたんだが、その働きは大急ぎで自分の命を磨り減しちやつたんだ。あの女は肺結核の子宮癌で、俺は御覽の通りヨロケさ」

「だから此女に淫賣をさせて、お前達が皆で食つてるつて云ふのか」

「此女に淫賣をさせはしないよ。そんなことを爲る奴もあるが、俺の方ではチャンと見張りしてゐてそんな奴あ放り出してしまふんだ。それにさう無暗に連れて來るつて譯でもないんだ。俺は、お前が菜つ葉を着て、ブル達の間を全て大臣のやうな顏をして、恥しがりもしないで歩いてゐたから、附けて行つたのさ。誰にでも打つゝかつたら、それこそ一度で取つ捕まつちまはあな」

「お前はどう思ふ。俺たちが何故死んぢまはないんだらうと不思議に思ふだらうな。穴倉の中で蛆蟲見たいに生きてゐるのは詰らないと思ふだらう。全く詰らない骨頂さ、だがね、生きてると何か役に立たないこともあるまい。いつか何かの折があるだらう、と云ふ空頼みが俺たちを引つ張つてゐるんだよ」

私は全つ切り誤解してゐたんだ。そして私は何と云ふ恥知らずだつたらう。

私はビール箱の衝立ての向うへ行つた。そこに彼女は以前のやうにして臥てゐた。

今は彼女の體の上には浴衣がかけてあつた。彼女は眠つてるのだらう。眼を閉ぢてゐた。

私は淫賣婦の代りに殉教者を見た。

彼女は、被搾取階級の一切の運命を象徴してゐるやうに見えた。

私は眼に涙が一杯溜つた。私は音のしないやうにソーッと歩いて、扉の所に立つてゐた蛞蝓へ、一圓渡した。渡す時に私は蛞蝓の萎びた手を力一杯握りしめた。

そして表へ出た。階段の第一段を下るとき、溜つてゐた涙が私の眼から、ポトリとこぼれた。

——一九二三、七、一〇、千種監獄にて——

誰が殺したか

序

嘉和、
民雄、二人のわが子よ！
父は、監獄の中で、おん身たちのことを、胸を焼かれるやうに思つた、そして此文章を書いた。
監獄から出て見ると、おん身等は、きわ子と共に行衛が分らなかつた。
そして、今、御身等は、二人とも、餓死してしまつたことを聞いた。
私が、御身等が大きくなつた時、御身等の幼い時の、社會の組織はどんなだつたか、その組織内に於ける、プロレタリアである父を持つた、御身等の生活はどうであつたか。を、御身等に知らせるために書いた、此文章は、どうだ。
御身等は、今の組織の下で、社會主義者を父に持つたために、餓死することを「體驗」してしまつ

た。
今、私は御身等の靈に此書を捧げなければならないことになつた。
嘉和よ！
民雄よ！
お前たちの、産みの父である私は、いつたい、どうすればいゝのか？
哀れなお前たちが、餓死する時、父はお前たちの處から、五十里と離れない木曾で、土方をしてゐたんだよ。そして、お前たちや、妻の居なくなつたことに、氣を腐らして、亂行の中に身を打ち込んでゐたんだ。
私は、何と云ふ父だらう。又、お前たちの母は、何と云ふ母だらう。
お前たちの母は、私の社會にゐる時・一度、酒田定吉と云ふ同志と、お前たちを捨てゝ出奔した。
今度は、父が入獄中に、父の義兄——既に子供が五人もある——の、洗ふやうな貧乏の中へ、お前たちを「捨て」て、どこかへ行つてしまつたのだ。
おまへたちは、淋しく、然し、飢のために、藻がき死にに死んだだらうね。
あんなに可愛いゝ、お前たちだつたのに。

私は胸を掻きむしられるやうだ。
おまへたちは、私たち兩親を呪つてくれ！
私も、此父も、自分自身を呪ふ！
そして、かう云ふ風な、出來事を捲き起した、直接の人たちと、その人たちをそんな狀態に追ひやつたものを呪ふ！
誰が、お前たちを殺したのだ！
おまへたちの墓は、勞働者の血で汚された此地上には建てゝはならない。
父は、「洗ひ淨め」てから、その地の上に、お前の墓を建てやう。
「俺は獸目でも、子供がやる！」
と云つた、父の言葉は、空になつてしまつた。
今は、自分でやる時だ！
嘉和よ！　お前は六つで餓死した！
民雄よ！　お前は五つで餓死した！
そして、無數の、飢えて死んだ子供たちよ！

私は、プロレタリアの父を代表して言ふ。
お前たちは、悪い時に生れて呉れた。
お前たちは、餓死するために生れて來たんだ！
私は願ふ。
御身等の、幼くして、どんな苦痛よりも深酷に、「死んでしまつた程、飢えた」その呪の聲を、此地球に絶えず叫び續けて呉れ！
お前たちが、虚空を摑んで、餓死したことを思へば、父は、どうして、飢餓の前に卑怯になることが能きよう！
父を狂人になるほど、絶えずつきまとつて呪つておくれ！
その呪の聲に追ひ立てられて、どんな父でも立つであらう！
此父は、狂人になりたかつた。
が、狂人になれなかつた。
父も子も、
母も子も、

プロレタリアの行く道は、
餓死か、〇〇〇に續いてゐる！

だが、
餓死と、〇〇〇の先に、
「人類の歴史の、第一頁が」
白紙のまゝに擴げられてゐるのだ。

行け！
プロレタリア！
父も子も、母も娘も、
餓死と、〇〇〇に向つて。
それを通り越さねば、
人類の歴史は始められないのだ。

可哀想な、餓えて死んだ子供たちよ！
父は、お前たちの前に、謝る。
お前たちの父は弱かつた！
お前たちの母は弱かつた！
しかし、自分の子を、飢え死にさせた今は、強くなつた。

お前たちの墓を、
淨めた地上に建てる！
それまで待つておくれ。

二人の生ける子供へ

(一) 牢獄に於て、父より。

嘉和の産れる頃の、父の一家の生活は、兎に角平和であつた。乏しいながら、暗いながら、さして

不安ではない生活であつた。

貧乏なことは、矢張り怖ろしく貧乏であつたが、しかし、それまでのやうに、何等收入の豫想もなく、又、筈もないやうな、そんな絶望的なものではなかつた。

と云ふのは、父は、その頃Nセメント會社の書記と云ふ仕事に、ありついてゐたからだ。兎に角、一定の職業を、有力な紹介者によつて持つたことになつたのだから、先づ、馘首の恐れはなかつたし、可なり、所謂幅も利かうと云ふものだつた。

だが、何にしろ、五十圓の月給で、老母と妻――おまへたちの母――と、私――おまへたちの父――との三人では、どうにも、貧乏暮しであることを、内秘にしておくと云ふ譯には、行かなかつた。

私たちの住居として借りた處は、名古屋市の西部で、運河――迚も鼻持ちのならない臭い汚い――の澱んでる、舊城下の裏町であつた。

二階の六疊と、四疊半と、二間を私たちは間借りした。ところが、此町の舊式な家屋は、二階は非常に天井が低い。四疊半の方などは、殆んど押入れとして以外には、役に立たなかつた。

七十を越した母――おまへたちの祖母――の寢室に、そこが宛てられたけれども、萎びて短くなつた祖母でさへ、その室で頭を反らして動きまはることは出來なかつた。

天井は、屋根に押しつぶされて、窓の所では格子に密着いてゐた。

そこへ持つて來て、窓が、北と西とを向いてゐて、然も、盲滅法界に、目の細い格子で釘付けにしてあつた。

日の光りは、夏の盛り以外に訪れて來なかつた。そこは牢獄の北向きの監房ほど暗かつた、ものゝ姿が、そこではハッキリ見えなかつた。壁側にかけた着物や、箒などが、暗がりの中に、異形な妖怪のやうにブラ下つてゐた。

屋根と天井とがくつついて、天井と疊との距離が短いので、夏などはとても住めたものではなかつた。住めなかつたには住めなかつたが、然し、そこでも住まなければ、外にも住むところはなかつた。

その代り、私が、會社から歸つて夕飯を濟ますと、直ぐ一家三人は打揃つて、必ず、近所の江川と云ふ小さな川縁へ涼みに出かけた。

その川縁の電車通りには夜店が出た。そこで、私たちは野菜や、何かしら安い日用品や、やがて產れる、嘉和の產着の布などを買つた。それが、その當時の、私たちの生活の唯一の樂しみであつた。

一九二二年、三月の中旬だつた。私が築港の會社から、滿員電車で一時間餘り、揉みくちやにされて歸つて來ると、きわ子――お前たちの母はそう呼ばれてゐた――は、いつもなら、下で洗濯をして

るか、煮物でもしてる筈なのに、その日は暗い二階に寢てゐた。

祖母は、澤庵にくつついた葉つ端のやうに萎れて、心配さうにお勝手をしてゐた。

「どうしたんだい。未だ子供が産れるにや早いぢやないか。」

私は、服を脱ぎながら訊いた。

「あのね、どうしたんだか、足がブランブランになつちやつて、ちつとも立てないの、まるで他様の足見たいなのよ。どうしたんでせう。」

と答へた。

「そいつあ困つたね。お湯に行つた時、誰かの足と間違へて來たんぢやあるまいね。」

と、私は言つた。

が、冗談ぢやなかつた。

もう妻の腹は八ケ月であつた。又は九ケ月か、その中間位であつた。だから、いつ産れてもいゝやうに、出産の準備をして置かなければ、既に、ならない時期であつた。

その準備と云ふのは、金であつた。どうして産婆に拂ふか？が、その頃毎日の日課のやうに父に氣を揉ませた事柄であつた。

然し五十圓の月給では殘つて行く筈がなかつたし、金を借りやうにも、知つた人は二人か三人しかなかつた。それも會社に入るまでに、どの位迷惑をかけたか分らない位だつたので、此上出産費用とは切り出せない義理であつた。

産婆への費用丈けでも、思案投首である處へ、きわ子の足が「ブランブランになつちやつた」ので、手の施す術がなかつた。

それに、足がブランブランで、子供を産むことは難儀なことに違ひあるまいし、よしんば直ぐに子供が産れないにしても、さうなら猶更ら都合が悪かつた。

で、醫者と云ふことになるのだつたが、産婆にさへ頭を痛めてるところに、その前に、も一つ醫者と云ふことになると、何とも考へやうのない難關だつた。

「プロレタリアは、決して病氣しちやいけないつて、言つてあるのに。」と、私は臥てる妻に云つた。

「だつて」

と、きわ子は云つて、淋しさうに笑つた。

「赤ちやんが、きつとお腹の中で足をつつ張つてるのよ。」

彼女は、腹は大きかつたが、體は、貧乏で窶れてゐたし、病氣で痩せてゐた。が、可愛い表情と、

淋しい表情とをゴッチヤに浮べて、私に訴へた。

赤ちやん――嘉坊だよ、その足を突つ張つたのは――と云ふことになると致し方もなかつた。

近所の醫者に診て貰つた處によると、

「足のブラブラな分は、一寸見當がつかないが、肋膜が第一悪い」と言ひ出した。

これは藪蛇だつた。足だけで持て餘してゐるのに、肋膜まで掘じくり出された日には、方途がつかなくなつてしまふ。私は、妻が肋膜になつたのは、その醫者のせいだと思ひ込んでしまつた。

だが仕方がなかつた。一週間分の藥を、血の色をした汗をかいた、金で買つて、飲まして見たが、藥は無くなつても、足は依然として、頭の命令を聞かうとはしなかつた。

私は途方に暮れた。

ところが、ある知人の奥さんが、

「縣立病院の産科では臨月からは、無料で入院させて、分娩後三週間まで見て呉れる。しかし、それは學用患者と云ふ「名目」で産婆見習の稽古臺になるんだが、それさへ構はなければ、一文も要らない。」

と、親切に教へて呉れた。

――稽古臺よろしい！　人助けになることだ――と、私は船板にでも縋るやうに、その話に飛びついた。

そこで、「臨月の産婦を學用患者に入院させて貰ひたい」と云ふ手續をした。

入院さへしちまへば、足のブランブランも、肋膜も、「序に」治療して貰へる。と云ふ、うまい話に計畫したんだ。

此時代には、自動車は足の動かない産婦や、病人や、急用のある人を載せるための乘物ではなかつたんだよ。それは遊んでゐる、金持や待合へ急ぐ、且那と芸妓との乘る物だつたんだ。

ところで困つたことには、妻は電車でも行けないし、俥でも行く譯には行かなかつた。

止むを得ず、私たち三人は、自動車に乘り込んだ。

自動車は具合がよかつた。自動車に乘つてる間中、祖母は、全で遊山でもしてゐるやうに、幸福になつて、急いで後ろに飛びのいて行く家々や、荷車や、警笛に避ける人々を眺めたものだ。

それは、私にとつても氣持がよかつた。

ブランブランの妻は、久し振りで、街の景色を享樂した。

私たちは、病院の玄關へ自動車を乘りつけた。

自動車は、三十分許り、私たちを泥沼から蓮の花の上へ引き上げた。が、三十分後には、私たちは又泥沼へ突つ込まれた。

自動車賃は、十圓だつた。

此自動車が、その後、妻の産後の恢復以上に、私たちの經濟上の恢復を妨げた。

嘉和よ！

いくら急いでる時でも、どんなにそれが必要の時でも、プロレタリアは、電車か、自分の足の上に乘るより外仕方がなかつた。

でないと、私のやうに、後で思ひ知らされることの能きる室へ入つた。

病院では、三等病室で、八人の姙婦が收容されるのだ。

そこでは、ベットにはスプリングがついてゐた。そして、一般の學用患者室よりも、よほど良かつた。少くとも、こゝは、病氣が、もつと惡くなるやうな設備ではなかつた。

何故姙婦だけ、事實、學用患者であるにも拘らず、三等病室へ入れたか？

それは多分、「一方に死にかけてゐるんだが、一方は産みかけてゐる」忠良な國民を、未だゴミゴミ殖やすための奬勵手段だつたかも知れない。

その日、産婆の大將が診察に來た。

足のブランブランは婦人科の醫師に報告した。子供は、詰り嘉和は、至極丈夫だと産婆は云つて去つた。

婦人科の醫師が來て見たが、

「何故足が動かうとしないか、譯が分らない」と云ふ結論に達した。

問題の足は内科へ廻つた。内科部長の診察によると、

「動かぬ筈がないのに、動かない」ところの不思議な足であつた。

然し、幸なことには、此處の内科部長は、妻の胸から、肋膜を掘じくり出さなかつた。

或は不幸にして、肋膜を見逃して呉れた。

と云ふのは、若し、ほんとに肋膜が惡いのだつたら、ロハ序に癒して貰ひたかつたからだ。

産婆は、「二週間も經てば産れる」と云つた。

私は、心配した。醫者は足の立たない理由が分らないまゝにして放つて置くし、産婆は二週間經つと産れる、と云ふんだ。

若し、足の立たないまゝ、産れて、産れてから後も、きわ子の足が立たなかつたら、とそれが私を

苛んだ。

然し、二週間は適中した。入院してから、十三日目に、子供――嘉和――が産れるんぢやなくて、足がヒョッコリ、何の豫告もなしに、動き出したのだ。

その前の晩、「足がジンジンする」なんてきわ子は言つてゐたが、朝になると、

「昨夜、自分で寢臺から降りて用便をすましたのよ」と云ふんだ。

そうして、寢臺から降りて、壁に摑まつて、赤ん坊の歩き初め見たいな格好で、歩いて見せた。

私は笑ひ出した。

「お前の足は、俺の一家の浮沈に關するんだつたが、これで助かつたよ」

が、全く、きわ子の足ほど、醫者を馬鹿にした足はなかつた。

きわ子は、狐に憑まれたやうな顏をして醫者の前を、どんどん歩いて、散歩に出るやうになつた。

もうその頃には、産婆長が、豫言した出産の期日を過ぎてゐた。その期限後半月も私たちは待たされた。

一九二一年五月一日。

勞農ロシアでは、既に勞働者自身等が自分自身等の生活の主人となつて、そのあらゆる都市、村落でメーデーの愉快な示威運動を行つた。

その他の國々でも同樣に、ロシアとは變つた意味の悲痛な、示威運動を行つた。

日本でも、東京や、大阪や、その他の諸都市で、その地方の、ありつ丈けの警察官を動員させ、バラスのやうに彼等をトラックに積んで、行列の先々へ移動させる、位の刺戟を、ブルジョアジー及びその配下に與へつゝ、擧行された。

その、萬國の勞働者が、一つの大きな肉彈を、ブルジョアジーに示す日の、午前五時であつた。世界の至らぬ隈もない勞働者街の勞働者たちが、ウィンチのデリックのやうな逞しい手を、破れた上着の袖につつとほしながら、起ち上るときであつた。

全て、地球程の大きさの一人の勞働者が、自分自身に眼覺める時であつた。

嘉和は母の胎の中から、メーデーに參加する積りだつたらしい、その手を延し、足を踏ん張り始めた。

きわ子は、カッキリ五時に、「腹が痛い」と云ひ出した。

そこで、きわ子は産室に運ばれた。

私もついて行つた。そこで出發點では必ず檢束があるやうに、きわ子も、それ相當な、然し大してはない、どちらかと云へば比較的初産としては、輕い苦痛の後、未だ名のつかない嘉和を産んだ。きわ子は、私の手を力一杯握つてゐた。

午前七時であつた。

芝公園から、中ノ島から、赤い廣場から、赤い勞働者の肉塊が押し出す、丁度その時、嘉和は、切つ端詰つた、日本の勞働市場へ送り出された。

どのプロレタリアも、擔はねばならない、重い荷を背負つてお前は産れたのだ！

嘉和よ！　その時の、此父の歡び！　此父の困惑！

嘉和よ！　お前が産れたことは、歡び許りを父に與へなかつた、ことを私は白狀しなければならない。

私は、お前が生れることによつて、どんなに重荷を、今までよりもひどく、餘計に背負ひ込まなければならなかつたか。

三人が、私一人の腕で、持ち上げ切れない程重荷であつた處へ、お前が産れたのだ。

その後の生活が、今までより樂になることが、あり得るだらうか。

自分に似た、小さい、可愛いゝ、生き物を心から愛撫することが能きないなんて！

私の心は重かつた。

だが、産れたお前はどんなに、可愛いゝ子だつたか！　素晴らしいものだつた。

父も母も、普通よりは大きい方だつたので、お前は、看護婦や、産婆見習の眼をビックリさせるほど大きかつた。

それから二週間、嘉和はお母さんと一つのベットに臥てゐた。

父ちやんは、空いた寢臺に泊つて、病院から會社へ通つてゐた。

どう云ふ譯だか、其年は男の子が多いと皆が云つてゐた。同じ産室で、嘉和の産れる前一ケ月の間に四五人の子供が生れたが、それが揃つて男の子であつた。又、嘉和より一週間位前男の子が生れて、同じ室にゐたけれど、その子より嘉坊の方が大きかつた。その子供のお母さんは、嘉和を見て羨ましがつた。まつたく、嘉和よ。お前は可愛いゝ顏をしてゐた。

若い産婆見習の人たちは、皆お前を抱つこしたがつて、爭ひ合ふやうにしては、毎日産湯を使はせに連れて行つた。それに、お前はほんとに、おとなしい子だつた。よくスヤスヤと寢てばかりゐて、泣くのは母ちやんのお乳が欲しい時だけだつた。

よく「寢る子は育つ」と云ふが、お前は死ぬ時でも全くよく育つた。どんなに不自然な死に方をしたことかと思ふと、此父は堪へきれない氣がする。

その中に、母ちやんの體も順調に回復するし、お乳はオアシスの泉のやうに湧き出るし、お前は又まん丸く肥つて、お鼻が窮屈さうに、二つのお餅見たいな頰の間に蹋つてゐるし、そんな風に萬事がうまく運んで、二週間の後には、母ちやんに抱つこされて、暗い二階に移つて來た。

これが、詰りお前の「お家」だつたのだ。

お前は丈夫に育つた。

母ちやんも、お前を早く大きく育てやうと思つたのか、無暗に乳をドッサリ出すので、お前は飲み切れなくて、咽せかへつたりしたものだ。

そんな風で、父ちやんたちは、お前を中心にして家庭を營んだ。

八月に半期賞與を父ちやんは、百圓貰つた。このお金は貴いお金であつた。それで、お前の着物や帽子なども買へたし、お醫者樣や、その他の借金も、少し宛でも埋めることが出來たのだつた。

その頃は、もうお前も大きくなつて、百日目には素つ裸になつて寫眞を撮つた。その可愛い〻寫眞をずつと後になつて、お前は自分で見分けて、「これ坊や。これ、坊やだよ」と喜んで見るやうになつたつけ。そして、もうその頃から、まるで天使のやうに無邪氣に笑ふ事を知つた。

お前が一つ笑ふと、その笑ひにつれて、家中が笑つた。下のおぢいさんやおばあさんまでが、二階にわざ〳〵上つて來て、お前の笑顏を見ると、堪らなさうに笑ひ出したものだつた。

然し、そんなにも平和ではあつたが、暑熱は堪へ難くなつて來た。眞晝間その二階にゐることは、云はゞカステラ燒きのテンピの中にゐるのと同じだつた。そんな中に未だ皮の堅くならない餅のやうな、お前を入れて置くのは慘酷なことであつた。餘り暑さがひどいと、お前は泣き出したりする事もあつた。そんな時は、階下の暗い板の間に連れて行くと、默つてスヤスヤと眠るのだつた。

父ちやんは會社から歸ると直ぐに、お前を抱き上げてキスするんだつた。餘りうるさく、お前が息をするのに苦しい程キッスを灑ぎかけると、顏をしかめて泣きもしないでお前は我慢してゐたよ。あんなに小さくてもお前には、いぢめられたり、叱られたりしたのではないと云ふ事が解つてゐたのだね。それから一家四人で打揃つて、江川通りへ凉みがてら、いろんな物を安く買ふことが、一つの樂しみにもなるので、出かけるのだつた。

いつでも、父ちやんはお前を抱つこして、「私はこんない〻子の父ちやんですよ」と、誰にでも吹聽したいやうな氣持で、なるたけお前がよく見えるやうな格好に抱いて歩いたもんだ。そして、通りす

がりの人でもお前に見惚れて行く人が澤山あつた。若い姉さんたちなどの中には、どこかとんきような、おどけたやうなお前の表情に引き込まれて、「マア可愛いゝ」と口に出したり、中には「抱つこさせて呉れ」と云つて、わざわざお前を抱つこしたほどの「ファン」さへあつた。その中に、お前も段段大きくなつて、椅子にでも腰かけるやうに、父ちやんの腕に腰かけて、散歩するやうになつた。

こんな風で、一家は富んではゐなかつたし、又、隨分苦しくもあつたが、そのまゝで行けば、別に大して複雜な事も、面倒な事もない譯だつた。

そして、嘉和と云ふ寶玉を皆で磨き上げて行けばいゝ譯だつたんだ。そうすれば、その中に月給も上るだらうし、賞與も殖えるだらうし、家だつて一軒借りられる事になるだらうし、そして結局お前も、そんなに慘めな目を見させないでも濟んだらう。

ところが、お前が、父一家を慰さめてくれ始めてから二ケ月位經つてからであつたが、一つの事件が持ち上つたのだ。尤も、事件と云つたつて、そんな事はどこの會社でゝも、些も珍らしい事ではない事なんだ。そんな小さな事は、新聞の端にも載らない些末な事だと見られてゐたのだ。その些末な事件がどうして父ちやんの身の上に大きな變化を齎したか。

それを少し委しく書いて置かねばならない。と云ふのは、人間の考へと云ふものは時代と共に變つて行くものだから、お前が大きくなつて、父ちやんを判斷する便宜のためなのだ。

その事件と云ふのは、クリスマスの卓子に載る仔豚の丸燒きのやうに、一人の勞働者が丸燒けになつた事なのだ。

（二）

七月の末の暑い正午前であつた。父は卓子と椅子との附屬品のやうに、朝から腰かけ續けて仕事をしてゐた。

工場の方で馬鹿に騒がしくなつた。そこで父は飛んで出た。

セメント會社には、ロータリーキルン（回轉窯）と云ふドエライ器械がある。一口に云へば大工場の煙突を横つ倒しにして、そいつをグルグル廻してゐるやうなものだ。そのキルンの中は、ただの眼や眼鏡で見ると眼の球を痛めるほど白熱したセメント原料と、ファンで吹き込まれる石炭粉とが打つ衝つて燃え上つてゐる。その中を色硝子で覗くと地獄の火を思はずには居られない。地獄の火。若し地獄なんてものが無いとすれば、それが在る此現前の世の中でも構ひはしない。

嘉坊。民坊。お前たちが大きくなつた時に此現世で、その地獄の火を見ないで濟む事を此父は祈る。

だが、今は燃えてゐる。廻つてゐる！

その機械が故障で休んだため、その内部へ――勿論人が息をする事が出來る位冷却するのを待つて――入つて勞働者たちが働いてゐた。確か五人位入つてゐたと思ふ。

その中はガスの吹き出る炭坑の坑内に似通つてゐた。勞働者はカンテラや安全燈の代りに蠟燭をつけて、その仄かな光の下にハムマーを振つてゐた。

その仕事をしてゐる一つ先は、沈塵室と云つて、石灰石の燒けた粉が沈んでゐる處であつた。そこはキルンから下の方十五六尺の深さと、上の方は二十尺の高さとを持つた空洞であつた。その空洞の下に燒けた灰が沈んでゐるのであつた。

「おい、もう飯にしようぢやないか。」

と、役付職工が云つた。

「あゝ、飯にしよう。」

と他の職工が答へた。

「チョット、チョットだ。もう二分待て、こゝが切りになるから」

と、村井が云つた。

その二分目に、村井は足を辷らして、彼の持つてゐたハムマーと一緒に沈塵室に落ちた。その落ちる時、彼は反射的に叫んだ。それは喚いたから落ちたとも思はれた位だつた。

どこにも出口のない、從つて入口もない空洞の中の叫びは、大きな反響を起した。「それは素晴らしい動力で廻つてゐる丸鋸が、大きな角材を切る時の聲だつた。」と、その時一緒に働いてゐた男が、後で父に話した。

それに續いて、

「助けてくれ！

助けてくれ！

助けてくれ！」

と、救ひを求める聲が續いた。そしてその聲は段々小さくなつた。

彼は悲鳴を擧げながら、どこか燒灰のない所へ出ようとして、その邊を、眞つ暗な、一分一厘も隙間なく耐火煉瓦で造られた、腐つた肺臓のやうな絶望の中を、滅茶苦茶に這ひづり廻つた。灰は一晝夜以上火が通つてゐなかつたから赤熱してゐるやうな事はなかつたが、それでも火傷をするのには十分な熱さであつた。

そして、灰は白熱してゐるか赤熱してゐるかどちらかの方がよかつた。そうであれば、いつそ一思ひに燃え盡してしまふから、苦しむ時間が短くて濟むのだけれど、なまじつか一思ひに死ねもしないし、そうかといつて火傷しないで濟む程の冷たさでもないのだから堪へられない譯だつた。

彼は熱い灰の中を眼を抜かれた蟬のやうに驅けた。打つ衝つた。倒れた。灰が背中にまでかぶさつた。灰は着物に燃えつくほどには熱くなかつた。しかし着物（仕事着）の襟や袖口やズボンの下から肌へ直接に忍び込んだ。肌は蒸し燒きにされるやうに痛んだ。頭髪がアフリカインデアンのやうに、急に縮れてブスブス焦げた。眼玉に燒灰が入つた。

後で思つた事だが、インデアンの頭の毛の縮れてゐるのは、餘り高い熱で照りつけられるからだらうか。ガンヂス河畔、椰子の木蔭で見たインデアンの頭髪は、その時の村井の頭から灰を除けば些も變りはなかつた。

村井はあちこち這ひ廻り轉げ廻つてゐる間に、着物と皮膚との間にスツカリ灰を詰め込んだ。それは溺死者の皮膚と着物の間に完全に水が入つてゐるのと同じであつた。

彼は自分では意識しないで喚いた。微細な熱灰の粉末は口の中に入つた。舌を薄く包んだ。進んで肺へ入つた。齦帶を焦がした。

彼の體中から精力が焙り出されてしまつた。そして、一匹の蠅を生かすだけ位しかない生命力が、彼の心臟の隅てビクビクしてゐた。彼は遂々、熱灰中に倒れてしまつたのであつた。

――俺は出なければならない。どんな事があつても俺は死んではならない。女房や子供たちを誰れが養つて行くか。俺は出なけりやならない。未だ俺は死ぬのには早い。こんな非業な死に方をしたくない。何でもかでも俺は生きなけれやならない。燒け死ぬやうな惡い事をした覺えはない。俺はお人好だと云はれて來た。だから神樣が俺をきつと救け出して下さる。然し何だつて神樣はこんなに遲いんだらう。――

然し、村井が此上もない天理教信者であるにも拘らず、天理教の神樣は沈塵室を覗きにも來なかつた。その代りに何にも信じてゐない小港と云ふ勞働者――一緒に働いてゐた――が、彼が落ちると同時に、長さ二十間のキルンを風のやうに飛んで出た。そして外氣か焙るやうにも暑いのに涼しさを感じながら、修繕工場の方へつツ飛んだ。その間中彼は喚き續けた。

「村井が落ちた。村井が落ちた！」

修繕工場へ跳り込むと、彼はスパナーを抱へて又た驅け出した。

沈塵室には外部からたつた一つのガットがあつた。此扉は、誰も殆んど氣のつかない存在であつた。

それは建設以來使はれた事のない、又殆んど必要を感じない扉であつた。それが人を助けるために拵へた扉でない事は、恐らく技師だけが知つてゐたのであらうが、小港は建設當時から居た古い職工であつたし、又、そのガットのナットを締めたのも彼であつた。

彼はスパナーをナットへ嵌めた。がナットの方がスパナーより大きかつた。

「スパナーを持つて來い、吋のスパナーだ。吋のスパナーを二三本持つて來い！」

彼の喚くのと同時に、二十人位の職工が修繕工場の方へ驅け出した。十五六本のスパナーが集つた。それが手の指のように敏速に動いた。二十本のナットが瞬く間に外された。

沈塵室には、一度に膿の出切つた大きな腫物の口のような穴が、無氣味に開いた。

中からは未だ微かな呻吟の聲が洩れて來た。外には死のやうな沈默があつた。五十人もの人間がその百の目をガットの穴に向けて、死んだやうに息を呑んで立ち盡してゐた。

沈塵室の中は熱灰である。どの位の深さがあるかも分らない。そこに飛び込んで救ふと云ふ事は不可能だ！　一人を救ふつもりでも一人を殺すことになりはしないか？　尠くとも生命がけの仕事だ。

人々は生きたまゝ死蠟にでもなつたやうに、固唾をのんで立つてゐた。

が、小港はその人々の眼の前で、ランナーが襷拔けする時のやうな格好で沈塵室の熱灰の中へ跳り込んだ。

此刹那まで人々はそこへ穴を開けた本來の意義を見出せないやうであつた。が、此刹那、人々は再びハッと胸を打たれた。

「二人死ぬのではあるまいか？」

一秒、二秒、五秒、七秒、十五秒。

中からは蚊の呻るやうな村井のらしい呻吟が絶えず響いて來た。

人々はその呻吟に綱をつけて引つ張り出してやりたい焦燥を一襷に感じた。

「二人とも死ぬのではあるまいか？」

十六秒、二十秒！

と、村井の切るやうな叫喚が響き亘つた。次の一秒に、村井の一躍して熱氣鏝をかけられたヂリヂリの頭がガットから出た。

人々は驅け寄つて彼の頭を支へた。

肩が出た。腕が出た。胴が出た。

村井全體が出た。そしていきなりそこの地面へ轉がつた。

若し彼がひどい火傷をしてゐなくて、そんな表情をし、身振りをしたのであつたなら、地獄の閻魔でも笑ひ出すに違ひなかつた。彼は全く妙な動作をした。

村井が出ると直ぐ小港も飛び出した。人々の豫想を裏切つて彼は、指一本も火傷してはゐなかつた。彼はガットを開いて村井の呻き聲を聞くと同時に直感したのだつた。

「大丈夫だ。俺がキルンから出る時間、修繕工場まで驅けた時間、ガットを開けるあの長い時間。そして未だ村井は呻つてゐる。して見ると、二分や五分で死ぬやうな熱ではない。跳び込め！」

勞働者は此直感の力によつて、いつも危險から自分を護り人を救つたりする。此力は常識からも學問からも湧き出はしない。いつでも彼等が取扱つてゐなければならない、危險な機械から、自分自身を保護する本能から湧き出る智能であつた。そんな時の彼等の行動は涙なく見る事の出來ないものであつた。

村井の火傷は見たところ、大してひどくはなかつた。顏も燒け焦げになつてゐなかつたし、手足の指などもボロッと落ちてはゐなかつた。ただセメントの灰をかぶつてゐるだけのやうだつた。

「おい村井大丈夫だよ。大した事はないから氣をしつかりしろよ。」

こう云つて顏についたセメントを除つてやらうとすると、ベロッと皮がついて除れるのであつた。

そんな時、村井は全く氣の毒な聲で、救ひを求め苦痛を訴へた。

殊にその下に未だ熱い灰を貯へてゐる、仕事着を脫がさなければならない時は、より甚しい慘酷な情景を示した。それは丁度濡れた紙の下で燒けた菌などと同じく、仕事着の下では皮膚が蒸し燒けになつてゐた。

分析課の社員が、仕事着を脫がせて應急手當を爲ようとしたが、とうとう思ひ止まらねばならなかつた。何故かと云へば、若し村井から着物を脫れば、彼は皮を剝いだ豚のやうに赤身にならねばならなかつた。そしてまた最初の試みで所々赤身にしたのであつた。

彼は轉げ廻つた。泣き喚いた。

新鮮な空氣が彼を、生命の方へ近寄せたのであつた。從つて彼の苦痛は刻々に大きくなつて來た。

兎に角、專門家に依頼する事が第一であつた。それも直ぐ、今！　でなければならなかつた。

父はその頃工務係であつた。それは勞働者の賃銀や、勞働時間の計算や、割增金の算定、負傷者に對する手當などの仕事であつた。そしてその光榮ある仕事を責任者から引繼いた時に、驚いた事は先任者は未だ一人も、工場法に依る傷害手當を出してゐなかつた。然し負傷者は十人以上も出てゐた。

彼はそれをすつかり「忘れてゐた」のだつた。おまけに陸軍後備特務曹長の彼れは、工場法とはどんなものであるかを軍隊で教はらなかつた。從つて「知らないのが當り前」だつたのだ！

で、父は村井の公傷の起る半月前に十人餘りの公傷者をすつかり調べ上げて、その扶助料を請求したのであつた。

それを見た工場長は云つた。

「もう濟んだのはよかないかね。別に請求してゐると云ふ譯でもないし。」

「そんな譯には行きませんね。法律ですからね。」

そこで彼は捺印した。が、その書類の廻つて行つた時支配人は、

「何だ、あの野郎、こんな古いのまで掘じくり出しやがる。打つ捨つとけばいゝに」と云つた。工場ではある方面には怠慢である事の方が、上役にはお氣に召すのだ。

そしてその扶助料は、片つ方の眼がすつかり熔け爛れたのに對して、三十八圓だつたのだ！

だが、今は村井を醫師へ連れて行かねばならなかつた。

父は村井を載せた擔架に引添つて、一里餘りの道を市の方に歩かねばならなかつた。

擔架の上の村井は一里は愚か、工場の門を出るまでに危く飛び降りさうにした。そんなにもひどく火傷して、そんなにもひどく心身を衰へさせた、云はゞ人事不省の彼れに何がそんな力を與へたのだらう。彼は搖れてゐる擔架の上で、自分自身の腕で上半身を持ち上げたのだつた。父は眞夏の太陽に照りつけられて帽子の下から、又體中から流れるやうに汗を出してゐたのに、惡寒が體中を走り拔けた。

然し、これは未だ良い方であつた。その後の父の生活では、死ぬまで歩いた勞働者を見た。膝から下がポッキリ折れた足を、「ホラ俺の足はこんなにドッチにも曲るやうになつたぜ」と笑つた石工を見た。その石工は自分の二本の腕で、自分の足を自由自在に折り曲げて見せた。そしてその瞬間、彼が仕事をしてゐた斷崖から下の激流へ落ちてしまつた。

死がどんなに近く生命の背後に、ニヤニヤ薄氣味惡く笑ひながら寄り添つて立つてゐるものであるか、こんな事を書く時、思ふ時、父はお前たちの安否をどうしても知る事の能きない牢獄の中で、思はず不覺の涙を落すのだよ、又父は現在の感情に打負けた。今は昔の記錄を書き綴つてゐるのだつたね。

父は村井の擔架の側で、絶えず彼の顏を覗めながら歩いた。誰れもが走るやうに急いだ。そして又誰もが足よりも心を急がせてゐた。

工場から三町ばかり歩くと電車通りへ出た。そこの電車は言はゞ、築港の會社用に出來たやうなもので、出勤退出以外には殆んど乘客はなかつた。

電車通りを皆は急いだ。すると後から一臺の電車が疾走して來た。

父は反射的にその全速力の電車に飛び乘つた。そしてハアハア息を切らしながら、ガラ空きの電車の車掌に頼んだ。

「すみませんが、勞働者がひどい負傷をして今病院へ擔いで行く所ですが、一刻を爭つてゐるのですから、電車に載つけて下さいませんか」

「とんでもない。そんな事をすれば一度で私の首が飛んぢまふ。お斷りします。」

父は飛び降りた。その時はもう擔架は一町も後になつてゐた。その擔架を待つ間父は考へた。

――獸奴！　手前は自分の命を縮めてゐる事が解らねえのか！　仲間を見殺しにする。そこで誰もが不幸になるんだ。――

擔架が來た。村井はつツつかれでもするやうに、時々無意識に起き上らうとした。

又一臺電車が來た。

跳び乘つた。

「車掌さん、あの擔架ですがね、あれはセメント工場で窯の中に墜ちて、大火傷をしたんです。こう云つて父は車掌に後になつた擔架を指し示した。

「早くしないと命にかゝはるだらうと思ひますから、頼むから乘せてつて呉れませんか。」

「一寸お待ちなさい」

こう云つて車掌は誰も乘つてゐない車室を通つて運轉手に話しに行つた。

運轉手は深くうなづくと同時に、電車は急停車した。

「おゝい！　載せてつて呉れるさうだから急げよ。」

父は叫んだ。

擔架は驅けて來た。

その間に父は、運轉手と車掌とに「どうもありがたう、どうもありがたう」と云ふ言葉を二言置き位に挿みながら、村井の負傷を話した。

「どこまで連れて行くんですか？」

運轉手と車掌とが同時に訊いた。

「S病院までです。」

「それぢや、あの前で停めて上げますからね。」

電車は、幸ひ乗客も無かつた處から、一里の道を無停車でフツ飛んだ。そしてS病院の前で停つた。

「何ともお禮の申し上げやうもありません。」

「お大切に。」

電車は疾走し去つた。

父はその運轉手と車掌の名前を手帳に書き留めて置いたが、その手帳は數度の家宅捜索のために紛失してしまつた。改めて禮を述べ結果を報告する機會を永久に失つてしまつた。

第一の車掌と第二の車掌！

第一の電車は地獄への道であり、第二の電車は極樂への道ではあるまいか？

こうして村井は病院に入つた。そして手當を受けた。

彼には一人の内縁の妻と、六人の子供とがあつた。村井はその家族を養つてゐたのであつた。

病院には、彼が寢臺に横たへられると直ぐに、彼の妻と三人の子供とが來た。下の子は嘉坊より少し大きい位の女の兒で、女房の背中におんぶしてゐた。

女房は病室に入つた。そして夫の石膏の彫像のやうに眞つ白い繃帶姿を見た。と同時に鋭い悲鳴を擧げて泣き倒れた。背中の子供も火のついたやうに泣きじやくつた。外の二人の子供も母の袂に縋つて泣き出した。

村井はただ、自分自身の苦痛にのみ苦しみ苛まれ續けた。自分の疼痛以外に對しては未だ心を向けるだけの餘裕がなかつた。妻子の來たのも知らなかつた。

「あゝ苦しい、苦しい。水を吳れ！　水を吳れ！　いたあい。いたあい！」

と叫び續けた。

村井の女房は、その聲につれて身悶えして泣き轉がつた。

五人の親子が、一時に泣き喚いた。その聲は全で地球の上のあらゆる勞働者たちに、同僚として救ひを求めてゐるやうに響いた。

だが、どうする事も出來なかつた。

苦痛から救ふ事も出來なかつた。

慰さめる事すら出來なかつた。

ただ彼を運んで來た同僚――父とも――皆は、手をだらりと下げて、首をうなだれて悲しむよりなかつた。そしてその悲しみはだんだん苦しみに變つた。

誰もの心が疼み始めた。誰もの心の奥の底に、わざとそつと、觸れないでゐる傷が、負傷者とその家族の慟哭とに抉り出されたのだつた。

「火傷をしたのは村井であつて、俺でなくてよかつた！」と云ふ心から、「いつ此苦しみと絶望とが俺の上に降りかゝるかも知れない。今の仕事をしてゐる限りは！」に變つた。だが、今の仕事でなしに外に、その危險のない仕事場が「一つ」でもあつたか。

父は見るに忍びなかつた。逃げるやうに外に出た。そして醫師に會ふために診察室に入つた。

院長も副院長もそこにゐて、何か話し合つてゐた。――院長と副院長との二人が此病院に於ける醫師の全部であつた。――

「いつもお世話になります。どんな容態で御座いませう。怪我人は！」

父は院長に聞いた。

「そうですね。先づ駄目でしようね。あれほどひどく燒けてちや大抵むづかしいものですよ。皮膚の三分の一燒くと助からないと云はれてゐるのに、あれぢや九十八パーセントまで、燒け爛れてるんですからね。素人目から見ては普段と異りのないやうな處まで燒けてるんですからね。勿論、出來るだけの努力はしますよ。だが、あなた方も仲々大變ですね」

肥つた院長は莫を吹かしながら答へた。そして父――こう云つた所は都合上私と呼ぶことにする――私の職務にも同情して吳れるやうな調子を含めて云つた。

「えゝ、會社も仲々です。出來るだけ負傷者を出さないやうにと思ふんですけれど、矢つ張り營利會社だもんですから、豫防裝置が不完全なのです。尤も今日の火傷は作業場が急激に健康を害するやうな條件だつたのですが、これを會社側に云はせれば「本人の過失」と云ふ事にするのでせうし、われわれから云はせると、現場に技術者が居なくて無監督で、換氣の充分でない蒸し暑い酸素の不足な所で作業させたんだから、先づ會社は餘程叮嚀にしないといけないと思ひますからね。勞働者が考へればもう慾も得もありませんさ。一文もいらないから命を返してくれと云ふに極つてますよ。何しろ生命の問題ですからね。いや親身の者が命を落とした側と、向ふつ側で死んだのとは大分違ひますからね」

私は持出を出してしまつた。私の職業が命ずる申し分と全つ切り、正反對の事をベラ〳〵喋舌りしてしまつた。

「ほう、それは御達見ですな。全くですね。だがあなた見たいな思想を持つてゐられる社員に使はれる勞働者は幸福ですね」

院長は世渡りが上手だつた。話の角がすつかりとれてゐた。又聞きよう一つでどちらにも取れるやうに話した。

「ところがさうでもないでしよう。たとへばですね。私が勞働者の感じる所を感じ、要求する所を云ふ丈けの話で、實際の上に、私の力で一錢でも多く死亡手當や負傷手當を出す事は出來ないんですよ。それを出す者は「與へる」と思つてるんですよ。おまけに彼は、死んだ者も片輪になつた者も見た事もなく知りもしないんですよ。取引先の人と遊ぶ料理屋程も知りはしないんだ。よござんすか。死んだ人間の腕に幾人の家族がブラ下つてゐようが、それを知りもしなければ話して見た處で、迚も許いては呉れないんですぜ。だから私は勞働者の「味方」ではないんです。勞働者の「味方」なんて考へる事の中にはそれとは違ふと云ふ意味を含んでゐますからね。詰り私は、私たちの階級の一兵卒なんですよ。私は社員ですが勞働者を使用するのぢやないんですよ。ね。私も被使用人ですからなあ。私も村井も些も變つた事はないんですよ。

氣の毒でなりませんよ。村井君も家の事を思へば死んでも死に切れないだらうと思ひますね」

私は少し喋舌りすぎた。

「あなたは面白い意見を持つてゐらつしやいますね。些し私宅の方にも遊びにいらつしつて下さい。廊下續きですから。」

院長が云つた。

「いや、どうも。飛んだ方へ脱線しちやいました。惡しからず。それからどうでしよう、看護婦をつけて置く必要はありますまいか」

「さうですね。つければそれに越した事はありませんが、家族がついてるならそれでもいゝですよ。どちらにしても殆んど絶望ですから家族を側から離さない方がいゝでせう」

病室からはその間も絶えず呻き聲が傳はつて來た。私は再び病室へ入つた。

私の姿を見ると直ぐに、村井のおかみさんが私を捕へた。そしていきなり言つた。

「天理教の教師樣にお咀ひをして貰ひたいのですが、よろしう御座いませうか。それはどんな大火燒にでもよく利くので御座いますよ。」

「それはいゝでしよう。御存じの方があるんだつたらまじなつて貰つたらいゝでせうね」と、私は答

へた。

「ありがたう御座います。私はまた、「病院でそんなことを」と憤られはしないかと、それ許り案じてゐました。ありがたう存じます。それでは一刻も早く行つて參りますからどうぞお願致します。」

そう言つて彼女は出て行つた。

彼女はもう逆上してしまつて、子供の手を引いて行かうともしなかつた。子供たちは打つちやらかされはしまいかと、ビク〳〵しながら二人並んで兩方からお互によつかかり合ひながら、シク〳〵泣いてついて行つた。

村井は急に悪くなると云ふのでもなかつた。ただ、白い繃帶が赤黑い分泌物で處々、汚されて來るのが、その症狀であつた。

夕方になつて院長の診た處によると、「今夜は持つかも知れないが、明日は受合ひ兼ねる」さうであつた。そして院長は私を晩餐に招待して出て行つた。

やがて村井のおかみさんが歸つて來た。

それが番頭であつたら私は決して彼からボタン一つ買ふまいし、それが課長であつたら私は一度喧嘩を吹つかけたであらう、ところの天理教の教師が、おかみさんの後から入つて來た。

彼は天理教の教師であるにも拘らず、場末の質屋の番頭のやうな風態をしてゐた。そして角刈頭の下に陰險な目を、金縁の素透し眼鏡で隱してゐた。そしてシャカやクリストよりも早く二十四五歳の年齡でゐて、「あらゆる苦惱を人間から取り除く商賣」に携つてゐた。

私は愕いた。そして心配した。

若し此男が天理教のやり方に從つて、村井の繃帶を剝いだり、割れるやうな聲で怒鳴つたり、感極まつて踊りの祈りを上げてゐる際に、村井の頭でも蹴飛ばしはしないかと。

で、私は心配の餘りその教師を、一心になつて睨めつけてゐた。

然し、天理教の教師と雖も、常識を持つてはゐた。それに隨分病人を祈りもしたであらうが、彼自身が注射をして貰ひに來るその病院で、病人のまじないをする事は、彼も餘りゾッとしない事であるに相違なかつた。

從つて彼は極く簡單な方法でやる事に決めたらしかつた。太鼓も叩かなかつたし、舞踊もやらなかつたし、折角卷いた繃帶を引ん剝ぎもしなかつた。その代り、顏を赤くして、口の中でモガ〳〵五分間許り、効驗あらたかなる呪文を唱へて、背中にとまつた蠅を追ふやうな格好で、兩手を二三度振つた。それでお終ひであつた。

誰もがホッとした、各々變つた意味で。

私は村井のおかみさんにその家庭の樣子を聞いた。

子供が六人あると云ふのだ。「そのうち二人はもう自分で食べてゐますが、後の四人は未だ此通り赤ん坊で御座います。そして、その赤ん坊許りが村井と私との間に出來た子で、一人立ちになつたのは私の連れ子なんでございますよ。」

そこで彼女は何か鋭い釘でも踏み込んだやうに泣いた。

「何て旦那樣、情ない事になつたもので御座いませう。村井の兄は脊髓病で十何年も床の中で垂れ流して御座いますよ。村井が死にでもしたら、旦那樣、小さい子供や病人を抱へて、わしやどうしませう。わしやどうしよう。う、う、う。」

彼女は泣き伏してしまつた。

彼女は自分までが、體中の皮がピリピリ剝げさうに心を痛めた。

背中の子が又泣き始めた。いくら彼女が無意識に體を搖ぶつても泣き止まなかつた。

「おゝよしよし、いゝ子、いゝ子」と云つたり、子守唄を半分唄ひかけたりしたが、それでも喚き續けた。

「おお、おつばいがほしかつたのか。よし、よし。」

彼女は末の子に乳を含ませた。すると今度は上の二人の子供が、腹の空いたのを訴へて泣き始めた。迚もその騷々しさ、忙しさ、氣の、のぼせさ加減は、うんと澤山の子を持つた者でなければ味へない處のものであつた。

「おゝ、お前たち來てくれたのか！　俺もひどい事になつてしもうてなあ。坊も來とるかよ。おゝ。俺はもう今度は迚も助からん。迚も助からん。よくさへなりや、坊たちに今までより樂をさせてやるけんどなあ。あゝ、痛い。痛い。痛い。」

彼は再ひ體をもがいた。切るやうに叫んだ。

「あゝ、體中が燃えるやうぢや。」

不意に村井が口を利き始めた。

そして眼がパッチリ開いた。

「おゝ、あんた氣がついて吳れたか！」

女房はさう叫ぶと、いきなり村井の眼だけ出た顏の處へ、彼女の顏を持つて行つた。

「見えるかえ。わたしが見えるかえ。此子が見えるかえ。」

彼女は、自分の顏と、未だ乳を飲みたがつてゐる子供の小さな顏とを、夫の眠の前へ並べた。

乳呑兒は泣き出した。未だ乳は飲み足りなかつたし、自分の眼の前にある潜水服の頭だけのやうな無氣味なものが自分の父親である事など解らなかつた。

村井の眼から涙が溢れ出て、直ぐ繃帶に吸ひ込まれた。

どんな心で村井はゐるであらう。何を考へてゐるであらう。

私は盡きぬ泉のやうに溢れ出ては、又果てしもなく砂漠に吸はれて行く、彼の涙を見て心が痛くなつた。

苦しみと、悲しみとのひどく綯ひ交ぜになつた村井の心を想像した。そして、それ以上の呪だとか憎惡だとかは、反抗を知らぬ彼の心には浮ばないに違ひなかつた。

私は彼が若し數尺前までの視力を恢復してゐるならば、と彼の枕下へそうつと歩いて行つた。

彼は私を見た。そして、その凄慘な二つの怪物のやうに一變した眼に、感謝の念を表はした。私は彼の目で見られる事が苦しかつた。勿論立場を變へて、私が火傷して寢てゐるのであつたならば、工務係である彼に、矢張り感謝の念を表したであらう。そして又、それを表して惡い譯はあるまい。

だが、私は彼に感謝されるやうな手段を充分に盡し得るだらうか。

「村井君。災難でしたね。靜にして充分治療して下さい。會社の方は私が責任を以て、出來る丈けの事はしますからね。その點は安心して下さい。それから看護婦をつけませうか、それともおかみさんに居て貰ひませうか？」

私は出來るだけ靜に、私の最上の外出用的言葉で話した。そして恥しくなつてしまつた。「靜に充分治療して下さい。會社の方は責任を持つ。安心して吳れ」と、私は云つた。だが、ほんとに彼が安心して靜に治療したり、彼が今日まで養つて來た、此家族たちを、私は「責任を以て」生活し得るやうにやれるだらうか。

一も二もなく、それは不可能な事であつた。私は、そんな例を倦きる程見て來た。そんな例をまた倦きる程見なければならない時代でもあつた。

「ありがたう御座います。お頼み申します。家内がついてゐて吳れますで、看護婦さんはよろしう御座います。のう、おみね。」

「えゝ、私がついてゐるでなあ。」

妻君はうなづいた。

私は病室を出た。そして同じ病院で、同じ工場から來てゐる、折れた足にギプス繃帶をした職工と、

肋骨をひどく、外れたベルトで毆られて胸部に内出血した職工との二人を、見舞つて玄關で靴を履いてゐた。

「あの、院長さんがお待ちで御座いますから、どうぞ」

と、看護婦が云つた。

「未だ會社に用事がありますから」

と答へて、やゝ薄暗くなつた夕方の町へ飛び出した。

會社はもうすつかり靜になつてゐた。私のテーブルの上も片附けられてあつた。一切がいつもの退出後の樣子と變つた處は無かつた。工場も、恢復期の病人のやうに靜かであつた。大きい煙突、長い大きいキルン、それ等が夕闇をせき立てゞもするやうに、もつと濃い闇を隅々に作つてゐた。

キルンの奥では、村井が落ちた邊で、ハムマーの響きがあの世からでも來るやうに鳴つてゐた。火口から覗いて見ると小さい蠟燭の火がチラチラと見えた。全で、「狐の嫁入り」でも見るやうだつた。

私はアルミの辨當箱をガラン〳〵鳴らしながら、工場を出た。

工場の前は廣つ場だつた。海のものとも山のものともつかないやうな塵埃屑が散らかつてゐたり、思ひ出したやうに生へた草叢などがあつた。

港には澤山、汽船が浮いてゐた。碇泊燈が淋しく、高く揭げられて、陸を戀ふるマドロスの心そのまゝに瞬いてゐた。

私は、五號地から六號地――埋立ての番號――の間にかけられた橋の上に立つた。もうそんな時分にはそこは人通りはなかつた。

橋の手すりに凭れて、港の火に見入りながら、私は何かしら心の底から淋しさが湧いて來るのを感じた。

海員　玄關番、自由勞働者、事務員、

罪惡、罪惡、罪惡。そして漸く希望。

「俺は何も考へる必要はないのだ。俺は俺の唯一の寶の、あの可愛いゝ子供さへ育て上げればいゝのだ。誰だつてお前の不幸を救ふものはありやしなかつたぢやないか。だから俺だつて人の不幸なんぞに氣をとられたり、「世の中の仕組が間違つてゐる」なんて、途方もない大きい處に目をつける事など要らないんだ。そんな事に氣をとられてると、今までと同樣に自分自身さへ救へなくなるんだ。子供まで殺しちまふ事になるんだ。」

私は、橋の手すりを離れて電車の終點に立つた。電車は一時間で、私を嘉坊の家まで運んで吳れた。

父は、汗だらけ埃まみれの安背廣を脱ぎ捨てると、全で何かを奪ひかへすやうな勢で嘉坊を抱いた。

「若し俺が村井であつたらどうだらう」

父は嘉坊を出來る丈け多く、深く、長く、飴玉のやうに愛さなければならない。父が嘉坊を愛するのは、嘉坊のためではなくて、此父のためであつた。若し嘉坊がゐなかつたならばどんなに淋しかつた事だらう。父はお前を家に置いて會社に出るのが厭で、苦しかつた。

つき立てのお餅のやうなその皮膚。神様のよりも犬の子のよりも、可愛い〻その笑顔。父は何も信仰しなかつた、が、嘉坊は信仰してゐた。父は、地を離れて天上にではなく、此地上の未來に、眞實の天國を作り得ることを夢想してゐた。それは又作らずにはゐられる筈のものではなかつた。

「此父が、此可愛い〻嘉坊を、何の望みもない溝泥の中に、蛆虫のやうに産みつける。」

それでい〻ものだらうか！　よくない。だからコツ〳〵とその石の一つづつでも、父は運ばねばならないのだ、又運ばれてゐるのだ。だから又、嘉坊は父よりも、より進み、より完成された人間になる筈であつた。

（私は牢獄でこれを書きながら、それを念じてゐた。ところが、これを書いてゐる時分には、もうお前たちは仔犬のやうに捨てられ、仔犬のやうに餓えてゐたのだ。そしてやがて間もなく死んでしまつた。今、牢獄を出て、お前たちの死んだ事を知つた時、私は何を書いてゐるのだ！　と思はずにはゐられない。呼びかけるお前たちは居ない。

嘉坊よ。民雄よ。二人のわが子よ。ああ、もうお前たちは居ないのだ。そして此父は腐つたやうな生き方をしてゐる！　お前たちのあのいぢらしい面形をさへ忘れて！

嘉和よ。民雄よ。

（父の持つ理想は美しい。が行動は醜悪極るものだ。絶えず父の頭にコビリついて呪つてくれ！）

父はいつも母や祖母に云つた。

「子供を叱つてはいけない。子供こそ親を叱るべきだ。悪いことをするのは子供ではなくて、悪い事を教へるのが親だ。」

（と。そう云つた父の、此だらしのない、出鱈目なざまを見てくれ！

筆がにぶる。筆がにぶる。）

父は、「かうして嘉和を愛しながら、平和な、平凡な、無事な家庭生活を送つて行きたい。名前も要らない。たゞ俺をこの幸福のまゝ、さうつとして置いて呉れ。子供を愛育すると云ふ事の上に、俺

の一生の目的を置かせて呉れ。」

と、誰にともなしに頼むやうな氣持で暮してゐた。

「誰も俺にさはらないで呉れ。俺は壞れ易い大切なものを抱へて歩いてゐるのだ！」

さう云ひながら此父は人混みの中を歩いてゐたのだ。然しその人混みは決して穩かなものではなかつた。その混雜は全く戰爭であつた。さうだ。全く戰爭であつたのだ。

その戰爭中の混雜の中を、父だけがどうして、のんきに突き當らないやうに進んで行くことが出來やう。

然し、それにしてもあんまりひどく間違つた、狂つたやうな事さへ起らなければ、父は自分から突き除けてなんか行きはしなかつたのだ。なるたけ目を瞑つて、耳を塞いで、平凡ではあるが物の分つた、慈悲深い親として生きたかつた。

嘉坊は父に連れられて散歩に行つたり、又は家の前の狹い井戸端か何かで、人が少し、程度の過ぎる惡冗談をしてゐたり、本當に喧嘩をしてゐたりするのを見ると、それが全く嘉坊の知らない人であるにも拘らず、

「喧嘩しちやいけない。ケンカしちやいけない」

と云つて、泣きながら父の胸に顏を埋めたものだつた。

そんな時、父も一緒に泣き出したくなつたものだ。

父の幼い時にもこんな事があつた。

父は母――嘉坊の祖母さんだね――に連れられて、お芝居を見に見つた事があつた。今考へて見ると、それは「忠臣藏」であつたのだが、淺野内匠頭が腹を切つて赤い血を流した。

「血を出しちやいけない。血を出しちやいけない」

幼い父は泣き喚きながらさう叫んだので、母は慌てゝ連れて出たさうだ。

だから、父だつて涙一滴落さない、徹頭徹尾意志ばかりで固まつた鐵ではなかつたし、又、今でもないのだ。

ただ、此平和を愛する本性が、どうして鬪爭的になつたか。それは、平和を愛するからこそ、嘉坊のお餅のやうな頰に殘酷な答を加へようとするものがあるからこそ、此父は起たなければならなかつたんだ。

だが、それは未だ先の話だ。

で、父は世界中で一番可愛いゝ嘉和と、その後産れた民雄と二人を、「專門に可愛がること」に、生

きてゐる目的の凡てをかけて、アルミニュウムの辨當を抱へて會社に通つてゐた。

かうしてお前たちと云ふ尊い寶玉を、大切に抱へて、喜んで窮乏に堪へ不滿を抑へ、壓迫や暴慢を忍んでゐた。それは苦しい事ではあつたが、「平和な家庭」と云ふ避難所を、いつでも心の底に抱きしめて忍んでゐた。

然しそれはただ、「子供を愛し、子供の未來を樂しむ」と云ふ事の上にかゝつてゐた。それさへあれば充分であつた。が、若しそれがなければ、それは單なる卑屈に過ぎないのであつた。

翌日私が會社へ出ると、

「村井が今朝の五時に死んだ」

と云ふ通知が來てゐた。

私は香奠を送る手續をした。と共に工場法による遺族扶助料の算定をした。そして、又村井の死屍を「もつと完全に燒く」ための手續きもした。

それは悼ましい勞働者の死を送る、と云ふよりは、全で何かの取引きのやうな按梅であつた。

私は遺族の人へ、葬式の費用はなるたけ質素にして、遺族の將來の方へ、と言つたが、

「會社で殺されたんだから、戰死と同じ事だ。葬式位會社から立派にして呉れてもよい。」

と、死んだ村井の同僚が云つたので、「無理のない話しだと思つて、友人たちに委せる事にした。

「俺はなるたけ多く遺族へ金を出すやうに骨を折ればいいんだ」

私はかう思つた。そして社員からも香奠を贈るやうに、發起人になつて回狀を廻した。

葬式の日であつた。

職工たちが列するのに便利なため、夜の七時からそれを始めた。

私は五時頃から村井の家へ行つた。そこは溝だか道だか分らないやうな、ジメ〳〵した狹い路次の中であつた。

晝でも蚊がうなつてゐた。大通りからその路次に入ると、何かの腐敗した臭氣がプンと鼻を衝いた。その路次の行き止りから手前へ二軒目の左側が、村井の家であつた。それは人間が住んでゐるから人家であるので、客觀的には當然豚が棲むべきであつた。その六疊と二疊との間に、どんな生活が營まれたか。村井が先づ皮を燒き、それから更めて骨を燒かれるまで。

村井の末つ子は、彼が生れてから初めて、そんなにも澤山人が集まり、そしてガヤ〳〵と賑かであ

り、母や姉は又、小ザッパリした着物を着、自分まで新らしいエプロンをかけて貰つた事で、有頂天になつて喜んだ。

私はその子供の喜んで跳ねまはるのを、默つて言てゐた。それをあやす術を知つてはゐた。又、その子供の事を聞いて母を喜ばし、又悲します事も知つてゐた。けれども默つて、寧ろ人が見たらば憎憎しげに見えるであらう程、冷酷に默りこくつて見てゐた。それは未だ眞新らしい傷口と同樣であつた。觸れば飛び上る程痛いし、又血も出るのだ。そして傷口は未だその上五人の子供と、彼の妻との上にボカッと開いてゐた。

私は村井の遺族に對して憐憫の情を、勿論持つてゐた。それは私を根底からグラつかす程深くもあつた。が、それと同時に得體の知れない、何かしら腹立たしいものがあつた。

「村井も俺と同じやうに、その家庭生活をソーッと雨手で捧げて來たのぢやあるまいか？」

私は眼を瞑つた。私の心の足の甲の上に、重い金床を取り落した。私は、村井が天理教なんぞに參つてしまつてゐたのに、心の奥の方で堪へ難い憤懣を感じてゐたのであつたが、そこで私はハッとした。

「俺だつて天理教を信じてゐたのぢやあるまいか？」

そのうちに、多ぜいの職工たちが集つて來た。そして今度は天理教ではなくて、眞宗の坊さんがお經を讀んだ。その間中、會葬者たちは路次に立つて、足の蚊をビシャ〳〵叩きながら、だらしのないお經を聞いてゐた。

會葬が濟むと待ちかねたやうに、人々は去つた。

「立派な葬式だつた。矢つ張り死ぬんなら工場で死なにや嘘だ」

と、路次の中のおかみさんたちは言つた。私も歸らうとして路次を歩いてる時に、それを聞いた。

「馬鹿野郎！　手前等の亭主だつて死ぬんだぞ！」

と、私は怒鳴りたい衝動を迎へた。そして唾だけを力一杯ジメ〳〵した地面へ叩きつけた。陰氣極まる話であつた。

「そうっと捧げてゐる實は、どんなものだ？　あの榮養不良の子供たちか？　それも捧げ切れるのなら未だいゝ。だが自分諸共叩き落すのぢやないか。村井を見ろ！　あれが俺の姿ぢやないか、又、勞働者の姿ぢやないか」

「どうすればいゝんだ！　どうすればいゝんだ！」

が、私には未だその答へは與へられなかつた。

村井の葬式の濟んだ翌日、私は遺族扶助料の算定にかゝつた。

工場法施行令第八條

「職工死シタル時ハ工業主ハ遺族又ハ職工ノ死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ニ賃銀三百六十日分以上ノ遺族扶助料ヲ支給スベシ」

村井は日給一圓二十錢であつた。殘業手當や何かで平均一圓五十錢位にはなつてゐた。

最低限度に見積つて、一圓五十錢の三百六十倍だから五百四十圓。

それに同じ第九條に基いて、葬祭料を二十日分三十圓合計五百七十圓が、最低額であつた。

五百七十圓。子供たち。ジメ〳〵したあの家。脊髓病で垂れ流しの兄、女房。五百七十圓。六百圓。七百圓。八百圓。千圓。

そんな風にテーブルの前で考へてゐる中に、一體人間の命つてものはどの位價値のあるものだらう。値段に踏んだらどんなものだらう。

鯛と鰯。牛肉と豚肉。ロースと小間切。貴婦人と淫賣。大將と一兵卒。大臣と小使。

「畜生つ！」

私はペンをテーブルの上に投り出して、椅子の背によつかゝつて、頭を抱へた。

一萬圓でも安過ぎる！

アメリカの富豪プロキラーが死んだ時の葬儀費用は、一千萬圓であつた。然もそれは充分手を盡してその揚句の事であつた。焼け死になんかしなかつた。

三十圓と一千萬圓。村井とプロキラー。

私が殖して行つた金額は一千圓で止つてゐた。

「俺は村井を侮辱してゐるのぢやあるまいか？　死ぬまで働き通し、人を養ひ續けた村井の死を一千圓に決定するのは。それは明に侮辱だ。だが、最低なら五百七十圓だ。畜生！　俺には解らない。人間の小間切れ。人間のあら。人間のもつ。そんなものがあつて堪るか。堪るか！　堪るか！」

だが、私は目を瞑つて、一千圓と書いた。

工場主任が、それを七百圓に削つた。

庶務課に廻つて、六百圓になつた。

支配人に廻つて、四百四十二圓になつた。

一金四百四拾貳圓也は、日給一圓二十錢を三百六十倍にしたもの以外ではなかつた。

その四百四十二圓に八圓加へた四百五十圓が、ひどく面倒臭い手續の下に、一ケ月の後に、燕のや

うに大きな口を開いた子供たちと、女房と、兄との手に入つた。

私は駒田と云ふ支配人の處へ行つた。

「もう少し何とかして頂けないでせうか。」

と、私は私が貰ふのでもあるやうに、ビク〳〵しながら頼んだ。

「四百五十圓やつたぢやないか。此不景氣に七百圓なんて出せるかね。それに君は千圓請求したつてえぢやないか。君あ常識を持つてるかね。會社が金の固まりで出來上つてる譯ぢやあるまいし、そんな風ぢや安心して仕事もさせられんぢやないか。え。それに死んだ者に金を出して、それが回收出來るかね。それより金は生産的な方面に使はなくちやいかんよ。」

私は全で叱言を聞きに來たやうなものであつた。

「然し四百五十圓ぢや、あんまりひどいぢやありませんか。工場法の最低額にスレ〳〵ぢやありませんか。それに家族が多いのですから、何んとか一つ……」

「君あ何かね。金額の問題にまで立入る權利があると思つてるのかね。金額なんか君等の容喙する處ぢやないんだ。君がやる金ぢやないぢやないか。會社がやる金だ。」

「それや分つてゐます。(何が分るもんか) 勿論私がやる金でない事も知つてゐます。ただ餘り遺族が

多いから、も少し出してやつて頂きたいとお願に上つたのです。全く村井の家庭に行つて御覽になれば、よくお分りになると思ひますが、そりやひどいのです。少し雨が續くともう床まで水が上ると云ふ家でして、おまけに子供たちがグチャ〳〵居て、疊が見えない位なんです。その上村井の兄と云ふのが脊髄病でもう隨分永く寢たつ切りだそう……」

「止せ！　止めろ！」

「へえ。」

私は喫驚した。「止めろ！」とは何を意味するのか？　喋舌るのを止せと云ふのか、それとも切角ありついた仕事を止せと云ふのか、若し後者だとすると、私は飛んでもない暗礁に乘り上げたものだ、と思つた。

で、私は暫くボンヤリとそこへ突つ立つてゐた。兩方の手をだらりと下げて、膝關節をガク〳〵させながら。

「あつちへ行き給へ。會社は人道主義で經營されてはゐないんだ。そんな事をしたら一日でつぶれてしまふんだ。君はそれが氣に入らなかつたら、サッサと辭めて行つたらいゝだらう。君から人道主義の妙な說教なんか承る必要は、僕にはないんだ。それでやれるならやつて見るがいゝ。だが、此會

社では絶對にそんな事は出來ないんだからね。」

「どうも失禮しました。私は無理にお願すると云ふ譯ではありませんので、若し御都合が出來ますやうだつたらと、思つたまでの事で御座いまして、それでは、どうも失禮をいたしました」

尻尾を拔かれた山鳥のやうな格好で、私は重役室を出た。階段を下りて、庶務課を通つて、――退職大尉だか少佐だかの庶務課の書記が、私の尻尾のない格好を眺めて、ニヤリと笑つた――。

私は工場への、廣い砂つ原と、葦の濕地との空地を歩きながら考へた。

――俺は「願ふ」と云つた。が、本當は要求する積りだつたんだ。俺は別の方法で復讐する。復讐するためには俺は謝らねばならなかつたんだ。畜生！　一人の人間の生命を奪ひながら、直接にでは、ないまでも奪つておきながら、その死骸の上に奴は食卓の足を据えながら、奴等の作つた工場法で、最低の値踏みをしやがる。だが、奴は正直な處を云つたんだ。「人道主義では會社の經營が出來ない」と。そうだ。その通りだ。

――搾取以外に經營は成り立たない、と云つたんだ。その裏を云つたんだ。よし、その代り、勞働者だつて無抵抗主義ぢやないんだ。人道主義ぢやないんだ。よしんば今は、無抵抗であらうと、眼が覺める時が來るんだ。そして、今こそその時だ。――

私は、昂奮して、葦の葉を力一杯で引き拔いた。

――第一これは俺が出たのが拙かつた。工場主任を向けるべきだつた。だが、それは策戰上の間題だ。それ以上のものがあるんだ。俺が一個のサラリーマンであつて、勞働者の要求を代表しようとしたのが間違つてたんだ。矢つ張り要るんだ。組合が要るんだ。そいつを作り上げるまで、俺は馘首されても出て來てやる。――

――だが、恩惠的な態度で、俺が村井の家族を救はうとした事が誤だつたんだ。村井の家族だつて俺の家族だつて同じだ。被使用人は皆同じだ。奴等に人道主義が邪魔なやうに、俺たちにも邪魔だ。俺は組合で仇を取つてやる。その代り奴等は治安警察法で又敵をとるだらう。構はない。やれ！――

私は、それまで職工中の重だつた、二三の者に、私の地位を利用して、組合を作らせようとした。

私は會社の事務の上では、怠業に入つた。そして潜航艇式の組織者となつた。日本勞働〇〇〇の入會申込書や會則を送つて貰つた。そして數日のうちに組合をでつち上る決心をした。

可愛い子供、それのみが私の目的であり、歡びであつた。私の嘉和、凉しい河縁の散歩に、私の腕を椅子にして樂しまうとして待つてゐる、お前、妻、母。それを私は忘れはしなかつた。が、何か、

何ものとも知れぬ力が、私を夜の十時、十一時、電車に間に合ふ最後の時間まで、工場や職工の私宅に引き止めた。

私は修繕工の職長に私の計畫を語つた。彼は贊成した。その翌日は修理部の勞働者七十名は入會申込書に調印する事になつた。修繕工場のバラックで、蚊に食はれながら五錢のパン一つで辛抱して、夜十一時まで彼と語つた。

次の日は、私は夜の九時から製造部の各工場を廻つた。製造部は難關であつた。多くが不熟練工の上に、附近の農村から自轉車で來る者が多かつた。作業場が離れてゐて、勞働者同志の連絡がなかつた。

だが、それも、やがて結成される曙光が見えて來た。

會社の方では、未だ私たちの運動を嗅ぎつけなかつた。

私は表面冷靜であつた。仕事は怠けたが、執務中はテーブルを離れなかつた。

晝食の時工務課員の色々な話しにも、相槌を打つた。が、村井の事ば嘱にも出さなかつた。

その事で、工務課員や、庶務課の事務員たちは私を嘲笑つた。「初めは脱兎の如く、終は處女の如し」と云つて。

入會申込書は、どん〳〵その數を增して行つた。

四五日の中には、發會式を擧げる事が出來るまでに漕ぎつけた。

發會式を擧げる日の前夜、職工の食堂で、有志と共に組合に關する、色々の打合せや準備をなし終へた。

愈々、發會式の日であつた。その日の午後六時、晝夜交代の時間を利用して、發會式を工場内で擧げると共に戰鬪に移る、と云ふその日であつた。

私は、表面打ち沈んで、内心は踊り上りながら、門衞所のタイムレコーダーを、午前七時三十分に打つて、工務課へと急いだ。

ところが、そこに分析課の主任の有田と云ふ私の友人が、私を待つてゐた。

「一寸來給へ。」

有田は私にそう云つたまゝ、先に立つた。門を出て、工場の裏手の砂つ原の方へと歩いて行つた。

「君は勞働組合を組織しようとしてゐる。」

彼は少し歩調を緩めて、私と肩を並べながら、私の顔を見ようとはしないで言つた。

「勞働組合を作る事に、僕は不贊成ではない。けれども、君はそれを作れない方法で作らうとしてゐるのだ。」

かう云つた、彼は私の顔を言た。

「何と云ふんだ？　君は。サッパリ僕には譯が解らない。狂人染みた芝居は止してくれ。」

と私は云つた。

有田は、しかし續けた。

「君は製造部の職長の福地に、話しをしただらう。福地は工場主任の子分だ。福地は既に署名捺印した入會申込書の束や會規の印刷物と共に、君の行動を工場主任に話した。主任はその話を支配人の駒田さんに證據物件と共に持つて行つた。

支配人は、君を此處へ世話した北見氏に電報で知らせた。と同時に此會社の人夫請負をやつてゐる○○會の、親分に撲滅策を依頼したんだ。そこで、その親方は、足ほどの太さのステッキを突いて、君の來るのを僕の室で待つてゐる。

だから君は組合を組織する事が出來ないのだよ。

悪い事は云はない。君はこのまゝ家へ歸り給へ。そして辭表を出し給へ。後の事は僕が何とかするから。」

有田は、全くセンチメンタルな青い顔で、私を說いた。彼は、正直すぎる程正直で、小膽すぎるほ

と小膽であつた。私は、彼が氣の毒になつた。

「ありがたう。君の心配して吳れるのはありがたいよ。だけど、僕は暴力や奸策のために逃げ出しはしないよ。」

と私は言つた。

「それは解つてる。解つてるが然し組合はもうつぶされたのだよ。製造部の方は職長の福地が、組合に入るものは馘首してしまふ」と云つて廻つたんだ。それを又、一人も殘らず、反抗しないで承知してしまつたんだ。

鐵工部の方には、少しは組合を理解してる者があるやうだ。だが、理解してる者は、今騷ぐ時ぢやあないと思つてるんだ。今は時機ではない。

だから今日は歸り給へ。詰らない暴力のために怪我をしても、何の役にも立たない。暴力がなくても流産したんだ。又起つ時があるだらう。今夜、僕が君を訪ねるから今から歸つて待つて、吳れ給へ。

その時に、いろ〳〵な委しい話をしよう。

が、それはいづれ今夜の事だ。」

私はボンヤリしてしまつた。

福地と云ふ奴はそんな奴だつたか。

兎に角第一の策戰は失敗した。その失敗をよく見究めて第二の策戰に私は移らねばならなかつた。

「ぢやあ、歸る。一日休む。歸つて睡眠不足でもとりかへさう。いや、いろ〳〵心配をかけたね。ぢや、さようなら。」

私は、全て宿直員か何ぞのやうに、朝早く自分の家への電車に乘つた。

滴り落つる露の玉のやうに、私の寶玉は今落ちようとしてゐる。

私は電車の中で、何を考へたか、全つ切り覺えてゐない。

一時、私は眞つ黑い絶望の熱灰の中を、村井と同じやうに這ひまわつてゐた。

(三)

勞働組合組織の失敗の結果は、極めて簡單明白であつた。私は馘首された。

私は今度は社外から運動を繼續したが、これは齒の痛いのに頰つ邊を擦るのと同じであつた。

その後、幾人の村井や板倉などが、そこから出たかを私は知らない。だが工場が大きくなつて行つたことは、私の目で見た。一本しかなかつた廻轉窯キルンは三本になつた。

鐵道を引き込んだ。クリーム色のペンキ塗の事務所も出來た。ポプラも事務所の周圍に植ゑられた。

その中にある勞働者の生活が、工場の內容外形と共に良くなつて行くかどうか？　それは私は知らない。だが、工場の土臺を固め、投資者の生活の血や肉を爲す處のものは、多くの勞働者の勞働と、悲慘なる生命の犧牲である事は事實だ。

かう云ふ譯で、此哀れな父は、半年にならない中に再び失業した。今度こそは、かけがへの無い嘉坊のために、馬鹿になり、鈍馬になり、無神經になつて暮さうと決心した事が、ひどい頭痛の耳鳴りと一緒に、根柢から覆されてしまつた。

有田と云ふ友人の補助丈けを當てにして待つてゐると云ふ譯には行かなかつた。彼は寧ろ正直偏執狂とも云ふべき頑固な正直者であつた。が、收入の點に到つては此の哀れな父と大差は無かつた。

父ちやんは、もうどこへも行かなくてもよかつた。だから、朝から晩まで可愛いい嘉坊と一緒に暮すことが出來た。だけど、どこへも行かないで「暮せる」事が幾日續けられるであらうか。一錢の貯もないプロレタリアは、「どこへも行かなくて濟む」と云ふ事は、「どこへも行く處が無い」と云ふのと同じ事なのだ。

「どこへも行く處がない」結果は、ひどく父の氣持を荒つぽく、虛無的にした。勞働組合の組織には

失敗したのだし、自分の首はスッパリやられたのだし、米も金も無いのだし、可愛いい嘉坊の發育盛りが、あべこべに一日增しに衰弱して行くのを見詰めてゐなければならないのだし、そんな事ならいつそのこと、何もかもたゞ一擊に打つ壞して終ひ度い！　と考へないでは居られなかつた。

當時N市には政友會と憲政會との、猛烈に喧嘩してゐる二新聞があつた。その憲政會側の新聞の主筆が、「宣傳について」の頗る妙ちきりんな雜文を書いた。詰り「宣傳と云ふものは何の意義も無い」と云ふ宣傳なのであつた。

それに對して父は、「そんなら新聞社なんかに居るのを止した方が早道であらう」と云ふ意味の、捨身の感想を反對派の新聞で發表した。

ところが、その父の文章が發表されると直ぐ次の日に、父が攻擊した新聞の主筆が、「是非會ひ度いから社まで來てくれ」と、云つて手紙を寄越した。

「さては憤りやがつたな。文章ぢや面倒臭いから腕づくで來い！　と云ふんだな。面白い。生きてゐたつて子供一人滿足に養へないやうな俺だ。あつさりやられてやらあ」つてな調子で、直ぐ樣出かけた。

新聞社は古い洗濯板程も磨り減らされた、木造の三階建であつた。

父は直ぐその二階の一室に通された。それは新聞社の應接間と云ふよりも、刑務所の面會室に似てゐた。吸口まで吸ひ盡した煙草の吸殼のやうな感じだつた。

主筆は直ぐに出て來た。父の想像では鏃の代りにバンドを締めたビア樽のやうな男であつたが、現物は痩せ切つた、背の高い、殊に眼丈けが大きく見えて、顎の尖つた神經質の男であつた。

「やあ、お待たせしました。わざ〳〵來て頂いて濟みませんでした。實は……」

詰り一口に言へば、――君は面白い男だ。見込みがある。今、社に、勞働記者の缺員があるが、一つやつて見る氣はないか――と云ふのであつた。

勿論、父は、たとひその餌の中に針があらうと、ダイナマイトが入つてゐやうと、そんな事に構つてゐられる場合では無かつた。

「やれる丈けやつて見ませう。」

と父は答へた。

こんな譯で、父の强制懶惰の期間は半ケ月許りで、奇蹟的に免れて、新聞社の「勞働記者」となつた。

その夜の一家の喜は全く素晴らしいものであつた。枯死の最後の瞬間に水を得た植物よりも、甦生の意氣が暗い暑い二階に蘇つた。

父は嘉坊の遂々泣き出して終つた程、キスを顏中に押しつけた。嘉坊が泣き止むと、お前の母もま

たやつた。そして最後に、狂つたやうに祖母までが笑ひ出した。

此時は全く、「お天陽様と米の飯はどこへでも跳いて廻る」と云ふ俚諺を信じた。

「もう、さうお前はお言ひだけれど、今度こそは輕はずみは爲ないでね。で無いと子供が不憫だからね」

と、お前のお祖母さんが、眼に何とも言ひやうのない感じの籠つた涙を溢らせて、父に言つた。

父もさう思つた。

――今度こそは、もう一切嘉和のための生活だ！　若芽を育てるための櫟の切株のやうに俺は生きればいゝのだ。若芽の育つ事に俺の全使命はあるのだ！――父は固く自分自身にもお前にも契つた。

N新聞社は父の巣から近かつた。今までの會社に通ふのから較べると、五分の一の距離も無く、歩いても二十分はかゝらなかつた。それに給料も會社と同じで、その上主筆の好意で、一ケ月書籍代と云ふ名目で二十圓づゝ貰へることになつた。その上勤めが、會社時代とは比較にならなかつた。お晝過ぎから社へ出て、それから父の氣の向いた處へ出かければよかつた。「記事なんか最初三四ケ月は書かなくつてもいゝ」と云つた調子だつた。

「こんなうまい職業は無い」と云ふ事に一家の意見が一致した。そして、嘉坊を中心とする一家の生活が今までよりもズッと明るく、幸福になつた。

八月末の暑い日を浴びながら、二三日、社へ通ふ中に九月に入つた。

月給は今までより多くて、仕事は十分の一もない、と云ふ狀態は苦痛なので、父は殘暑が煎り立てるやうな通りへ出て、街路樹に凭れて、大通りの人の往き來を眺めてゐた。

電車、自動車、自轉車、荷馬車、荷車、人力車が往復した。それ等の多くは特別な注意を人に起させないで去つた。人は實に多くのものに注意を拂ふことを忘れてゐる時代であつた。忘れてゐなければ知らないのか、又はその暇の無い時代であつた。

又、利己的な立場から云へば「見て見ぬ振りをする」方が「賢こい」時代でもあつた。そんな風に出來ない性分のものは、何時でもひどい苦難な生活の中にあるか、又は破滅しなければならないのだつた。

父はその時、一つの情景に注意を牽きつけられた。十一二位の小さな男の子が、荷車にブリキ板を載せて、見た目では感じない程の緩やかな坂を登り惱んでゐるのであつた。

少年の額からは洗ふやうに汗が出てゐた。着てゐる絆纏も同じだつた。殊に父を引きつけたのは少年の眼であつた。十一二の少年の眼は惡戯らしく燃えてゐるとか、無邪氣に見開いてゐるとか、穩やかに澄んでゐるのが普通であるのに、此少年の眼は訴へてゐた。馬車馬が泥濘に車を引き入れて、瀕

死の境まで毆られながらも、反抗も呪も持たないで、たゞ悲しみと困惑と苦痛だけの、引き入れられる眼差しと、すつかり同じ眼をしてゐた。

その時、父の心にはもう「新聞記者」としての心構へは無かつた。父は少年の方に驅けて行つて、少年の代りに荷車を街路樹の特によく茂つた木蔭まで引つ張つて來た。

少年は最初驚いたやうに見えたが、父がブリキの引き逃げをやるのでは無いらしいのを知つて、猫がするやうに兩手の袖で顏を拭きながらついて來た。

「此處で少し休まうね。」

と父が言ふと、少年は默つてうなづいて見せた。

それから父は「新聞記者」の意識を恢復して、何氣なく少年の住所や、身の上や、主人の姓名などを聞いた。

「主人に使はれるのは樂ぢやあるまいね。」

「えゝ、眠いのと、飢じいのとさへなければ、外に苦しは事はありませんよ。」

と、少年は答へた。それは父にひどく應へた。

父も晝食が未だだつたので、直ぐ背後のパン屋でジャム付きのパンを買つて來て、二人で、兄弟のやうに並んで食べた。

少年はパンを嚙みも味はひもしないで、家鴨のやうな格好に首を振りながら、慌てゝ呑み込むのだつた。それは囚人が飯を食ふのに似てゐた。

——十一になる少年が、「飢じいのと眠いの」との苦痛に虐まれながら、充分に發育する事が出來るのであらうか！　「外に苦しい事は無い」と、少年は云つた。だが、此少年に取つては、それが苦痛の全部ではないか。——

父はそう考へながら、少年のパンの食ひつ振りに見惚れてゐた。父が未だ半袋も食べない内に少年は平げてしまつた。も一度父はパンを買つて少年に渡した。それも見る間に少年は胃の腑に送り込んだ。

それは決して快い情景では無かつた。殊に父にとつては、嘉坊の將來と云ふ考がこの情景と一緒に、頭にこみ上げて來るのだつた。

——自分の子供をこんな狀態に棄てる事は、總ての親の恥でなければならぬ。誰の子も、こんな狀態に置くのはいけない——

と、父はその時考へた。同じやうな、いや未だ〳〵ひどく惡い「死」が嘉坊の上に來やうとは、その時は未だ此父は知らなかつたのだ。

少年と父とは一時間許りも、木蔭に、足を車道に向けて坐りながら話した。

車道には、父たちの前を、その少年と同じ位のや、ひどく老ひ耆れた爺さんだのが、荷車に根限り噛りついて通つた。その側を自家用の自動車で風のやうに擦り拔ける紳士淑女は、時代のスピードを享樂してゐた。

父は登り坂の無い處まで、荷車を曳きながら少年を送つて行つた。

少年がその車を曳く距離は一里半もあるのだつた。N市のN驛からA驛までも！

父はそれを讀み物風に書いて編輯部へ出しておいて、嘉坊の笑顏へと急いで歸つた。その途中で父はフト考へた。——あんな事を記事にしたが、あれがあの少年のためにいくらかでも、何かの足しになるであらうか？　あれは自分の職業のためにした事では無かつたか？——父は恥かしい氣がした。

家に歸ると嘉坊が笑顏で迎へてくれた。父は充分に嘉坊を愛撫して眠る事が出來た。

翌る朝、汗にまみれながら朝寐坊をしてゐる處へ、社から葉書が屆いた。

「昨日の記事は大變面白かつたから、あんな風なものを、もう一週間位續けて書いて欲しい。猶、今日歸りに一寸會ひ度いから」

と。差出人は主筆であつた。

で、その日は昨日のやうに自然な氣持では何かに打つ衝れなくなつた。

晝前から堀川にかゝつてゐる橋を、下流から順に上流の方へと、「何か記事になるもの」を探しながら、鋸の齒形に歩いてゐる中に、ひどく慘めな氣持になつて終つた。

「生きて行くのは苦勞だ。無産者は苦しむために生きてゐるやうなものだ」とつくぐ悄げ込みながらテクる前を、同じやうに消然とテクる猿舞しを見付けた。

猿舞はしの跡を三四時間も跡けたが、その炎天の下では誰も猿の舞ひに立ち止らうともしなかつた。

猿舞しが邪慳に、猿を木蔭に投げ出して、自分もゴロつと横になつた處を、父も浮浪人見たいな顏をして話しかけた。

その日もそれを記事にして編輯部へ出して、歸りに主筆に會つた。

主筆は父に言つた。

「あゝ云ふ記事は夏枯れには持つて來いなので、全く有り難う。迷惑だらうが少し續けてやつて吳れ給へ。」

そして直ぐにその場で、賞與及び記事資本として十圓渡してくれた。

これは意外の收入でもあり賞讃でもあつた。父は家へ歸ると、お前の祖母や母に此事を話して、「こ

んな調子ならこれからはうまく行くだらう」と、家族中で喜び合つた上、その夜は、嘉坊の爲に何かの催しをやる事にした。それはいつも散歩であつた。

父は嘉坊の悦んだ此散歩の詳細な記錄丈けでも、恐ろしく大部な三部作を書くことが出來る。だが今では悲しみのためにそれが出來得ない。

その夜は嘉坊の頰が、乳房のやうに祖母、父、母によつて交る々々吸はれた。お前は顏をしかめながらも、キャッキャとふざけて、皆の顏を兎がするやうに引つ搔いて喜んだ。

餘り暑いので、夕食はいつも父が社から歸つて風呂を濟ました後、少し晩目に食べる事にしてあつた。その仕度の間、父は嘉坊を抱いて表の床儿へ腰かけて、嘉坊の自慢旁々涼むのが例になつてゐた。

その時は近所の子供や娘さんたちなどが、爭つて坊やを抱かせてくれと父にせがむのだつた。坊やは誰にでも又喜んで抱かれた。

夕飯の仕度が出來ると嘉坊は母の膝の上で乳を呑みながら、「皆は何か食べるのに、どうして坊やは呑んで許りゐなければならないのだらう」とでも言ふやうに、いきなりお膳の上に足を踏ん張つたり手を突き出したりして、皆を慌てさせた。

室が暑くて狹く、おまけに暗かつた事は、セメント會社へ出てゐる頃と些も變りは無かつたが、今は、父たちには氣持の上に裕りが出來て來たゝめに、それ程ひどい苦しみを覺えなかつた。殊に食事は一人でどんなに美味を採るよりも、嘉坊に引つ搔き廻されながら採る方が遙に美味かつた。それは皆と嘉坊を中心とし得る事から來る贈であつた。

今までのどの生活よりも、新聞記者生活は父に適してゐるやうに見えた。從つて、それは嘉坊にも適してゐた。嘉坊に適するものならば、父はそれに適應するためにあらゆる努力を惜しまなかつた。又、正直の處、それは父自身にとつても適してゐた。だから記事を書くのは、職工の傷病手當の算定などよりも骨が折れなかつた。

「お母さん、今度こそは大丈夫ですよ。これなら死ぬまで面白くやれますよ。ねえおい、お前にも着物の一枚も買つてやれるやうになるだらうし、嘉坊にだつて充分に營養を與へる事が出來るよ。あゝ、今まではどうなることかと許り思ひ續けて來たが、これで漸く足溜りが出來たと云ふものだ！」

と、此父は言つて、皆と喜を共にした。

そして此喜は實際三四ケ月の間、全く父の家庭を幸福に保つて吳れた。

その夏は、それ迄に日本での最も大きな爭議だと云はれた神戸のM、K兩造船所の同盟罷工が起つた。

父は主筆にその爭議の特派記者として派遣して呉れるやうに頼んだ。主筆はそれを快諾して、社の二等パスまで貸して呉れた。

菜っ葉服を着て、父は二等車に納まつて×市へ向つた。×市に着くと直ぐ爭議團本部へ行き、新聞記者としてゞはなく、一勞働者として爭議の應援に加はつた。

この時には日本の工業都市では、字義通り燎原の火の如くに爭議の火の手が擧つた。そして此時代はサンヂカリズムが、勞働運動の指導理論であつた。

此大爭議を應援しながら、父は勞働運動の戰術を覺え、又、その熱に感奮さゝれた。一勞働者が〇〇〇〇のために殺され、その葬式の時の情景などは永久に父の階級的頭腦に烙印された。

一方、父は爭議の種々なエピソートを隨筆風に書いて社に送つた。

×市から歸ると間も無く、×市にドック爭議が起り、父自身の住んでゐる×市にも大爭議が起るゝとになつた。この爭議には父は直接に關接のある立場に立つた。工場の名前を×時計電機會社と云つた。

一九二一年十月の五日であつた。秋であつた。

バラ〜だつた勞働者が、一つの巨大な勞働者に組織された。

工場は堀川に沿つて、鐵筋コンクリートの三階建の巨大な建築であつた。三千の勞働者がその中で働いてゐた。

その勞働者たちの中の數十人が、父もその一員である勞働組合に入つてゐた。極めて興味ある事は、父を社に入れた主筆が此組合の實質的な創設者であり、後援者であり、おまけに此會社の政黨的色彩が、その新聞社と同じである事だつた。その上、猛烈に對立してゐる二政黨が丁度その時、市會議員選擧戰に白熱的な鬪爭をやつてゐる時であつた。

四日の夜、父たちはある家に集つて、明日から起す爭議についての相談をやつてゐた。

工場内では全勞働者が既に組合に加入して終つて居り、爭議資金まで徴收濟みになつてゐた。

父たちが、爭議團の本部や要求條件等に關して打ち合せをしてゐる處に、主筆が自動車で慌てゝ驅けつけた。

そして父を表へ呼び出した。

「君、此爭議は止めてくれ！　僕の社に對する立場が無くなるから。」

と、主筆は常から神經質な顏を一層青くしながら、父に云つた。

「私にはどうすることも出來ません。組合が動き出したのですから、私にはもう何の力もありません。」

と、父は答へた。事實、主筆には氣の毒であつた。主筆が創設し後援してゐる組合が、時も時、市會議員選擧戰の白熱化してゐる時、自派の最大勢力である會社に打擊を與へる！

これは勿論、主筆にとつては重大な迷惑であつた。父としても、個人的な關係からするならば、主筆は恩人であつた。それは否むことの出來ない事であつた。

だが、父個人の持つてゐる感情や利害などと云ふものは、組合と云ふ巨大な勞働者に較べた時、何の力も無いものであつた。それが動き出した時、主筆の力も、父の力も、全く無力であつた。

「それぢやあ君、僕に熟え湯を飲ませるのかい！」

と主筆は父に云つた。

「私を責められても、私にはどうする事も出來ないのです。それより貴方も組合に關係がお有りになるのですから、入つて皆と相談なすつたら如何ですか。私としては全く貴方にお氣の毒だと思ひますけれど。」

「君は「飯犬に手を嚙まれる」つて事を知つてるだらうね。君は「恩を仇で返す」つてことも知つてるだらうね。それを君は今、君自身でやらうとしてゐる事を知つてるだらうね。ね、君、頼むから止めてくれ。交渉の條件は僕に一任して吳れゝば、僕が專務と友人だから、僕と專務と交渉するからね。」

「私には貴方の氣持はよく分つてゐます。私は恩を仇で返さうなどゝは決して思つてゐません。又、貴方に煮え湯を飲ませやうとも思つてはゐません。だけど、組合員が組合に依つて、「も少し人間らしく扱つてくれ」と要求するのに、私が「一寸待て」とは殺されても云へない事ではありませんか。それに普段から貴方は私よりも、組合員を教育して來られたのですから、貴方自身で皆と相談して下さいませんか。」

「それぢやあ、皆と相談して見やうが、君は僕の意見を支持して吳れるだらうね。」

「まあ、兎に角く、お這入り下さいませんか。」

こんな風にして主筆は、爭議團の幹部會に列席した。

そして主筆は再び驚きを增さねばならなかつた。そこに集つてゐるものは皆、主筆が教育した勞働者許りであつた。のみならず、父の外に今一人、矢張り主筆が抱へ込んだ地方版の記者が居たのであつた。

「君もか！」

と、主筆は鴨田と云ふ記者に云つた。

「貴方に到頭かぶれて終ひました。」

と、鴨田は答へて頭を掻いた。

その返答は皮肉に聞えた。

「君は僕を侮辱する氣か！」

と主筆はカッとなつた。鴨田は主筆がどう云ふ意見を持つて來たか知らなかつたので、すつかり面食つた。そしてへまな返答をやつた。

「どうしてゞすか」

「君も僕に煮え湯を呑まさうと云ふんだらう。え。」

「私にはさつぱり解りませんが……」

問答がとんちんかんなので、父は危く噴き出しかけた。

「君たちはどうしても此爭議をやる積りなのかね。」

主筆は皆に話しかけた。

「えゝ、もう決定しました。明日からやる事に決りました。」

と、職工の川本が答へた。

「その要求條件は決つたのかね。」

「五日前から出してある嘆願書をそのまゝ要求書にしたのです。」

主筆は要求書を手にとつて目を通した。

「どうだらう。これを僕に貸して吳れないかね。支配人の增本君に會つて個人的に交渉して見たいのだが。これが通りさへすればいゝのだらう。」

「さうです。」

「それぢや明日僕が交渉するから、明日一日丈け要求書を提出するのを待つて貰へないだらうか。」

「今夜中ならばいゝでせうが、明日になつてはもう駄目だと思ひます。やつて下さるんだつたら今夜中にして下さい。」

主筆は慌てゝ要求書の寫しをポケットへ入れて、自動車で支配人宅へ飛んで行つた。

主筆の困る處は爭議團側では有利な點であつた。市議選擧！

主筆は支配人と會つたが解決は出來なかつた。その結果は到頭、父は主筆に「煮え湯を呑ませた！」ことになつた。

父はその時につくゞと感じた。頭の中で丈け、勞働者の「救助」を考へてゐる者は、どたん場で邪魔になる丈けであることを。

然し、煮え湯を飲んだのは主筆では無くし、此父たちであり、その家族たちであつた。いや嚴密に言ふならば、勞働者たちは、絶えず煮え湯を呑まされ續けて來たのだつた。

翌日。一九二一年十月五日。A時計電機會社の工場では、平常と違つた空氣が勞働者の間に溢れてゐた。傳令が工場から工場へと飛んだ。始業のサイレンが鳴り響いても、勞働者たちはベルトをかけなかつた。

「廣場へ！　廣場へ！」

と云ふ聲が耳から耳へ傳はつた。勞働者たちは未だ思ひ切つて職場が離れられなかつた。が、誰かが、隅の方で叫んだ。

「廣場で演説が始まつたぞ！」

「動力が止まつたぞ！」

そして、二三人の勞働者が鑄物工場裏の廣場へかけ出した。

それにきつかけを得た勞働者は、狹い扉を押し合ひながら、廣場へと雪崩れ出た。

廣場ではもう演説が始まつてゐた。

父は職工では無いので塀の周りをウロついてゐると、爭議團員が通用門を開いて呉れた。父の入つた時は、川本が古ボイラーの上に立ち上つて、吠えてゐた。

「我々は一歩を讓つて嘆願の形式で、餘りにも遠慮し過ぎた條件を出した。だのに會社はこれが嘆願であるからと云ふ理由で受けつけない。だから我々は、これを正當な要求書として提出しなければならん。我々が要求書提出後の回答期間をどう云ふ風にするか！」

「直ぐに返答させろ！」

「いつまで待てるか！」

二千餘の勞働者はどよめき渡つた。

「では直ちに交渉委員を擧げやう。どうして委員を選出するか。」

「指名！」

「指名」

「そうだ！　指名しろ！」

そこで川本は策戰に從つて五名の委員を指名してボイラーを下りた。

交渉委員が事務所の方に連れ立つて行くと萬歳の聲が、遙に市中にまでも擴がつて行つた。

後から後からと勞働者がボイラーに登つた。中には生れて一度も演説をした事の無い勞働者なども多かつた。が、群集の生む昂奮と熱とに釣り込まれて、辛抱し切れなくて飛び上る者もあつた。

「人はパンのみにて生くるものではない、」などとやり始めると、

「そうだ！　肉も稀にや欲しいやい。」

と彌次られたりした。

「天高く馬肥ゆる秋と云ふに、俺たちの頭の上には煙が低く、餓鬼も女房も痩せてゐる。」

「そうだ！」

幾人も幾人もボイラーの上で怒鳴つた。

一時間餘りやつてる中に交渉委員が歸つて來た。

「交渉委員の報告が、今からある」

川本が演壇に立つた。

「會社は我々の要求書を受付けさへしない。これからどうするか！」

「示威運動！」

「直ちに罷工に入つて、示威運動に移れ！」

「今、直ぐに罷工に入つて示威運動に移れ、と云ふ者があつたが、諸君に異議は無いか」

「異議なし。やれ〳〵」

そこで喊聲が擧つて直ぐに示威運動に移る事になつた。

父が役付職工の意見を聞いてゐる中に、傳令が飛んで來て、「デモンストレーションに移つた」ことを知らせに來た。直ぐに廣場に驅けつけて見ると、機轉の別いた勞働者が運動具倉庫から運動會旗をありつたけ持ち出して來て、其旗に依つて隊伍を組織してゐた。

示威運動には女工も參加した。その三千人の勞働者が團結して拵へ上げた巨大な勞働者は、巨歩を踏み出した。

構内の各工場を一廻りしてゐる間に、いくらか殘つてゐた勞働者たちも、磁石にくつ付く小さな鐵片のやうに、示威行進の列中に這入つて來た。

示威行列が工場の正門から堀川に沿ふて、凱旋道路に出ると、急を聞いて驅けつけた騎馬巡査が、市中の目貫の方へやるまいとして三騎許り立つてゐた。

此長い巨大な勞働者の行進は、その騎馬巡査の前へ行く部分が、必ず膨膨し、潮鳴りが高くなるのだつた。それは奔流が廻り角に強く打つ衝るのに似てゐた。

行列は右に折れて、凱旋道路を、階級戰に勝つた凱旋車の如くに、勞働歌や×××などを怒鳴りながら公園に向つた。

公園に入ると先頭は音樂堂の周圍を廻り始めた、ぐる〳〵廻つてゐる間に行列は音樂堂を捲き締めてしまつた。それは外部から○○○たちの潜り込めないための、勞働者の筋肉の堡壘であつた。

その勞働者たちの逞ましい筋肉の堡壘の掩護の下に、勞働者たちの演說が續いた。それはまるで心臟が舌の先に飛び出した、とでも云ふやうな口調であつた。

「野郎は全で、アセチレン酸素ガス見たいに唸つて、燃えてやがる」

と、私は今までに一度も見た事の無い、鐵管見たいな感じのする勞働者の演說を聞きながら思つた。

一方、音樂堂の眞下では、爭議團本部をどこにするか、について相談會が開かれた。その時には正私服の警官が驅けつけたので、早く本部を作つて引き上げねばならなかつた。

「よし、構ふこたあない。そこの空家へ拵らへちやへ。軒並に空いてるんだ。どうせ毀す家なんだ。占領しちやへ！」

川本が、どなつた。

空家と云ふのは、市區改正のために立ち退いた、公園前の商店街の事を指したのであつた。

で、再び勞働者の巨軀は立ち上つて、淸光軒と云ふ、巨きな西洋料理店の立ち退き後の空家へ入つた。

「こんな時でゝも無けれや、俺たちは大きな洋食屋なんかにや入れねえからな」

と誰かゞ、喚いた。笑ひが起つた。

「兵糧が無くなつたら、床板を削つてスープを拵らへるんだ。こちとらの味噌汁よりやうめえぜ」

「おうい幹部！　俺たちやスープの材料の上に直かに寢るのかい」

などと、めい〳〵に喚き立てた。

が、それ等の情勢を委しく知る間も無く、私は他の三人の仲間と、箒を持つたまゝ——床を箒いてゐたので——警察へ連れて行かれた。

警察の裏門からの道は監獄へ續いてゐた。そして、面會、差し入れ、家族の困窮、同志の鬪爭、などは、何時の時代でも變りのない事である。それについては前の處で語りもしたし、折があれば私としても、委しく語り度いと思つてゐる。

二ケ月餘りの未決の生活——それは死では爲い。だがそれは生活であらうか？　私は私の生涯から

監獄で暮した年月を減じて考へる癖を今でも持つてゐる。――その二ケ月餘の後、娑婆に出て見ると私を迎へに來てゐた同志や家族は、入つた時とはあべこべな方面に私を案内して行くのだつた。

脂肪分の切れた、そして薄着の私は、寒さに顫へながら、私の借間が留守中に追ひ立てを食つた事を聞いた。寒さの外に怒りも私を顫へさせた。

私は多くの怒りと感謝とを、最初の未決で學んだ。私は感謝するか怒るか、その二つの感情以外には何にも持つてはならない事を學んだのだ。

「敵か味方か」そのどちらかに屬しないものは、私の眼の前に現はれなかつたからであつた。そこでは私は叱りつけるか、意地の惡い眼で見張るか、私を鼓舞し、慰さめ、又は泣いてくれるか、のどちらかの人間の、二つの無限の行列がある丈けであつた。その行列は獨房の前から、監獄の庭を通り、門を出て、内地から海を超えて、世界の果まで續いてゐるのだつた。

私はそれを理論の形では言ひ表はし得なかつたが、二つの行列と云ふた風な感じで覺え込んだのであつた。

追ひ立てられて遁げ込んだ、今度の私たちの巣は、塵埃捨場の上に捨てられた壞れた玩具の家、とでも云ふべきであつた。だが、その長屋の一隅も私たちの行列の中の一人の好意から借りられたものであつた。その家の借主は馬場寛と云つて私の無二の幼友達であつた。

馬場寛は會社の都合上、その家を借りつ放しにして、木曾地へ家族連れで出張してゐるのであつた。

この男程、氣の弱い、人の良い、善良で、病身で、おまけに運の惡い男を私は見た事が無かつた。それは見てゐる方が焦れつたくなる程の善良さであつた。

最も此男が可哀想なのは、女房を間違へて抱へ込んだ事であつた。彼の女房はどうしても馴らすことの出來ない縞馬の牝のやうなものであつた。彼はしよつ中、女房に打ん毆られるか、嚙みつかれるか、又は追ひ出されるか、自分から逃げ出すかしてゐた。

そして女房の彈壓が劇甚を極めると、私の處に救ひを求めに來た。

ある夏の夕方、彼はひどく蒼くなつて私の處にやつて來た。

「今日は濟まないが、一つ泊めて吳れないか。」

と、彼は言つた。

「どうしたんだね」

「いや、女房の奴め、出刄を研ぎ始めやがつたんだ。」

「それで？」

「どうも危ないんだよ。魚も肉も買つた譯では無いんだからね。」

「仕樣が無いね。君見たいにしよつ中女房におどかされてぢや。そいぢや、僕が一緒に行つてやるからあべこべにおどかしてやれよ。」

そこで、二人で彼の家へ行くと、夕立場句の庭の水溜りの中に、いくらも無い、彼の家の夜具から蚊帳、着物、全部が投り出してあつた。

「これなんだからね。」

と馬場は無表情に言つた。

私は此夫婦のやり方にあつけに取られた。

女房は二人の姿を見ると、今度は鍋、釜、俎、庖丁、手當り次第に投げ初めた。

「君は一體、女房の亭主なのか。それとも仇なのかい？　一體、これや、どうしたつてんだ。」

「雨が悪いんだよ。あいつが「切角洗濯したのに又降つて來た、しようがありやしない」つて云ふから、「それや俺のせいぢやないよ」つて云ふと、あの通りだ。一體、雨と僕と、どんな關係があるんだね。」

「いゝ加減にしろよ。何だつてそんな事をする前に女房の手を捩ぢ上げないんだい。」

「それが駄目なんだよ。奴の方が強いんだからね。」

そこで、私は彼の女房に向つて言つた。

「奥さん。あんまり弱い者いぢめを爲ちやいけませんぜ。」

すると、女房は錆びた出刄を持つて來て、「口惜しい、死ぬ！」と叫び出した。

馬場は慌てゝ女房に飛びついて、その出刄を拐ぎ取らうとして、組み打ちを初めた。可哀想に肺のもう大分悪くなつた馬場は、息を切らして、女房の手にしがみついて、「止めてくれ、止めてくれ！謝る、謝る。」と頼むのだつた。

私は、見てゐれなくなつたので、女房の手から出刄を取り上げて、それを庭先に投げ出して云つた。

「駄目だ！　奥さん。こんな錆びたのぢやあ迚も、死ねません。私がよく切れるのを借りて來て上げませう。」

そう云つて私が隣の家からピカ〳〵光る出刄を借りて來て、女房の前に行つて、無理矢理に彼女の手に握らせると、

「私が悪う御座いました。」

と云つて彼女は泣きじやくり初めた。

馬場夫妻の夫婦喧嘩は、私が仲に入らない限り、必ず女房の勝利であり、且つ喧嘩の連續であつた。

馬場寛は若くて、動脈瘤のためと、貧乏のために悲慘な死を遂げたが、無比に善良な此の友のために、家庭は最後まで、餘り住み心地が良かつたとは云へなかつた。

然し、この頃は、その女房の度を外れたヒステリーがあるにはあつたが、彼の一生涯の中では、最も幸福な時代であつた。

尤も、こんな狀態にある一時期を、友の「最も幸福な時代」と云はねばならぬ事は、私にとつては苦しみである。云ひかへるならば、多くの貧しい人たちが、馬場寛と同じやうに、又はもつと甚しく押しひしがれながら何等の幸福をも味ふ事なく、活きて行く時代なのであつた。

その家々――長屋――は元の沼地の上に立つてゐた。沼地は、先づ第一に塵埃で埋められ、次に、製材工場の鋸屑で埋められた。その上に、阿部川餅もどきに土が蔽せられたのであつた。

この長屋では、どんなに飛んだり跳ねたりしても、頭に響くことは無かつた。これが長所の唯一であつた。尤も此長所も、夜になると一躍缺點に變つて、うつかり便所に立つても、嘉坊の目を覺まさす程の震動を與へるのだつた。

蚤や蚊の多さと來ては、まるでその飼育場のやうだつた。

一晩の中に、母ちやんが、「嘉坊の布團の周りから、百七十四の蚤をとつたら雞が鳴いた」と、父は未決から出るが早いか聞かされたな程であつた。

蚤と蚊は、私が監房で惱まされたと同じく、或はもつともつとひどく可愛い〻嘉坊を困らしたが、それにしても、善かつた！　家があつたのだから。

たとへ、どんな家であらうと、家があると云ふことはい〻事であつた。何故かつて、家が無い、と云ふ事實も私の身近かにあり得るのだつたから。

それに何と云つても、前の二階よりは良かつた。第一、嘉坊が二階から落ちる、事が無かつたからだ。

私は嘉坊の健康を、私自身の健康を害する程にも心配したが、然し、短い間に隨分發育したと思はれた。

たゞ、一度留守中に痙攣を起したさうであつた。この事は後になつて、嘉坊を直接醫療して呉れた加藤醫師から聞いた。

「こうちの嘉坊がヒキつけたんだ！　すぐ來てくれ！」つて、誰か呶鳴つてるんで、玄關に出て見る

と、谷口の鑛ちやんが、怒髪天を衝くつてな勢で立つてゐて、いきなり僕の手を引つ攫んでグング
ン歩き出すんだ。「おい藥を持つてかなきや駄目ぢやないか」つてえと、「オイ藥だ！　藥だ！」つて、
まるで自分が主人でもあるやうに看護婦に呟咒けてるんだ。それから慌てゝ二人で驅けつけたんだ
が、何に大したことは無い二三日でケロッとしちやつたですよ。」
加藤醫師は名古屋で運動してゐる者の、殆んど總ての者の健康に無料で貢獻して吳れてゐた。それ
處か往々にして米代までも出して吳れた。謂はゞ東京の馬鳥ドクトルと云ふ立場の人であつた。

（四）

その冬はひどく寒い冬であつた。
あれ程一家中が喜んだ、新聞記者の口も勿論爭議と一緒に棒に振つたのだつた。
私は新聞記者の職を失つたことについて、嘉坊に對して丈けは悔を感じた。だが、私は資本主義の
時代では、どんな生活でも、眞實に忠實であるものは、屹度飯の種を食ひ上げるものだ、と云ふ事實
を覺つた。
私は職を失つた。だが、それは私が「惡かつた」からであらうか。私は成る程「惡かつた」のだ。
資本主義社會の約束に對しては。然し、自分と自分の屬する階級に關しては、些も「惡くはない」
のだつた。
こゝでも、私は眞理は「二つの行列の中のどちらにもあつて、それはお互に反し合つてるものだ。
そのどちらにも共通の眞理なんて無いのだ」と云ふ事が解つた。
で、私は、私の屬する階級の眞理のために、どこまでも鬪はう、と決心した。
私は古本の夜店を始めた。
古い荷車を一臺買ひ込んだ。本を並べる板を蝶番ひで打ちつけて、荷車の心棒よりも先きへ張り出
せるやうにした。でないと心棒の油で客の着物を汚すのであつた。
書物はいくらも無い自分の藏書と、同志たちのものを寄附して貰つた。その外、運動に關するパン
フレットや、單行本、雜誌などを委托販賣の形式で、東京から送つて貰つた。
屋號を「プロレタリ屋」とつけて、それを書いた提灯を注文した。「プロレタリ屋」の屋號の上に二
行に、「勞働書店」と書いた。
書物と云ふものは重いものだ、と云ふ事が分つた。夕方から空ばかり仰いで、立てかけてある車に

…さうしないと長屋の露地を人の出入りが出來なくなつてしまふ…車輪を嵌めたり、油を差したり、それを仆して、本の詰つた石油箱を積み込んだりした。

夜店と云ふものは苦しいものだ。

愈〻、廣小路通りに出るまでは、私の頭の中に「賣れるだらうか？」と云ふ疑問が一度も浮ばなかつた。それは今まで自分の勞働力丈け賣りつけて來て、商品を賣つた事が無かつたせいもあるだらう。だが、それにしても、失業は絶えず今までの自分に、氣味の悪い瘤見たいな格好でくつつき廻つてゐたのに、夜店にはそれに相當するものがあらうとは思ひつかなかつた。

新聞社に居る時分には、毎晩嘉坊を抱いて、家中で夜店を素見しては享樂してゐたのだが、手前が夜店を出して買手を待つと云ふことは、全く辛い事だつた。

それは私の始めたのは古本屋であつた。その本も、當時些も流行らない…今では見榮に持つて歩く連中があるのに…勞働運動か社會主義に關する本許りであつた。これ丈けでも賣れなさ加減は分る筈なのに、木枯の風に吹き落されでもした落葉のやうに、凩と共に街頭に舞ひ落ちたのだつた。

俄か商人の私は全く弱つた。

夕方の五時から、夜の十一時半までも、捲き上る木枯しと、吹きつける砂つ埃とから、いぢめられ通した場句、賣り上げ總額が二十三錢なんて晩が多かつた。

そんな晩にはつく〴〵世の中が厭になつた。そんな苦しい目をしても、猶生活が出來ない！　となると、一體全體、此世の中つてものは何だ！　これでは監獄に居る方が遙にましだ。と思はないでは居られなかつた。

そんな晩本を片附けて、荷車を引つ張り出す時は、私の體の中にも、頭の中にも何一つ臓物が入つてゐない、ガラン堂の自分見たいな氣がした。私と云ふものは、私の體の外へすつかり拔け出して、そして、重さうに荷車を引つ張つて歩く、別な私を冷たい眼で見てゐた。

そして、その別な私は、だらしなく車を引つ張つて歩く私に嘲笑を浴せかけた。

「何とかならんもんかい。智惠の無え奴だなあ。お前は。」

「俺が悪い譯ぢや無えんだ。」と私は、だるくて、打つ倒れさうな空き腹を抱へて答へる。

「ぢやあ、誰が悪いんだい？　悪い奴が見えるかい。」

「そいつがハッキリ分らねえんだ。」

「ぢや、手前が悪いんぢやねえか」

「いや、悪い奴は俺ぢや無い。悪い奴はさう苦勞なんかしやしない。」

「そいぢや、手前もくたばらうし、女房子供も饑え死なうつてのがいゝのかい。」

「馬鹿、そいつがいけねえんだ。」

「ぢやあ悪い奴を見付け出す事さ。それからそいつを氣持ちよくはり飛ばすんだ！」

私は、そんな風な限りの無い問答を續けながら、鼻水を垂らし、足や手を無感覺にし、骨の隨まで冷え切つて、車輪のポカ〳〵撲ねかへる、泥地の家へ歸つて來るのだつた。

嘉和はその時は、深い眠りの中に居た。

お前の母は、父の歸る車の音を聞くと戸を開けて、本の箱を車から下したり、車輪を外したりするのを手傳つた。

車や荷の片附けが濟むと、喜和子は丁度大豆位な圓さと太さとの火種を、火鉢の灰の底深くから、眞珠でも探るやうにして取り出した。その上へ消し炭を載せ、吹き熾すのであつた。それから私と妻との夕食が始まるのであつた。

その頃は、嘉和の弟の民雄が腹に居るので、妻の腹は大きかつた。

ロシアの飢餓が此時、日本の無産階級によつても、救援される運動が起つた。

私も妻も、「飢ゑたるロシアの子供を救へ！」のスローガンには泣かされた。現に自分たちの子供も天災によるそれでは無く、人間によつて作られた飢餓の狀態にあつたのだから。

それは距離に數千哩を離れてはゐたが、私たちの五十間長屋の背中合せにある大家の鬼權とよりは近かつた。

私が、ロシアの飢えたる子供たちを救ふために、パンフレット賣りや、演說會に出かけると、妻は自分たちの子を救ひに、嘉坊を背んぶして大きい腹を抱へて、夜店の番に立つた。

ロシアの大きな河の兩岸には、揃つて飢ゑた多くの子供たちがあつた。日本の都市や村落では、滿腹の子供たちが飢ゑた子とゴッチャになつてゐた。

私は、私自身について言へば、大して生きて居たくは無かつた。これ程骨を折つて、これ程ひどい目に會うと云ふ事は「生命の歡び」所の騷ぎでは無かつた。又、それから先き蒼空から籃が下つて來て、私たち一家を夢のやうな天國に連れて行つて呉れるだらう、などとも考へなかつた。

一口に言へば「生きやうにも死なうにも、どうにも足掻きがつかない」のだつた。

親子心中と云ふ哀れな事件が、新聞に澤山報道されたが、子供を道伴れにするなどと云ふ事は、考へて見た丈けでも心臟の鼓動が速くなる程だつた。

私は、「子供たちが一人前になる頃には、今の親たちのやうな事は無い」と信じ込んでゐた。その信

念に動搖が來ると、私はいろんな事柄を思ひ浮べたり創造したりして、その動搖を取り靜めた。いつもの口癖を私は獨語つた。「親たちは櫟の切株だ。若芽たちの土臺なのだ」

だが、切り株が若芽たちの土臺になり得ないとしたらどうであらう。私はその土臺になれさうも無い。

さう云ふ場合、私は眩しい日向から急に暗闇に飛び込みでもしたやうに、一切が見えなくなつて終つた。そして眼の前に幻の薄茶色の火の玉が、私を小馬鹿にしてクル〳〵跳ね廻つてるやうに感じた。私の耳には外の物音は總て姿を絶つて、嘉坊の片語の歌が響くのであつた。

――ポッポッポ
豆ホチーヨー
マメホチーヨー。――

嘉坊がその唄を歌ふ時の口の形が、火の玉の代りに私の眼の前に現れた。二つの紅色をした蕈茸見たいな唇が、頰の邊から膨らんでもり上る。ホチーヨーが圓く滑かに、尾を曳いて轉がり出るのであつた。

そして何もかも忘れて一瞬間、子供可愛さに夢中になつた。その次の瞬間は又、目の前の火の玉であつた。

「俺は子供が可愛がりたいんだ！　俺に子供を愛してはならないつて法があるか。俺に俺の子供を腹一杯可愛がらせてくれ！　育てさせてくれ！」

と、私は聲限り叫んで走り出したくなつたことが幾度となくあつた。私は苦しい。

私がある日、朝から市中のいろ〳〵な場所で、スパイたちから追つ拂はれながら、ロシアの飢ゑた子供たちの基金を集めて、一度家へ歸つて夕飯を食ふための歸途であつた。

大家の「鬼權」の前を通ると、その家の番犬がいきなり私に吠えついた。

「此野郎？　叩つ殺すぞ」

と、私は犬に叫鳴つた。

犬は大して大きくは無かつたが、憎々し氣に私を睨んで吠え續けた。

私は疲れてゐたし、家に待つてゐる妻子の事で心を暗くしながら歸る途だつたので、すつかり腹を立てゝしまつた。殊にその犬が大家の、有名なケチンボーの貪慾漢の犬であつたので、私は夢中になつた。

私は道つ端の石塊を拾つて、唸る程打つつけた。石は犬の背中で、コツンと大きな音を立てた。

犬は飛び上つた。門内へ駆け込んだ。だが今度は「此門だけはどうしても通さないぞ」とでも云ふやうに、門口の處で前よりもひどく吠え立てた。

「どいつだ！　この犬の飼主は、出て來い！」

と私は、力一杯に喚いた。そして門口に吠え立てゝゐる犬の口に向つて、第二の石を打つつけた。石は犬の背中を飛び拔けて、門内の敷砂利の上を滴でも撥ね飛ばすやうな音を立てゝ、玄關先まで轉げて行つた。

私が續け様に打つ衝ける石を拾ふために、蹣み込んでゐると、犬の後ろから、その犬と親子ででもあるやうに似た、然し犬ではない人間が出て來た。

「何だつて犬に石を打つつけるんだ。」

と、そいつが呶鳴つた。

「何だつて犬に交通妨害をさすんだ。」

と、私が呶鳴りつけた。

「交通妨害？　それぢや此處を通らなけれやいゝぢやないか。此處は俺んとこの地所だからな。」

「手前んとこの地所だつて？　此道路がか？」

「さうだとも！　俺んとこの借家人が通るために、家賃も取れない土地を道にしてあるんだ。犬に吠えられるのがいやだつたら、俺んとこの地所を歩かなけやいゝだらう。」

「馬鹿野郎！　氣をつけろ！　人間が道を歩きながら、曲り角を廻るたんびに、「此の通りは誰それの地面だ」なんて事に氣が配つてられるかい。何だつて犬を縛いておかないんだ。」

「手前見たいな迂散な奴が通るから、犬を飼つてあるんだ！」

その言葉は、ダイナマイトの中で雷管が破裂したのと同じであつた。

私は犬よりも敏捷に、そいつの頭に飛びついた。そいつの頭は禿げてゐた。私の手には石を握つてゐた。

氣がついて見ると私の手の甲が痛かつた。私の手の甲は、握つてゐる石と、その男の頭や顔などの間に挾まつて、兩方からひどい打撃を受けてゐたからだつた。

道路まで張番を出して、私を迂散臭いと云つた男は、急に首から上に澤山の凹凸を拵らへて、何だかひどく汚れて、砂利の上へ轉がつてゐた。

「今日は忙しいんだ！　氣をつけやがれ。」

さう言つて、私は、いつの間にか私を取り巻いてゐる見物人に、極り悪く思ひながら、背中合せに

なつてゐる私の長屋へ歩き出した。

その路次を通りながら、私は再び腹が立つた。

――これがあいつの地所で、そして道だ。

何と云ふ地所だ！　沼では無いか。ボコ〳〵のドロ〳〵ではないか。

何と云ふ道だ！　肩幅の廣い勞働者は斜にならねば通れない。その上、便所が道を向いてゐる。あまりに、その狹い道に、共同井戸が二つも堀つてある。

そしてあいつの家か！　ええ、この慾張りのくたばり損ひ奴！　欲しけれや、何でもかつこみやがれ。

此の住み心地のよくねえ地球ごと持つて失せやがれ。地上を吹き出ものだらけにする、この大盜棒奴！――

昂奮し、激動した後の、充血した私の頰に、冬の冷たい風は心地良かつた。

私は家へ歸ると、いきなり嘉坊にめちやめちやにキスした。

そして留守居をしてゐた嘉和子に、大家を毆つた事を話した。

「そんな事して大丈夫？　又やられやしないこと。」

で私は答へた。

「そこまで考へてゐられなかつたんだが、そうだなあ、やられないとは限らないね。だが災難だ。どうにも外に仕樣が無いぢやないか。」

「さうね。それもさうだけど。」

妻も、頗るのんきな文句を言つた。

私は急いで夕飯を掻つ込んで、その夜開かれる同じ目的の基金募集演說會へ出かけた。

仲間たちはもう、その夕方の出來事を知つてゐた。スパイから聞いたのだつた。

スパイは私に訊いた。

「君がほんとにやつたのか。」

「オント。」

私は、嘉坊が覺えた許りの口調を眞似て言つた。

「告訴狀が出てる。頭中繃帶してゐたよ。診斷書は全治三週間、又お灸だぜ。」

「仕方はないさ。俺が何かやるとお灸。だが、誰が俺に何をやらうと御勝手さ。さうぢやないか。弱い者は助からねえよ。」

「君がかい。その團體の君が弱い者つてのかい。たつた今、他をたんこぶだらけにして來た君が「弱い者」かい？　へえ。」

「さうさ。今ぢやね。俺は逃げも隱れもしねえよ。」

「うん、連れて來いとは云つてなかつた。だが、まあ明日さね。」

このエピソードの結末はもつと後の事であるが、話を混亂させないために序に云つて了はう。

私は檢事局に引つ張り出された。その結果分つた事は、私は勿論出獄した許りであるが、相手の「鬼權」てのが、狂人であると云ふ事實が分つた。原告の身元を調べると、その店子が家賃を三ケ月滯らせたと云ふ理由から、その店子を日本刀で斬つて、三ケ月の重傷を負はせたことがあつた。それで裁判になつた結果、狂人であることが分つて、その後三年位は精神病院にゐた。で、

檢事は私に言つた。

「原告も狂的であるし、被告も半狂見たいなものだ。だからこれは、今度だけは示談にした方がよからう。」

そこで、眼つきのお互に嫌ひな、原被兩告が檢事の前に揃つた。

「今後、双方共、餘りお互の狂人染みた顏を合はせないやうにした方が良からう。」

それでお終ひであつた。

私の思ふのに、あの若かつた檢事も、鬼權の借家に居たのではあるまいか。

こんな風な出來事を起しながらも、生活は益々ひどくなつて行つた。

喜和子が嘉坊を負んぶして、ひどく寒い晩、店番をやつたので、母子が一度に風邪を引いてしまつた。

喜和子のは二三日で、癒つたとまでは行かなかつたが起きられるやうになつた。が、嘉坊のは仲々癒らなかつた。

加藤醫師に見て貰ふと、

「遂々、肺炎にして終ひましたね。注意しないといけませんよ。」

と言はれた。

嘉和と喜和子とが風邪を引いたのでは、私は病人丈けを打つ捨らかして、夜店に出かける譯には行かなかつた。

私は家に居て、嘉和のおしめを洗つたり、飯を炊いたり、三分間置きに嘉坊の額に手をやつて見た

り、無暗に沈み込んだりしてゐたが、加藤醫師のその話を聞くと同時に、全てその言葉が針で、風船玉でもつゝついたやうに、私を刺した。私は體中の生活力が一度に足の裏から拔け出てしまつたやうに感じた。

「なるたけ動かさないやうに、そうつとしといて下さい。心臟が弱つてゐますから。」

加藤醫師は言つた。

歸りには、綿の粗末な毛布だつたが、嘉坊をその中にくるんで、全で、盜棒が足音を盜むやうに、そうつと、そうつと、歩いたのだつた。

木枯らしは砂塵を無理矢理に、嘉坊の鼻や口に吹き込んだ。電車や自動車や、電線などは人の氣も知らないで、無暗に我鳴り立てた。

何物にも換え難い嘉坊が、肺炎でぐつたりしてゐるのを「見てゐる」のは、全く私たち夫妻にとつてやり切れなかつた。

酸素吸入もさせたかつた。炭酸ガスの發生しないやうな暖房裝置も欲しかつた。その他、此地上にありとあらゆる、看病の手段が取り度かつた。だが、その欲望の代りに、それは全つ切り反對の事しか、私たちには成し得なかつた。

七輪に炭を熾して室に入れた。障子のたてつけは、田舍芝居の道具立て見たいだつた。吹き込んで來た雪の片は、腐つた疊の上で、人を愚弄するやうに暫く、灰色のまゝ留つて、それからノロノロと消えるのだつた。

嘉坊を內部から暖める燃料——營養分も充分に欲しかつた。いや、欲しい！位ならばいゝのだが、それを切らすと云ふ事は嘉坊の生命を切らすことを意味してゐた。

だが、それ等のもの一切は「金」で買はねばならなかつた。

私は氣が狂ひさうであつた。狂つた方がいゝと思つた。

嘉坊の力なく眠つた、瘠せた、急に大人びた顏を見て、私は思つた。

——若し、神や佛なんてものがあるんだつたら、神や佛自身が罰を蒙るべきだ。若しそれが無いんだつたら、俺たちから子供を奪はうとしてゐる肺炎が呪はれてあれ！　肺炎が癒るんだつたら、その手當の方法を奪つた奴こそ俺の敵だ。俺は仇を打たねば死にはしないぞ！——

だが、坊やはいゝ子だつた。だんだん、手當てが良くないにも關らず、病氣に勝つて呉れた。

食べるものも多くなり、又、その註文が難かしくなつて來た。

私は全で金の奴隷になつた。知つてる人間には、片つ端から金を借りて歩いた。五十錢持つてる人

間からは十錢。一圓持つてる者からは七十錢と云つた風に、それでどうにか急場の凌ぎが、不充分ながらも出來た。

その時の苦しみ。

嘉坊の快方に向ふ樣子、最初の笑ひの出た刹那の歡び。

私は夢中で、その嵐の中を驅け拔けたやうなものであつた。

嘉坊が一人で、元々通りに歩けるやうに、なるかならないかの或日、私の故郷から電報が來た。

「チチヤマヒ一ド　カヘレ」と。

嘉坊を私が愛するのと同じ程、私を愛する私の父が、死の前に一度私に會ひ度いのであつた。

嘉坊の祖父はもう八十七になつてゐた。そしてたつた一人で暮してゐた。

私は父に叛いた。父は過去に生きて來た。だから社會に對する私の尺度を許すことが出來なかつた。だが、その父も、父の時代では、舊時代に對する叛逆の志士であつた。私の子供、嘉和はどうであらう。だが最近父は私に折れてゐた。私が若し老いて子供の一本立ちを見る時には、父が私にしたと同じ道を、私は歩くであらう。

私は直ぐに故郷へ電報を打つた。

「チ、キトクカヘンコド　モツレカヘル」

若し祖父が危篤であるならば、私は急いで、病後の嘉坊を殘して獨りで立たなければならなかつた。

「マゴ　ツレテカヘレ」と返電が來た。

そこで旅費が必要になつて來た。

故郷は遠い南の端であつた。そこは私を撥き出した處であつた。だが今の處は、これも私たちを撥き出すのに手を代へ品を代へて、厭味ばかりを爲た。

故郷には無論止まれないが、然し、此町には再び來ない、さう決心した。

夜店の道具、古本、一切合財を二束三文に賣り拂つた。使ひ殘りの薪炭、米味噌などは隣りの人に貰つて貰つた。

すつかり出發の準備を終へた家の中は、「よくもまあ、こんなうちに人間が住めたものだ」と思はないではゐられない、穴の明いた笊見たいだつた。

仲間たちは私を送らう、と言つて吳れたが私は斷はつた。

汽車は朝の四時に發つのだつた。そんな時間に電車は無いので、三時から家を出る事にして、私は

嘉坊の寢顔を妻と、出發まで見守つてゐる事にした。

その夜は全でお通夜のような感じだつた。それも、こつそり死骸を空家に持ち込んでやつてゐる、秘密を持つた者のそれに似てゐた。

もう最後なので、燃して終ふ積りの木炭は新聞紙の上に積んであつた。飯櫃の上には茶碗と漬物が裸で乘つかつてゐた。二つの茶色になつたバスケットは喜坊の枕下に、型ばかりの風除けにしてあつた。

それ丈けであつた。それ丈けの荷物と一緒に、嘉坊たちの親子三人は、一晝夜半の長い汽車旅行をしなければならなかつた。だが、それは同時に、嘉坊にとつては乏しい荷物によつて、より長い生活を死の方まで歩いて行くことを意味してゐた。

冬の夜は更けるに從つて、死人が段々冷たくなるのと同じに冷えた。朝、三時までの間、その空氣の冷たさに凍らされでもしたやうに、私の考は冷たかつた。

その寒さの中で私たちが生きてゐるのは、心臓があるからであつた。嘉坊は私たちの生活の心臓であつた。

搾られ、虐げられてゐる私達の仲間は、その反抗の運動は？　それは勿論とことんまでやり拔かねばならぬものであつたが、私の時代に、私は望を持たなかつた。

私は運動の尖端に立つてゐる友も持つてはゐた。と同時に、階級の最後列に殘つてゐる、暴風に吹き上げられた風塵のやうな、多くの「仲間」たちをも知つてゐた。

そして、私は、私のいためつけられ續けた生活から、「簡單に喜ぶ」ことを、極端に避ける習慣を持つてゐた。現に、私自身は、どんなに、「世の中が甘く無いかしを、霖雨のやうに頭から結び續けてゐた。

今までの放浪の生活で、あらゆる土地を去る時に、あらゆる職業を追はれる時に、私は憎々しい表情で、復讐を堅く心に誓ひながら、必ずその土地へ唾を吐いた。そして力一杯に踏んづけた。

「今に見てろ！」

私は最初の足を踏み出すと同時に、その町に言つて聞かせるのだつた。

「手前の土地から一人の同志も出さないやうに、氣をつけろ！　いつか又俺は種を植ゑ付けに來る。待つてろ！」

外は耳鳴りのやうな音がして、凍てゝゐた。嘉坊に、體の丁度倍位の厚着をさせ、その上に喜和子

がありつ丈け着込んで、ボロのねんねこで負んぶした。

眞夜中の三時に私たちは家を出た。

家の中で私の頭を占めてゐたものは、復雜な考の累なりであつた。「晝でも夜でも牢屋は暗い」と「未來は民衆のものである」とが雜居してゐたりした。

が、二つのバスケットを提げて、ヒリつく戸外へ立つと、一度に外の闇が、寒さと一緒に心臟へ入り込みでもしたやうに、私の考は暗い一點に凍結してしまつた。

いつもの習慣に從つて惡態をつくことも忘れた。力一杯土地を踏んづければ、破れた靴底を通して凍てた泥濘が足を嚙むだらう。寒さに後頭部を毆られでもするやうに、私は頭を垂れて、喉佛に白い息を吹きつけながら急いだ。

街は、風が吹き拔けるために作られた、とでも云ふやうに、霜に鏤められて續いてゐた。

私は、私を追ひ出すのに、こんな慘酷な時間を選んだ町を憎んだ。通りは、貧乏人の家と金持の家とでは、後のの方が寒かつた。そこでは鋭い、光つた、幅の廣い刄が吹きつけるのだつた。

時々、私は頭を擡げて、嘉坊の顏を覗き込んだ。嘉坊の軟かい、しなやかな、未だよく固まらない魂が、その寒さの中で凍りつきはしないだらうかと、その通りの文句で感じたのだ。

「おい、あんよはあつたかいかい。」

と、私は言つた。「ねんねこの下から握つて御覽。」

「えゝ、とてもあつたかいわ。私、おかげでちつとも寒く無いんですもの。」

私はその返辭で安心して、又顎を胸に押し込んだ。

普通列車に、私たちは乘り込んだ。スパイに見送られて。

汽車は空いてゐた。そして春の央頃程も暖かゝつた。

一つのバスケットは網棚へ、一つは腰かけの上に置いた。それには嘉坊用のマント、毛のセーター、小兒藥、おしめ、塵紙、などと一緒に、パン、ウェーファー、ジャム、バナ、などの食料が入つてゐた。それは、何時汽車が停つても、いつ嘉坊が腹を減らしても、大丈夫な爲めの準備だつた。

その列車は糸崎止まりであつた。そこには餘り夜晩く着き過ぎるし、嘉坊が辛抱し切れなくなつた。どちらにしても乘り繼がねばならないので、乘り込んでから十六時間目に岡山驛へ下りた。

岡山については何も知らなかつたが、Y氏の生地だと云ふので、そこへ泊る事にした。驛前の宿屋では、二階と云ふものを珍らしがつた嘉坊は、廊下をあちこちと驅けて歩くので、親たちは草疲れた

上へ草疲れた。

その夜は、親子三人の上に珍らしい暖かい休息が與へられた。

「何と云つても宿屋丈けの事はある。」

朝起きて、喜和子に私は云つた。

食事が濟んでも、汽車の時間には大分間があつた。

「それでは折角ですから、後樂園を見ないと云ふ法はありませんよ。」

と番頭が云つた。

「いや、私はY氏の生地だと云ふので、此處を選んだ丈けですから。」

と、私が斷ると、

「それなら私は、あの方をよく存知て居りますから、幸、御案内傍々、あの方のお話しも致しますよ」

そう云ふ譯で到頭引つ張り出された。

松があつて、鶴がゐて、茶室の中央を水が流れてゐて、全つ切り面白くもおかしくも無い風景であつた。

「私たちは、こんなものを面白がつて見るやうな餘裕が無いんですよ」

「御尤もで……」

と云つて、番頭さんは景色や、その由來の話からY氏の話しに戻るのだつた。だが、「よく存じて」も居ないやうだつた。

だが、Y氏の話をしてゐる事は、私の魂の昂奮劑であつた。

私たちは驛で、妙な、頗る有り得ないやうな目に會つた。

時間が未だあるので、嘉坊にカステラを食べさすために、構内の喫茶店に入つた。いろいろ手のかかる食べ方をするので、時間がかゝつて、發車時間の間際に待合室へ歸つた。

ところが、そこに二つ並べて置いた古いバスケットの一つ、嘉坊專用の方が無い。

だが、ベルはうるさく鳴り響いてゐる。

寒いのに、私は額から汗を出して乘り込んだ。

「畜生奴！　俺たちから「もの」を盗むつて法があるか！　こつちが泥棒してえ位だ。泥棒奴。だが愕きやがるぜ。泥的奴、あのバスケットを大切にどつか遠方まで持つて行くに違ひないぜ。「フン、重かないが大して輕いこともない」なんて考へながらね。そして原つ場か空家へ入つて、さうつと空け

るさ。「ホホウ、パンがあるぞ」つてな事で、パンにジャムをつけて食つて、すつかり平らげた處でバナナを食ふか。それからジアスターゼとビオフェルミンをのんで、畜生！　ざまあ見やがれ。金目なものが欲しかつたんだらう。だが、兎に角く腹丈けはクチくしやがつたぜ。」

私は、さう云つて喜和子に笑つた。

「だつて坊やは困つちやうわね。折角母ちやんが拵へたマントを、未だ一度も着ないうちに盗まれてしまふなんて、ずいぶん惡い泥ちやんね。」

と云つて笑つた。

嘉坊は、自分が被害者だと云ふ事は些も氣にかけないで、平氣な顏をしながら、停車場に着くたんびに、

「おべんと、かつて、ちようだいね。」

と片言を言ひ續けた。

「おべんとかはうね。坊やのおべんとはどろちやんが持つてつちまつたからね。だからこんどは、買つて食べるんだね。ぢやあ牛乳を買はうね。」

坊やを全一日、汽車に倦きさせないためには、牛乳や果物などを餘分に買ひ込まねばならなかつた。それは私たちの豫算の上に大きな穴を明けさせた。

關門海峽を渡ると私の故郷は汽車で三時間の村にあつた。

そこで私は産れ、生長した。

山も、川も、森も、藪も、家々も、みな私は知つてゐた。變るものはたゞ、年を老る人間丈けのやうに見えた。

故郷の山河、故郷の生活。それをよく人は懷しいものに唄ふ。

だが、私には故郷は憎々しい丈けである。そこの山々は、火傷でもしたやうに赤く禿げ上つてゐる。樹々は變化が無くて、日本中鼻につき過ぎる上に、尖つた陰險な葉を持つてゐる松ばかりである。

人間は、格式と云ふ屁にもならないものを重んじて、手前の頭の空つぽさを問題にしない、干鱈のやうな士族の、使ひ道の無い道具の置場所見たいである。

そこの年老いたる干鱈共は、陸軍の軍人を最も尊敬すべきものだと思ひ込んでゐる。そしてその筈である。彼自身が、そこで使ひ古るされたチビ箒なのだ。

彼等は碁ばかり打つて日を送つてゐる。そして「商人共の性根惡さ」を說いてゐる。彼等は一人の

例外も無く不偶の坊である。彼等はどうすれば、明治維新以前の生活に立ち歸り得るか、それを探してゐる。若し誰かゞ、「此挺で動かせば歸る」とでも云はうものなら、先を競つてその挺にしがみつく連中である。

そこの老人たちは、自分が一番馬鹿で、その上不正直者なのに、馬鹿で不正直なのは百姓と町人だと思ひ込んでゐる。

彼等の生活の小じんまりしてる事は、想像も及ばない程である。それは蛸と同じである。自分の手足の指を嚙み千切るやうな生活である。

岩田、龜井と云ふ二人の人間の如きは、馬鹿で止まらなかつた。彼等はコレラのバイ菌のやうに、誰の懷中にでも忍び込んだ。多くの農民は彼等の吸血のために、すつかりオヂャンになつてしまつた。

彼等の家は、正月になると火事でも無いのに、消防出初式のホースの的になつた。そのため一年中火事にならないで濟む程であつた。彼等は感情を持つてゐなかつた。蛭の吸盤に似た口を持つてゐて、誰にでも吸ひついた。そして蛭より惡い事には、腹が一杯になると、そいつを倉庫に蓄め込み、銀行に預け入れた。

その二人の蛭共にとつては痛快な、だがその子供にとつては可哀想なのは、岩田の方は子供たちは鹽をかけた蛞蝓見たいに、溶けて了ふ業病を背負つて生れた。龜井の方は白痴と狂人以外の子は生れなかつた。

村の人は、「バチだ」と云つてゐた。

然し、私はバチならば彼等が食はなければならぬと思ふ。だが奴等にはバチが當らなかつた。益々奴等は吸ひふくれた。バチを當てるのは人間以外のものでは無くて、彼等に吸はれた人間の「階級」でなければならないのであつた。

一方ではこんな蛭たちが、生臭い毒氣を吐き散らし、一方では小市民や農民たちが、最後の呼吸に喘いでゐる。その小さな村は私に呼吸困難を起させるのだつた。

これは私の故郷の事のみであらうか。どんなに多くの蛭たちが、都市や農村で貧しいものを吸ひ盡しながら、血の色と臭ひと、ぬる〳〵さをした毒氣を吐いてゐる事だらう。

私たちの階級は息苦しいのだ。それは生き苦しいのと同じだつた。

祖父は借家住ひをしてゐた。

病氣は喘息であつたが、もう殆んど癒つてゐた。

三人の旅人が着いた時、祖父は一人で茶を飲んでゐた。火鉢が祖父の前で鐵瓶をチン〳〵鳴らしてゐた。

これは私の幼少の時と同じであつた。

祖父の顎から胸へかけて、簑のやうに大きくて長い、そして眞つ白く晒したやうな髯が、ブラ下つてゐた。

「嘉和、來たか。」

と祖父は云つた。

「ぢいさんに抱かれて見い。」

と云つて手を出した。それは「孫の手」と云ふ、背中を掻くために竹で出來てゐるのと、そつくり同じに痛せてゐた。

嘉坊は直ぐに、ヨチ〳〵歩いて祖父の膝に上つた。血が流れてゐたのだ。で無けれは、生れて初めて見る、山羊見たいな動物に抱かれに行く譯が無かつた。

祖父と私と嘉坊。これは直系であつた。

その間に半分づゝは別な血が流れてゐた。そして、その産れた時代の習慣が違つてゐた。それは次のやうな形で表はれた。

私は大聲で笑ひ、喚き、走り、立ち上り、坊やを手玉にしたりして、遊ばせてもやり、又私自身も享樂し、祖父をも慰さめやうとした。が、祖父は云つた。

「騒々しい。そんな風にして子供を育てるものではない。」

「ぢやあどうするんです。」

「默つて見てゐるものぢや。親で子供の可愛くないものはない。だが、可愛いゝと云ふ事を云つたりして見せてはいかん。」

「どうしてです。」

「どうしてもそうせにやいかん。」

祖父は、全くその言ふ通りに私を育てた。私は一度も父から可愛いゝと云はれなかつた。そして記憶する限りでは、愛撫された事も無かつた。叱られた事丈けであつた。が、事實は私を非常に愛してゐた。それはいつも、父以外の他人の口から私に傳へられた。

私はその都度思ふのであつた。

「何だつて父は、俺が可愛いゝつてことを祕密にして置かねばならないんだらう。」

それは、私にとつて不思議でもあり、不滿でもあつた。で、私は子供を愛撫する事を祕密にしないで、かつきり丁度に表現しやうとしたのであつた。それに對して父は今でも「どうしてゞも、そうせにやいかん」と云つた。

私は父から說明を聞いた事が無かつた。私は早熟で、おまけに性的に實にダラシが無かつた。それを知つた父がある時、未だ私が十七八の時であつた、私に言つた。

「人の妻とは關り合つてはいけない。」

「どうしてゞす。」

「どうしてゞも、いけん。」

それつ切りであつた。

父は私のために全くひどい目に會つた。今でも思ふ事であるが、私見たいな奴に私の坊やがなつたとしたら、私の心配はどうであらう。そいつを私は私の父にフンダンに嘗めさせたのだつた。

私が中學の三年の時であつた。修學旅行のある一夜、遊廓に上つたのをその翌日、右手の無い國文教師に知られた。歸校してから謹慎を食つた。その教師も村の後家さんと密通いてゐた。校長室に呼ばれた私に校長が言つた。

「お前は旅行中中學生の分際で、不行跡があつたから謹慎一週間にする。毎日放課後、校長室で一時間づゝ殘つて、キンシンしなさい。」

「ハイ、どう云ふ風に謹慎しますか。」

「教科書は讀んでもいゝ。讀みたくなければジッと座つてゐなさい」

私はその日は仕方がなく、教科書を讀んでゐたが、翌日は家を出る時、謹慎用の讀み物「文藝倶樂部」を持つて行つた。それは普通の時でも讀んだ事が分つたゞけで、謹慎を食ふねうちのある雜誌だつた。

私は學校が嫌ひであつた。

そこでは私の嫌ひな事許り敎へた。私の好きなのは小說だつたが、そんなものは禁じてばかりゐた。

その上敎師と云ふのは揃つて、嘘ばかりついてゐた。

「ライスカレー」と云ふ仇名のついた、色の眞つ黑い體操の先生がゐた。

この先生は鹽鮭と同じて、金棒にブラ下る許りで、尻上りも出來なかつた。その代り金鵄勳章を持

つてゐた。

「只今、模範を示す。尻上りの要領。一、金持に飛びつく。二、手を引き上げる。三、おい尻を押せ。」

順番に先生の助手になる生徒が、先生の尻を後ろから押し上げる。と、ライスカレーは顔を紫色にして、金棒の上から生徒たちを見下す。

「三でこう云ふ風になる。四、體を上に撥ね上げる。」

さう云つてる先生の體は一寸も金棒を離れない。

「五、」

先生はボトンと滴のやうに金棒から眞下に落ちる。それから改めて前の方に跳躍する。

「五で棒から離れると同時に、一度下へ降りないで跳躍する。その際、踵を地につけてはいかん。おい河野。やつて見い。」

五年の中學を十年かゝつて出た、そして十年間とも體操丈けは滿點續きであつた河野が出た。

先生より比較にならぬ程うまい。

「その要領でよろしい。分つたか。順番にやつて見い。」

英語の先生がゐた。「モンキー」と云ふ仇名であつた。此若い教師は三年以上のどの生徒よりも英字が下手であつた。

「最初、その黙線の上をインクで塗りつぶす。それを幾度もやつてれば上手になる。」

總てがこんな調子であつた。私は學校ほどいやなものはない、と思ひ込んでゐた。

こんな生徒を子供に持つた、私の父がどんなに心を碎いたであらうか。

そして、中學を出て幾年生死不明の放浪の揚句、監獄へ入つたりして出て來た私であつた。

「黙つて見てゐるものぢや。親で子供の可愛くないものはない。だが、可愛いゝと云ふ事を云つたり、して見せてはいかん。」

と父は云つたが、私の放埒にその言葉の因があつたのかも知れなかつた。

「お前のやうでは一人立ちになつても、飯が食へない。考へんけれやいかん。」

私が絶對に「一人立ちで飯が食へない」と思ひ込んでしまふまで、父は此言葉を繰りかへしたものであつた。

生意氣盛りの私は、一方では空想丈けの世界に飛んでゐたが、一方では「俺はどうすれば飯が食へるやうになるだらう」と憂欝に考へ込んでゐた。

けれども、「お前は大きくなつて何になる」と問はれても、他の級友の誰もが、齒醫者になるとか、總理大臣になるとか、ハッキリ答へたのに、私一人には分らなかつた。

私の空想の世界では、此地上の汚れた一切の職業につきたくなかつた。

大人や級友たちが、「食へるか、食へるか」と、のべつ幕なしにその事を考へてゐるのが、私には癪に障つた。

「さうめそ〳〵するない。今だつて食つてるぢやないか。いよ〳〵食へなけやその時のこつた。泥棒でも何んでもやらあ。」

私はさうどなりつけてやりたかつた。

私はその時分の嫌ひな奴は今でも思ひ出せる。馬鹿のくせに腕力許り振つて、何かの勢力を欲しがる奴等だとか、何かしら野心を持つてゐて、しよつ中誰かにおべつかを使つてる奴、笑ひも憤りもしないで、鹿爪らしい顏をして無暗に几帳面な奴。成績がいゝと云ふのでそれをもつとよくしようとして、愚劣な教科書に夢中になつてる奴。そんな連中と私はつき合はなかつた。

私は私一流の戀愛に打ち込んでゐたので、外の事は餘り考へなかつた。私は物事についてはヅボラを極めたが、好惡、憎愛の感じは明確を極め過ぎた。「どうでもいゝ」と云ふ感情は、私には無かつた。

父が私を愛してゐた一つの例は、私の濫費が過ぎて——私たちの貧しい生活には——方法のつかなくなつた時、

「お前も金を儉約しないといかん。」

「家を賣つたらいゝぢやありませんか。」

「うん。」

さう答へた父は、老後をそこで終へる積りであつたゞらう家を、三百圓に投げ出してしまつた。

「ここに一番終ひの金が三百圓ある。これでお前の一人立ちの生活が始まるか、破滅するか、どつちかだ。」

それを父は私にそつくり與れた。私は一ケ月の間にそれを女に注ぎ込んでしまつた。それから「破滅の生活」が始まつたのだつた。

父はたつた一人の子供の私を行衛不明にしたまゝ、火鉢の前に置物のやうに坐り込んで、貧しい晩年を送つた。

私は晩年と云ふものはそれでいゝと思つてゐる。若い、冒險心や空想の旺んな時に晩年染みた生活

をするならば、それは生活ではないのだ。

父と私との生活と、私と私の子供たちの生活との間には、何と云ふ劇しい變化があるだらう。時代がそんなにも甚しい斷層地震を起したのだつた。

父は私を連れて鰻釣りに行つた。父は非常にそれが好きであつた。私も數重なる中に好きに上手になつた。

朝から晩まで、小川や大河や溝などを二人は全く默つて、流れの石垣に釣を差し込んだ。時々、父は私に云つた。

「俺も黑かつたが、お前も黑いなあ。」

私たち親子は金佛樣のやうに、黑光りでピカ〳〵してゐた。

「腹が減つたなあ。」

「うん。」

田舍の橋の袂などにある餅屋で、大福餅を買つた。その銅貨は胴丸の中の鰻をかきわけて取り出すので、ぬる〳〵になつてゐた。

親子は默つて堤防の上へ腰を下して、うまく食つた。

父は私が側にゐるのを喜んでゐるやうだつた。始末のつかない空想家の、物覺えの惡い、どんな冒險でも默つてやらかす。だが、體格のいゝ、盜棒見たいな子が側に坐つてゐる。「こいつは一生涯自分で飯が食へつこはない。そうすると、こいつは何かやり出す。泥棒でも人殺しでもやる。そいつが未だ兎に角くかうして俺の側に居て、默つて鰻を釣つてゐる。こいつは鰻釣りを商賣にさせるのが一等かも知れない。」

父はさう思つてるやうだつた。

私も鰻釣りでなら飯を食へる自信があつた。百匁三十錢もする鰻を一晩で三貫目も釣る事などよくあつたから。

そんな思ひ出は、田舍大福と同じやうな素朴な味で、いつまでも私の心を和ませてくれる。

私たちは父の許で暫く休息したかつた。そして嘉坊の弟か妹も、そこで產み度かつた。然し第一には經濟がそれを許さなかつた。第二には自分自身を持ち上げるのに困る父を、子守や何かに手傳はす破目になりさうだつた。で、仕方なしに、あの破れた胴丸見たいなのでも、兎に角く足溜りあるN市に退却しやうと極めた。

そこで直ぐに旅費が問題であつた。

此時代の生活苦。それは父が私に言つた「破滅の生活」であつた。「一人で食へない」私が、妻子を引き連れてゐるのだつた。

「よく坊やたちが育つて來たことだ。」

私でさへさう溜息と共に考へる。どうして切り抜けて來たか。どうして凌いだのか。

それを思ひ出すのに、どんなにいきんで見ても思ひ出せない、それ程こみ入つた、苛々した、刹那的な、熱病に浮かされてゐるやうな生活であつた。

此時の旅費はK市に住んでゐた、K氏の處で借りた。その人は私をセメント會社に世話して、手を嚙まれた」一人であつた。

私たちは前の旅行で、旅館の不經濟に懲りたので、寢ながら行ける汽船を選んだ。

門司から、六千噸のアメリカ丸の三等に乘つた。

嘉坊はすつかり喜んぢやつた。すつかり單純に喜ぶのを見てゐると、私は涙を流しながら笑ひ出した。

「これが嘉和の、成長してからの唯一ののんびりした思ひ出ではあるまいか。」

と思つた。私が獨立？してからの生活と云ふものは、朝から晩まで自分の食ふ米の粉に頭からまみれて、息も吐けない米屋の小僧とそつくりだつた。

食ふものはフンダンに市中にあるが、自分たちには無い。

私は、嘉和にも民雄にも、父と祖父とが田舍餅を堤防の上で食つたやうな、そんな風なのんびりした思ひ出を與へたかつた。

逃げて行くパンと、追つかけて來る飢餓との間に挾まれて、狂氣のやうに驅け續ける生活の「思ひ出」許りでは、迚も堪らない。

乘船の日は晴れてゐた。海は凪いでゐた。

門司には大きな船の着く棧橋が無かつた。沖がかりの本船へランチで移るのだつたが、ランチは大きく搖れて、女や子供たちは乘り移るのに困つた。

船は正午に、ボー、ボーと吠えて出帆した。コースは門司から神戸であつた。

三等船室はガラ空きだつた。大抵の客は門司か下關かに降りて終つたからだ。

嘉坊は廣い中デッキのハッチの上を、自分の運動場の積りで、跳ね廻つて遊んだ。時々は甲板に出て、疲れて初めて見る海からの景色に見惚れてゐた。

私も數年前まで大きさは同じであつたが、古さではひどく年老つた、客船上りの貨物船でセーラーをしてゐた。

寒い海の風に吹かれるのも久し振りであつた。

アメリカ丸のセーラーたちが、アンカー揚げのスタンバイを濟まして、おもての巣へ下りた後、私はトップに立つて、息の詰まるやうな空氣を深く吸ひ込んだ。

その船はボースブリットが突き出てゐて、船首には金色の鷲が羽根を擴げてゐた。上から覗くとトップで切る波が、サイドの兩側へ、白孔雀の擴げた羽根のやうに飛び散つた。

一時間も私が立つてゐると、コーターマスターが、鷲の金色の羽根を取り外して、持つて行つてしまつた。

ワザ〳〵羽根を擴いで航海する客船には皮肉を感じた。それに較べると貨物船では、すつかり引き捲られた烏見たいな格好で、堂々と恥かし氣もなく押し廻るのだつた。

嘉坊は自分の父が、哀れなマドロスであり、哀れなプロレタリアであり、嘉坊自身を何時取り落す

か分らない、虐げられた保護者であることには何の懸念も感じてゐなかつた。

たゞもう船を享樂してゐた。嘉坊のデッキの上の樣子はおかしかつた。

海は瀬戸内の凪と來てるから、他に比を見ない程靜かであつたが、船は、勇んだ馬のやうにブルブルと身顫ひをしながら進んだ。その動搖に連れて坊やは、前後左右へよろけた。その眼を不思議さうに一杯に見開いて、父や母を眺めた。

「何だつて此お家は搖れるの？」

と聞いてるやうだつた。

名古屋の家も搖れはしたが、矢張り船ほどでは無かつたと見える。

嘉坊は搖れながら、よた〳〵と飛んでも無い方に歩いて行つた。ウィンチや、ペンチレターや、スチームパイプやピットや、サイドレールなどは、全く嘉坊を驚かした。

困つたのは、サイドレールに摑まつて、足を海の上へ出さうとする事であつた、坊やにして見ればお藥師樣の「お猿さん」の柵に昇るのと同じであつたが。

私は坊やの帶をしつかり締め直して、買物の荷造り見たいに、帶の間に手を挾んで摑まへてゐた。

どんなに無風であつても、デッキの上は寒かつた。が坊やは陰鬱な船室には仲々入らうと云はなか

つた。

午後になつて風呂が湧いた。風呂の湯が湯槽の中を、あちらの隅こちらの隅と集る毎に、その湯に押されて嘉坊はゆら〳〵した。

「このお風呂は何だつて坊やを押すの。」

と訊ねたいやうな顔は、朝湯で紅くなつて可愛かつた。

風呂から上ると夕食であつた。一枚五十錢均一の盛り澤山の洋食も取つた。バナナは臺灣で積み込んだ本場物があつた。

汽車では坊やの怠屈と不自由を防ぎ切れなかつたが、船では運動をした揚句、お風呂にまで入つてゆつくり足を投げ出して飯が食へるのだつた。

汽車と汽船。

だが同じ汽船にも客船と貨物船があり、大きいのと小さいのがあり、古いのと新しいのがあり、客と船員とがある。

私は此船のセーラーたちを見て、その服裝がキチンとしてゐるのに愕いた。と同時に同情もした。客船であるがために荷役やハッチのライシンなどは樂であらうが、無けなしの金で服裝を拵へなければならない。洗濯も忙しいだらう。天井のシャポン拭きやペンキ塗りでは、しよつ中顔中をバリ〳〵に硬化さすだらう。

スピードを落さないためには、罐は澤山の炭を食ふ。コロッパス、火夫の忙しさはそれに正比例するのだ。

私は骨も筋肉も痺れるやうな、何でもいゝから病氣になつて見たい、と思つたマドロス時代を考へた。

あの時代には女房も子も無かつた。それで今よりは幸福だつたか。死ぬやうな目に幾度も會つた。

今は女房子が出來てしまつた。死ぬやうな目が復數になつた。

私は父の心配と憂鬱が此時代になつて分り始めた。

——子供の世界と大人の世界は違ふのだ。人に食はせて貰ふのと、人を食はせるのとは、考へ方も感じ方も違ふのだ——と。

六千噸級の客船に乘つて「旅行する」と云ふ事實は不愉快である筈が無い。

宛ての無い、どこへ流れ着いたにしても食ふ宛てのない旅が、愉快である筈がない。

此二つの愉快と不愉快とが、時々離れ〴〵になつたり、くつつき合つたりして、蝶々のやうに私の頭の中を舞ひ飛んだ。

「今丈けはいゝでは無いか。クヨ〳〵するな。向ふへつけば向ふの風が吹くさ」

と、自分で抜け出してしまつた。だが、もう苦勞、心痛と云ふものは、私を形造る血液や肉の組織の中に入り込んでしまつてゐた。それは「諦めた」と云つても「諦らめられぬ」ものであつた。

喜和子も幾年振りかで、こんな大きな汽船には初めての船旅だつたので、大きな腹を持ち扱ひながら、それでも晴れ〴〵とした顏をしてゐた。

都市の最惡、最低の、メタン瓦斯發生所見たいな塵埃から、汚れのない海の空氣を吸ふことは、私たち親子の體に、新鮮な血と肉とを與へた。

捨てた犬が戻つたやうに、私たちは又名古屋に歸つた。

「あなた方が發たれた朝なも、警察の方が見えてなも、Hが發つて行つたからうるさい者拂ひをしてえゝだらう、と云ふでなも、腹が立つたで、「ええ、だけど又直ぐ家賃が上つて來るで、かへつていけませんわいも」つて云つてやつたぎやあも。」

と、隣りのおかみさんが云つた。そして、飯を炊いて持つて來てくれた。

「えゝ、私はどこまでも此町へこびりついてやる積りですから、又、よろしくお願ひしますよ」

と私は云つた。

そしてその後間も無く、又候監獄へ行く事になつた。（未完）

海底に眠るマドロスの群

一

海底には、どの位の人間の屍體が沈んでゐるであらうか。航海中の悪疫、投身、激浪に浚はれ、或は又、船と共に沈沒し、又はボートで本船を離れたまゝ行衛不明になつた人々。

死は永遠の休息であらうか。

若し、死が永遠の休息であるならば、私はたとへば、暴風雨に吹き折られたマストのやうに地上を支配する不合理な……から吹き飛ばされた、多くの友の死を歡を以て送るべきであらうか。

沈沒した歌仁丸に、私の知つてゐるのは酒卷と云ふ二等機關士丈けである。

酒卷は、私と萬壽丸に乘り合せてゐた時は火夫長であつた。

彼は、職業柄でもないだらうが、スライス・パーに似て覆せてゐた。

彼は、子煩惱であつた。彼は七人の子供を持つてゐた。

私は、彼を憎んでゐた。彼は火夫やコロッバスたちに、月二割の利子で金を貸してゐたからだが彼は貧乏だつたさうである。

酒卷は機關長や、船長を恨んでゐた。それは給料や仕事の辛さがひどく違ふからであつた。

船長や機關長は船主を快よからず思つてゐた。それは絶えず陸上にゐて、海の危險と云ふものを知らないし、自分の持つてる船が、どの位恥しいボロ船であるか、知りもしない上に、木材はタンブル丈けで足りないで、ブリッヂと同じ高さまで積み上げるし、石炭雜貨は保險マークも糞もあつたものではなく、三分の一沈沒させた上で出帆させるのである。

日本の太平洋沿岸は、百六十數浬の間、金華山から館山までは、避難の出來る港は一つもない。

そこは世界一の難所である。

狂氣のやうなサイクロホンが襲ふ。濃霧が息苦しい程の稠密さで蔽ふ。潮汐が悪い。

燈臺が少い上に悪い。

世界一の難所を持つ日本は、又、世界一に古船を買ひ込む。從つて、海難率は「名譽にも」世界第一位か第二位である、とロイドの調査は示す。

世界一の難所に、世界一二の海難率を以て乗り出し、七人の子供の親であり、扶養者である酒卷は「必然に」「永遠の休息」に就いた。

冷たい、寒い、息の詰る、魚か海獸で無ければ呼吸の出來ない、太平洋の怒濤の下に！　それが一杯丈けでなく二杯の船が、その全乗組員と共に、沈沒して「永遠に休息」してしまつたのだ。

私は、私の知つてゐる。船友に就いて物語りを進めやうと思ふ。私の言ひ度い事を、私は先に種明かしをして終はう。

これこれの人間はこれこれの過去と環境を持つてゐた。そしてこれこれの未來を獲るために努力した。

そして、その總ては、彼の死後の生活をでなく、現世の生活に今少しの希望と、人間らしい生活を攫まうと努力した。が、彼の努力にも拘らず、彼の希望を破壞した最要の條件は、「人間の生活を基礎にする代りに、投資家の利益を基礎にした」ことにあつた。

海と云ふものは、氣の代り易いものである。それはいつ暴れ出すか知れない。全く字義通りの「お天氣者」である。

風の日には、彼女は何者よりも美しい。彼女の嘶きは、最上の愛の睦言である。微風を使者にして彼女はキッスを送る。

海岸を訪ふ者も、又、絶えず海の上を生活の土臺とする船乗りたちも、彼女の愛を受けると、その清い息吹きに深い吐息をついて微笑まずにはゐられない。

彼女の着物は時々刻々に着換えられる、朝も晝も、お茶の時間も、夕も夜も。

どんな贅澤な貴婦人でも、彼女程多くの着換えを持つてゐるものはない。そのどの着物も彼女には全く似合ふのだ。

だが憤り出すと、ヒステリーの女よりも始末が悪い。そしてまた、實によく彼女は憤り出すのだ。

世界一の巨船だつたタイタニック號の夥しい乗客も、ノビレ少將を北極に救けに行つたアムンゼン翁も、また私が書かうとしてゐる歌仁丸、寶林丸の船員たちも、殆んど何等の遺骸をも殘さずに、永久にその胎内深く飲み込まれてしまつたのだ。

金華山の燈臺を右舷に見たのが、午後の仕事のかゝりであつた。

午後の仕事はアフタービークのセメン塗りであつた。

晝飯後の午睡から、密着した膏藥を引つ剝すよりもひどい痛さで、おもてのセーラたちは引き起された。

そこで、彼等は各々、スパナーを提げて船尾の倉庫へ行き、アフタピークへのガットのナットを緩めにかゝつた。

ナットは、水夫たちよりも、もつとグッスリと、ボールドの上に眠りこけてゐた。

セーラーたちがブツ〳〵云つて起きるやうに、ナットは始めガリ〳〵云つて厭がつたが、終ひには默つて、體をひねくらせながら起きた。

ガットが開いた。

「オイ、蠟燭を先に下して見ろ。」

とボースンが、大きくて飛び出してはゐるが、威嚴のない人のいい目を光らせて言つた。このボースンは、若し役者が衣裳屋から買ふとしたならば、隨分、高價を拂はせられるに違ひない、立派なカイゼル髯を生して居た。が、その立派な髮もボースンをカイゼルのやうに威嚴を帶びさせる代りに、滑稽に見せた。

何故かつて、ボースンは、セーラーたちの言ふのに依ると「背の低さが高い」のだつたから。精確に言へば、身長が五尺に二寸足りなかつた。

然し、このボースンは、その事で、セーラーたちから輕蔑されてはゐなかつた。愛嬌があると云ふので反つて好感を持たれてゐた。

アフターピークなんて、地獄との境見たいな處に追ひ込むのも、ボースンのせゐではなかつた。

「どうして蠟燭なんか入れるんだね」

と、前航海に横濱で繰り上つた許りの、ドバスが訊いた。

「毒氣があると不可ねえからな」

「そんなものがある事があるのかね」

「まあ、蠟燭を下して見ろよ」

そこで、ドバスは蠟燭の胴を縛つて、ピークへ下した。

灯は淋しい光を放ちながら、ピークの底まで達した。

「よし、毒氣はない、入れ！」

セーラーたちは、セメントの鑵とブラシとを提げて、ロープを傳つて船底に下りた。

長い間の密閉と、寫眞室よりも暗い闇と、そのジメ〳〵した秘密とが、蠟燭の微かな光に曝されて、

鬼氣とも云ふべきものを皆に感じさせた。

そこは子供の貯金箱に似てゐた。此鐵製の空洞は上部に人間一人が辛うじて入れる小さなガットを持つてゐる丈けで、それも數年閉されつ放しになつてゐた。

その箱の眞後ろでは、プロペラーが水を叩き破る音が轟くので、セーラーたちは、叩かれる太鼓の內部に居る程、耳を毆られた。

此半分以上海水の中に沈んでゐる、鐵製の空洞の內部には、何かしら目に見えぬ白い粉のやうなものが一杯、充滿してゐるやうに思はれた。

白い粉のやうなものは、蠟燭の光りに薄暗く三尺四方位に、その氣配を見せた。然し、それは白い粉ではなくて、濁つた空氣と、餘りにも深い闇と、冷たさとを照す蠟燭の光線の姿であつたのかも知れない。

それは鬼氣であつた。

鬼氣と云ふ言葉は變ではあるが、マドロスたちは、太鼓の內部のやうに騷しい空洞の中で、此上もない靜けさを感じた。

それは、魂を、冷たい海の水と、凝結した闇黑な空氣とに似た布で攫まれるやうな、無氣味さであつた。

波田は、ガットの下の、それから下には光の及ばない、二間餘りの高さのプレイトの上に下りた。

プレイトは三尺許りの長さで、ピームから突き出てゐたが、それは船の動搖に從つて、飛行機の翼と同じく搖れた。おまけにプレイトは、一瞬の間も乾いた事がなく、數年間濡れ續けてゐたのに違ひない。

言はゞ、象の耳のやうに急激に方向を變へるそのプレートから、辷り落ちないためには、片手は絕えずピームに攫まつてゐなければならなかつた。それに、セメントの入つた重いバケツを下に落すと、西澤か、小倉かの頭に落ちないとは限らない。それを彼は足で抑へた。

それは曲藝であつた。彼等の手は必要に迫られると、手品師でもそれ以上は曲るまいと思はれる程に曲り、彼等の足は猿のやうに、その裸の指で攫んだ。

一方の手は、セメントを含んだ手箒でサイドブレイトを、ピチャピチャと叩いた。

マドロスたちは、今、自分たちがセメントを塗つてゐるサイドプレイトが、どんなものであるかと云ふ事を知つてゐた。

それは陸上にあるどんな建築のペンチングよりも、壁に塗るセメントよりも重大な作業であつた。

船を護るその鐵板は外部からは海の怒濤が洗ひ、海草や貝類を附着せしめる。が、内部からも、永久に乾くことない濕霑と、永劫の暗黑と、凝結した鬼氣とが腐蝕せしめるのだ。

ゴム鞠のどこか少し許り破けても、それは撥まなくなるやうに、船のサイドのどこか、――水面以下では、破けても船は浮ばなくなるのだ。

彼等の修理してゐるサイドプレイトは、全身に深く、長く、執拗に行き亘つた病毒が、皮膚に現はれるやうに、濕疹の症狀を呈してゐた。

「おい！　賣れ殘りの淫賣の面に白粉をなすりつけてゐるやうな氣がしないかい！」

下で、西澤が號令でもかけるやうな聲で、小倉に叫びかけてゐるのが、太鼓の音に混つて波田の方まで微に聞えて來た。

「全くだ、方々から膿が出てやがらあ。」

と、小倉が喚きかへすのが聞えた。

下の二人の叫び聲は、淋しさと、マドロスだけが内心深く秘密に蔽ひ隱してゐる不安とを、胡麻化して追ひ散らすためのものだつたが、それは効果はなかつた。

三人のセーラーたちの不安や寂寥を追つ拂ふためには、絶えざる饒舌が必要であつた。が、スクループロペラーの轟音と張り合ふ丈けの聲量は、マドロスと雖も持ち合せてゐなかつた。

胡麻化し損ねた後の、捕へ難い厭な感じは、何かの中毒患者にその藥が切れた時と同じく、憂鬱極まるものであつた。

空氣の流通は、ボースンが蠟燭を下げさせて見た程惡かつた。そのため丈けでも彼等は頭が痛かつた。その上に騷音があり、濕氣があり、鬼氣があつた。猶、一層惡い事には、そんな場合に限つて、彼等は自分の身の上と云ふものを振り返つたり、行く先を想ひ見るのであつた。

彼等の思ひ出は、茫々に於ける女や酒ばかりで鏤められてゐる譯ではない。さう云つた思ひ出の多くが勿論ある。

だが、それは「おもて」で餘りにも多く語られ過ぎてゐるのだつた。

現實の生活が單調であつたり、無聊であつたり、又は空虛であつたりする場合、人間の生活は現實と空想とが、その位置を轉倒するものだ。牢獄であるとか、病氣での長い臥床であるとか、又は何不自由のない贅澤な生活の中に於てであるとか、マドロスの無聊な航海の間にも此現象が現はれる。

マドロスにとつて、最も惡い空想が現實の姿を取つて現はれるのは、曾て同じ船に乘つてゐた同志

の顔や姿の出現である。殊にその同志が行衞不明になつたとか、又は沈沒して終つた船に乘つてゐた、とか云ふ場合である。そして、マドロスの經驗のあるものは誰しも知つてゐる事であるが、さう云ふ場合が少くないのだ。

そう云つた風な場面が、アフターピークのセメン塗りなどの場合に多く生じるのだ。

過去に何等のさうした薄氣味の惡い、不吉な回想を持たない者にしても、例へば波田の場合のやうに、マドロスになつて間もない者の場合でも、その作業の性質と、場所と、限りない自由奔放な空想の翼を與へる。

それは恰度、彼が波に乘つて、搖り上げられ、投げ落されてゐると同じやうなものである。

波田は、西澤の言つたお茶挽きの淫賣の顔のやうな、サイドプレートに、セメントをピチヤピチヤと塗つてゐた。その飛沫は彼の頭から、顔から腕、體から踝の足まで、動搖のために、雨のやうにかかつてゐた。

そして、冷たさに體中は空船の時に船が感ずる小刻な自震動をやつてゐた。

だのに、どうだらう。その見窄らしい平カチのマドロスの空想の世界は！

波田は、二千四百トンぽつちのインダラカーゴ船長を輕蔑してゐた。

「俺の欲しいのは、地位でも名譽でも、金錢でもない。」

と、彼はいつでも昂然として言ふのだつた。

「ぢやあ何だい？　女かい。」

と西澤が言つた。

「いや、俺の欲しいのは自由だ！」

「そんなものが便所の中にあるのかい。」

「お前は混ぜつかへすからいけない。どんな境遇にでも自由はある、と考へ得る境地に俺は到達したいのだ。」

「えらい！　さすがは波田だ、えらいぞ。俺だつて、そんなうめえ「境地」とかにトウタツしてえや。」

「それは、思ひ込みさへすれば譯なく出來る事だ。たゞ、人間共は慾が強過ぎるから覺らうとしないだけなんだ。」

「さうだ！　ビフテキの代りに自由を胃の腑に、女の代りに自由を抱き、眠くてならねえ時に自由の眼を擦つてりや、世話あねえ事あ世話がねえなあ。」

「ビフテキも、女も、睡眠も欲しくないと覺つたらどうだ！」

「そいつあ土左衞門さ」

波田は、自由を求めてゐた。そして彼は完全な自由を得たと思つてゐると、未だもう一晝夜も自由の夢を見てゐたい深い眠りから叩き起されるのであつた。

彼は自由に手足を延ばす代りに、セメントとペンキだらけのゴワゴワの言はゞトグン板に近いオバーオールを身につけてゐた。

それでも猶、彼は救はれる見込みのないロビンソンクルーソーのやうな格好をしながら、チベットには自由があると空想してゐた。そこは、このアフターピークの空氣見たいなものでなく、太平洋の上を一杯に蔽つてゐる空氣のやうな、大きな自由、澄明な自由があると思ひ込んでゐた。

しかし、彼も、現在自分がアフターピークの中で、睡眠不足と、惡い空氣と、過勞と、性的に非常な不自由の中にある事を、自分に隱し終せる譯には行かなかつた。

「胃の腑にや、自由よりやビフテキの方が、ほんとにいいらしい。」

と、波田は思はないではゐられなかつた。すると、彼は、自分が船中で一番慘めな一勞働者に過ぎないと云ふ事が解つた。

――俺は、自分が慘めだと思ひ度くないために自由だなんかと云つてるのではあるまいか。自由と

は何だ？　空氣のやうなものか。空氣だつてガットで閉められりや腐るぢやないか――

殊に、波田は、陸に殘して來た戀人の事を考へると、自分から打ち壞した陸上の生活の方がどの位自由であつたかを、いやと云ふ程覺らざるを得なかつた。

彼は自由と、現實との間をローリングしながらセメントを腫物の上に塗り續けた。

三時間の後、作業は終つた。

ガットから這ひ出したセーラーたちは、粉まみれの飴ん棒見たいにセメントに塗れてゐた。

「なん間が惡いんでせう」

と西澤は言ひながら手巾を海へ投げた。三人のセーラーたちは「おもて」へ歸つて行つた。

二

未だ日は高かつた。

三陸の海岸が、他所他所しく、遙に右舷に連つてゐた。

小倉と西澤とは、濡れた仕事着を着換へるために「おもて」へ入つたが、波田は着換えは寢間着用の浴衣以外は、たつた一枚しか無く、それも罐上に乾してあつたので、ブルワークに凭れて、遙の

海岸を眺め入つた。

——陸と海とは何と云ふ違ひのある事だらう。陸から海を眺め、靜に辷る船を眺める時は、あんなにも船は美しく、憧れの的だつたのに、今、海から陸を見ると、何と云ふ神祕な陸だらう。あの陸こそ、俺が求めてゐた自由のチベットのやうな優しい、夢見るやうな姿をしてゐるではないか——

そんな風に波田は感じながら、いつまでも陸岸に見入つてゐた。

三月の上旬であつた。風は寒かつた。

空は楊子江河口の海水のやうに、一つのむらもなく一面に曇つてゐた。それは神經病に罹つた患者が、絶えず頭の痛さに攻められながら、ムつと押し默つてゐる不機嫌な表情に似てゐた。

神經病患者が發作的に何をやり出すか解らないやうに、こんな表情をしてゐる空は、海と共謀して、どんな事をおつ始めるか、氣象臺でも見當のつかない事が多かつた。

波田は濡れた仕事着でブルワークに凭れながら、ガチ〳〵齒を噛み合せてゐた。

彼の戀人は、この海續きの日本の南端で、彼の事を思ひながら、海岸に遊ひ出てゐるに相違ない。

そして一日も早く、波田が世帶を持てる丈けの收入を得る地位になるのを待つてゐるのだ。

「妾は小學校の先生になる試驗を受けるやうに勉强して、いつまでも待つてますわ。」

と、波田の戀人は別れる時に言つた。

——あの廣い、夢のやうな陸に、俺の世帶を持つだけの隙間がなかつた。この廣いヨーロッパにも、南米にも、北極にも續いてゐる海の上にも、生活苦のない隙間と云ふものはないのだ。俺は自由を求めてゐる。だが、それは生活を押し潰す自由ではない。俺が土左衞門になつて始めて得る自由ではない。生活を樂しみ得る自由でなければならない。俺は空想丈けでなく、自由を得る實際の方法を、小學敎師の免狀を取ると云ふ榮子のやうに、實際的に考へねばならない。

波田は考へてゐた。

「おい！　何を考へてやがるんだい。ハッチのライシンだぞ。」

頭の働は、再び筋肉の働きへと振り換えられた。

「何だつてこの風に、ハッチのライシンなんかやるのかい。」

「見てろ！　今に、どでかいしけが來らあね。世界一の難所を通る時や、そのやうに準備しなきやいけねえ。」

若し陸であるならば、先づ樹の葉をそよがせ、次いで梢を搖ると云つた軟い風が吹いて來た。

「何だい、こんな撫でるやうな風が。」